文藝時論集

青木一実 著

康德十一年刊

青木実著

820
25

101748

文藝時論集

奉天 大阪屋號書店版

文藝時論集

目次

時論抄

今日について……一
大東亞戰爭と滿洲文學……八
苛烈なる個性……一二
※
東亞日本人の地位……一七
滿洲日本人……二六
或る座談會記錄から……三三

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31 lines

勤奉運動について……四三
※
文化時評……五二
様々な想ひ……六七
非常時の感想……七五
言葉について……八四
主流よりの逸脱……一〇〇
※
職場と藝文……一〇八
戰爭と文化……一一八
農村への宣傳……一二三
宣傳と知識人……一三一
宣傳對象としての滿農……一四五
郷土意識について……一六七

控へ帳

一年匆々……一七三
收穫と婦人たち……一七八
食と藝文と……一八八
河について……一九一
このごろのこと……一九八
長生きについて……二一〇
奉吉線にて……二一三
營口にて……二一八
思ひ出など……二二二
ふるさと東京……二二七
映畫について……二三一

農村報告

聖燈族瀰るところ……二三六
臨安の一夜……二四九
綏化への旅……二五九
實驗農場の一夜……二六五
北の旅から……二九〇
鐵道自警村・點描……三〇〇
村の聽書……三一〇
綏化行……三一七
あとがき……町原幸二……三三五

裝幀　宇高菖夫

論抄

今日について（文藝時評）

一、確信について

大東亞戰爭勃發以後の、日本文學界の動きをみてゐると、大雑把なところ、一度はペンを劍に代へてとさはめきたつたものゝ、そのいきごみはどことなく持つてゆきどころのない一種の空疏なものを傳へ、最近ではふたゝび、文學者はいよ〳〵のお召しを受けるまではペンをとつてゐるより仕方のないものだと、机の前に立戻つてきた感じであり、さてそこで生産されるものは、なんの奇異もない私小説であつたりまた傳記にいささかの會話を混へてなんとなく色をつけて小説めかした傳記小説といふものであつたり、それからまた南方に從軍した作家たちの、大して從來のその世界觀なり、觀念から脱けだしたとも見え、

今日について

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled × 31 lines

ない、從軍中の自己中心の雜報小說や、一部分は、戰記文學であつたりしてゐるが、その南方での體驗なり、攷究や新しい視野を開拓した悠大なる小說らしいものは、いまだその萌芽も現はれてはゐないといつた始末であり、かくては、大東亞文學の呼稱もいつになつたら名實を具備することやら、甚だ覺束ないといつた有樣である。

最近日本へ行つてきた或る人の話によつても、ある作家は徵用令の下りはせんかといふ恐怖の前に机の前にも落着けないといつた風であつたり、農民文學の雄を以て鳴る作家兼地主は、自己の土地の小作人を求めるために縣廳に驅けこんだりといつた有樣は、少くとも文學者としての醜體といはねばならぬ。またある作家は、十數冊の著作を引受けつつ、尙更に註文を引受けるといつた如き、いかに商賣とはいへ、淺ましき限りといつてもいいであらう。

もはや安閑とペンをとつてはをられぬといつて起ち上らんとしたこと自體は、既に文學者として現下に在ることの、內面の確信の喪失を物語るものといふべきである。

而して起ち上らんとしたものゝ、ふたたびその腰が崩けて、結句文學者は机の前に向ふより最善はないと引下り、その惰性によつて生產される文學に、我々はなにを期待しうるであらうか。

苛烈なる戰局の下、負託にこたへる內面の自信なき作家は、自ら進んで工場に、農村に還元し、生產力增强に寸志を致すべきではなからうか。自ら汗し努めることによつて、勤勞者の心情を體得し、あらゆる生產の場に起つことによつて視野を擴大し、物を生むことの尊さをつぶさに味ふことは、後の日再び机の前に立ち戻るときの收穫となるであらう。但し生產の場に就いてもはや作家としての文學精神を磨くことも能はず、疲れてしまつたものは、これはむしろ一種のふるひにかけられたものと見なしてもよい。

二、滿洲の作家道

滿洲の作家たちは、大部分は文筆で自活し得てゐない。彼らは勤勞者であり、その餘暇文學的精進をなしてゐる。

まづ彼らは勤勞者である限りは、勤勞者としてその屬する職場々々に於て、指彈を受けるやうであつてはならないであらう。文學をやつてゐることは、なんら特權ではあり得ない。遲刻も早退けも欠勤も正當の理由なくして、これを見逃さるべきではない。

職場をもつ勤勞者として、完全であり得ずして何の文學者顔を許されるであらうか。もし二股大根であることを自慰し、職場に於て不完全、文學作品も不完全（といふことは一つの過程として許されるとしても）であり乍ら、その不完全を、職場をもつことを以て遁辭ともするならば、これはもはや許しがたい。

職場をもつ作家が、職場に於て遺憾なく働き得ずして尙も文學的研磨を行ふといふならば、斷乎として職場を辭さぬ限りは、まづ文學を捨てて、職場の忠實な働き手に立ちかへるべきである。今日はもはやさういふ倫安を貪ることは許し得ない筈である。

敢ていふならば、作家の現地派遣、諸會議の參列に於て、關係機關より職場に假に公文の傳達があつたとしても、事務を、仕事を事前に處理し、或ひは處理の圓滑が圖り得ず、山積のまゝ澁滯せしめたまゝ、派遣に應じ、參列するが如きは如何かと考へもするのである。

さらに私生活に於ても、今日ほど個々の規律の正しさの要請される時代はなく、一方に於て、安逸に誘惑されやすいときはない。かゝるとき文學者は、まづ個々に於て、家庭に於て、隣保組織に於て、いまの時代に生きゆく行き方に在つて師表たり得ねばならぬであらう。

自らを埒外に置き得る特權などといふものは有りうる筈はない。正しき清しき生き方の上に起つてはじめて文學者たり得るし、その作品活動もはじめて許されるのだ。徒らに美辭麗句を連ねるの職人と化し、職人たることに安んじて自ら卑しむごときは、愧死するところあらねばならぬ。

三、開拓文學について

「旅行雜誌」十一月號所載「開拓文學の新段階」（加藤信也氏）は、天下の愚論である。かういふものが堂々と掲載されうるところに、滿洲の雜誌編輯者の不勉强さが如實に曝露されてゐる。

その所論によれば、所謂開拓文學なるものの擔ひ手を所謂日滿の、開拓地に取材した小說も書いたことのある作家のみに對象し、而してそれら作家たちの、開拓地取材の追究性の、或ひは取擧げ方の氣紛れさを、鬼の首でも取つたやうに威丈高に論じてゐるのである

私は開拓文學の眞の擔ひ手は以上の日滿の作家たちにあるのではなく、加藤氏が敢て問

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

題にしようとしなかつた開拓地の人々特に青少年にあることを斷言したい。今日まで日本の作家が開拓地に取材したものをこれを大別すれば、第一は開拓地建設の勞苦及びその生立ちを歴史的に記錄的に書いたもの、第二は文學者が開拓地を歩いて自己の眼にふれ耳にし、感じたものを紀行風に書いたもの、第三には、建設途上に横たはる問題に取材したもの、第四は開拓問題が日本の大きな國策であるところから、これを小説にとり入れて作品の魅力を極立てようとした通俗小説、第五は、開拓地宣傳、或ひは移住奬勵小説。

このやうに種類はあるが、加藤氏が書かれるべき素材として擧げてゐる開拓地建設途上の問題も、この第三の分類に當るわけで、これらの作品の難點をいへば、問題のみがくきやかに浮かび上つてしまつて一言でいへば肉付けが足りない。詳しくいへば滿洲の氣候風土、營農、生活、さらに日本を離れてここの土に化さうとする拓士の、感情、この土へのおもひ、それらが一遍の視察者に果して摑み得ようか。もしこれが把握できず、問題だけを問題にするなら論文に書いた方がましなのである。

日本の文學者の開拓地に取材した作品は、「開拓地の樣子や、苦勞や、出來事や、などを主として內地に傳へる役目を果たすことは出來る。その意味で興味をもつて讀まれもする。內地に於ける開拓地に對する一種の危懼を體して、それに對する一應の答へを用意することは出來るが、滿洲の開拓地の永遠の運命を滿洲といふ國家の現實の中に置いて、眞劍に考へ、それを已れの問題として自己に課すことは出來なかつた所に根本的弱點があつた。これを滿洲開拓に、內地農民の問題解決はみても、開拓地の滿洲國に於けるこれからの問題を見通してはゐない」（「大吉林」四月號、秋原勝二氏）し、まして拓士の心を貫いてゐよう筈はないのだ。

このことは作家の書いた開拓地取材のもので、比較的成功したものは、紀行風の小説であり、その優れたものの一つとして實際に開拓地に生活して、そこの自然にふれた山田清三郎氏の「私の開拓地手記」であることを思つてもわかることである、

拓士の文學が「まづ最初の芽生えとして、開拓地生活の手記、または詩、短歌、俳句といつた比較的短いとりつき易い形式の作品が生まれたといふのには、二つの意味がある、一つには、建設期のあはたゞしい生活の中では、小説といつた風の比較的まとまつた形式の作品を書く時間的な餘裕に惠まれてゐないだらうといふこと、もう一つには、小説といつた形式のものが生みだされるには、やはり天惠の才能と、大きな努力と、十分な體驗、

それに加ふるに讀み學ぶことによつて得る敎養の深まりが要る」（「拓友」六月號、筆者）

私は土に生き、土に生む開拓地の生活の中から、眞の開拓文學の擔ひ手は現はれるものであり、その爲に支援し、また外部から開拓地に關心し、出來れば追究的に書かうと努めることが、我々に課せられた使命であらうと考へる。

（十九年一月）

大東亞戰爭と滿洲文學

大東亞戰爭開戰以來早くもここに一周年を迎へるに至つた。この間皇軍は海に陸に空に連戰連勝、早くも一面建設、一面戰鬪の段階に入ることとなつた。しかし乍ら建設とは、平和的建設には非ず、むしろ戰鬪力充實のための建設である。

即ち今日の段階に於ては、あらゆる意味に於て眼前の大敵、米、英擊滅のために總べてのものが集中され、米、英擊破のためには總べてのものが、犧牲にされ、忍耐されなければならないのである。

文學もまたこの例外となるものでは有り得ない。文學はその特質たる人間の感情に訴へるところの立場より、國民の聖戰貫徹、米、英への憎惡感、その擊滅について思想、感情の統一集中に向つて全面的に機能を發揮しなければならない。

また更に、銃後國民生活について、その最も龜鑑となるべきところを、まづ文學者自らが率先躬行し、それを描き、聖戰完遂について、妨害となるべき思想、行動に對し、一大精神作興運動を展開すべきであらう。

由來文學者は、その理想主義的立場より、どちらかといへば理想を描く事に陷りやすく、例へば東亞共榮圏といふ構想が現はれれば、忽ちそれに醉ひ、現實に足元を取られる怖れなしとはしない傾向が強い。

先般の大東亞文學者大會に於ては、大東亞文學の提唱となり、その創作實踐が決議されたやうであるが、それももとより決して忽せにさるべきではないが、今日最も急を要するは、眼前の米、英擊破のための、國民的感情の昂揚、銃後生活の徹底的形態をとることの方がより切實な問題であらうと考へられる。

前述の如く文學者は文學を天賦の武器として、大東亞戰爭を徹底的に戰ひ抜くことに努

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31 lines

力することこそ、與へられたる使命なりと自分は思ふのである。

あるひはこれを指して、餘りに文學を功利的に解しすぎるといつた批難を浴びせらるかもしれない。―ところで自分の文學についての信念を簡單にいはせて貰ふならば、その時代々々に在つて最も勇敢に、現實性において生きた働きをし、最も時代の進展すべき方向に即應した文學こそが永遠に生きる文學と信ずる。

文學の永遠を說いて、眼前の問題にかかずらうことを潔しとしないのが、最も純粹に文學を擁護し、文學的に生きたかの如き見解を採るものは、文學至上主義乃至藝術至上主義の灼印の下に今日に在つては抹殺し去るべき徒輩と自分は信ずるものである。

滿洲文學も亦今日に在つては大東亞戰爭を戰ひ、戰ひ拔くべき文學である。

しかしながら以上の如く述べたからといつて、スローガンを振りかざしたもののみが決して、國民の士氣を鼓舞し、國民精神を米、英擊滅に向つて强力なる一丸とならしむべきものとは思はれない。

むしろ文學に在つては、ともすれば荒廢の怖れなしとしない國民生活にとつて精神的糧ともなるべきものこそ必要なのである。といつたところで、それは何も單に國民生活を壞しませ、單なる阿片的麻痺を與へるが如きものは反つて排斥さるべきものである。

明日への勤勞の力づけとなり、豐かな精神生活に目醒めしめ、さらに大東亞共榮圈の成立に明るい希望を抱かしめることも必要なのである。即ち現實に立脚した上で生成發展すべき方向を忘れざるもの、その正しき方向を示唆すべきものこそ重大なのである。

また一方においては、銃後生活にあるまじき利己的行爲、個人主義、自由主義の殘臭に對しては、これを眞劍にえぐり出し、國民生活に反省を促すが如き主題を積極的に取擧ぐるも亦文學者に課せられたるところの一使命であらう。

在滿日系の或る一部に在つては祖國を離れて海外に在るといふことにおいて、一種安易な思想に陷つてゐるものも無しとしない。かかる傾向に對して、祖國存亡の重大性を認識せしむるが如きも今日の滿洲文學に課題となるものであらう。

滿洲國は、大東亞共榮圈の一礎石ともいはれ、また民族混在の事實より、大東亞共榮圈の龜鑑ともいはれる。ここに於て國內の指導層を以て任じられたる日系自身が最もよく銃後國民生活の活模範となり、さらに進んで他民族に、米、英擊滅の必然性並にこれが東亞民族に負託されたる天命なること、萬一にも東亞民族が今日一丸となり最後の勝利を得な

かつたならば、東亞民族は永遠に米、英の鐵鎖の下に束縛されるであらうことを悟らしめねばならない、かかる傾向を主題としたところの作品も亦文學者の當然描くべき義務の存する分野である。

また過去の史實に徴し、良く臥新嘗膽に耐へて、復仇を圖つたもの、米英の罪惡史に就いて、或ひは東亞回天を叫んで起つた志士についてこれを描くこともわが國の歴史文學の宿題であらう。

最後に自分の考へてゐる一つは、東亞民族、狹くは滿洲國内各民族の運命共同體的内容を中心とした文學作品の出現である。要するに今日の文學者に課せられたる使命は、最も現實に深く觸れて生き、しかもその現實にのみ捉はれることなく、生成發展すべき方向について示唆するところのあるものが要求さるべきであらう。

（十七年十二月）

苛烈なる個性

秋口からの風邪がどうしても拔けきらず、それに十日ほど東滿旅行をした無理も祟つてか、或る日の午後、四十度近い熱を出して倒れてしまつた。醫者からは、胸に少し故障のあるやうにいはれたが、どうしても信ぜられず、十日あまりぶらぶらしただけで起き上り、またもや新京に、熊岳城にと出張をし、その間にどうやら再び健康を取戻したかのやうである。

この間に病床で「ミヒヤエル・コールハースの運命」といふクライストの一短篇を讀み、異常な感激と興奮を覺えたのが、大きな收穫となつた。

解題でもいはれてゐるやうに「正義心を極點にまで突き進めた爲に世の秩序の嚴重な柵に衝きあたつて滅びなければならなかつたコールハース」であつた。世に正義といふものは至るところに存在し、敵も味方も口にする習ひである。正義と信ぜられるものは、それぞれの立場によつて口にされ環境によつていづれも正義であるかの如き樣相を呈する場合が多いのである。例へばルーズヴエルトの如きユダヤ金權の代表と思はるる人物さへ拔け拔けと正義を云々するのにみても解るのである。

しかし正義心は、所謂御都合的な正義の類とは異り、私情・私慣・私慾を混へない、烈々たる絶對の氣魄である。嘗て日本での義民や義俠はこれに近い心境であつたらう。コー

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

ルハースは隣領の城主の横暴によつて虐使されて行方不明になつた馬と傷つけられた下僕とのために敢然起つて、正義心を貫徹してつひに絞首臺に消え去つた。

清水幾太郎氏は「コールハースのあの激しい憤怒といふよりコールハースを堅く捕へて離さぬあの憤怒に深く心を動かされた。不正に對するこのやうに根強い激しい怒の感情は、日本人の肌には合はぬものであらうか。日本人の眼には度を越えた執拗なものとのみ映るかも知れぬ。併し不正に對する怒が強く燃え上ることは正義へ向ふ心が生れる唯一の條件である」といつてゐる。

人間が若し怒りを忘れたとしたら、これ以上哀しむべきことがあらうか、がしかし世俗といふものは往々にして人間を怒りから遠ざけ、練れた人とはどういふ場合にも怒らぬ人を指していはれてゐるやうである。世慣れた人、よく出來た人等も怒りから、遠ざかつた人の場合をいふやうである。

しかし自分はかういつても、先に擧げたやうな「私情・私慣・私慾」に發した怒りの如きを、この意味においていふのではない。社會惡に對して、不義・不正に對して、自己の利害を省みず、怒りを發し得る心をいふのである。世に怒りの途絶えたとき、人生は醜惡

101748

以外の何ものでもないだらうといふのが自分の感想である。

大東亞戰爭は、一億の民心が、米英に向つて最も純眞に、而も苛烈に、怒りが怒濤の如く燃え上つたものであることを信じる。

自分は未だ外交々渉が、煮えきらぬ外見に於て重ねられつつあつた際、新聞をみるにつけ、ラジオをきくにつけ、悶々としてやり場のない怒りをもて餘してゐたのである。

新聞は對象になる人が見えぬからさうでもなかつたが、あのラジオの一應流調で、しかも標準語らしい感じをただよはせて、得々と外交々渉について報道し而も常に米國の交渉に對する不誠意を非難しながら、いつ劍をとつて起つとも、いつ圓滿なる妥結を見ると も見えぬ(妥結の餘地は微塵もあり得ぬ)徒らな遷延に、無神經にアナウンスしてゐるかの如き耳朶を衝き來たるものに激しい增惡感さへ搔き立てられてゐたものである。時には、誠に時には、かかる妥協の餘地なき交渉に於ても、最後までの努力を試みることは國民の感情を、目指す一方に凝固さすための方策であるかもしれぬぞと、私かに自ら慰めてもゐたのである。第一流の國民たるには、人間の一人々々が苛烈無比なる個性を持たなくてはならないとは自分の信じてゐるところである。溫き湯に浸つてゐるやうな個性の

寄り集まりでは第一流の國民には成り得ない。日本は幸ひにして自然的環境が、苛烈なる國民性に向はしめてくれたとは、多くの論者の說くところで、自分にも異議とてはないがこの天惠的苛烈なる國民性が、大陸進駐乃至は復歸に當つて、再びヌーボー性に還元するかの如き傾向はないか、疑ひなきを得ない。そしてその前兆的なものを不幸にして自分は自分の周圍において痛感するものである。

このことについては、もつとゆつくりと論じなければ、讀者の十分なる納得は得ないかも知れぬし、また誤解を招く懼れもあるが、我々が日常接する漢民族は史上に存する限り、同化せんと意志したものをさへ同化してきた民族である。假に一壺の黑い水を貯へた中に、一點の赤色をしたたらしても、赤色のいかなる衷情にも拘はらず、また黑水の中で必死に赤い色に化すよう意志しても、敗けてしまふやうな感じである。

恐ろしいのはこの譬へ話の結果のみではない。未だ混合の過程に於て赤色自體が、黑色的解體作用を、黑色の影響下において營まんとする傾向である。もし自分一個の單なる妄想的杞憂であれば幸ひであるが。

大東亞戰爭は、日本の私利、私慣、私慾による戰ひではない。アジヤ十數億の民族が、日本といふ象徵を得て、數百年來の壓迫、侵略、搾取を、米英にハネかへす必然的なものである。そして古代に生きたアジヤ文化といふものが再現さるべきときが來たのである。

我々は人類の創世においてアジヤに發揚した人類の文化がなぜに西歐に盛え、アジヤに衰へたかといふ點にまで遡り謙虛に自省すべきであらう。その際苛烈なる個性といふものが古代アジヤ文化において果して在つたであらうか？といふのが自分の疑問なのである。

（十七年一月）

東亞日本人の地位

近刊の加納三郎氏著「滿洲文化のために」を讀んでゐると「（滿洲娘）のために」と云ふ評論の中で、滿洲娘の置かれた社會的な條件の一つとして、

「最後に滿洲の女性を取圍んでゐる最も特殊な環境をあげねばならない。それは女性のみならず、在滿邦人の凡てに對して、强い環境を爲してゐる。異民族の存在がこれである。滿洲では日本人であるといふ單にそれ丈の理由で、一應の精神的物質的優位が保證

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

される」

近頃自分が考へてゐることの一つ、「滿洲では日本人であるといふ單にそれ丈の理由で、一應の精神的物質的優位が保證される」がこれは果してどういふ結果を齎すか？といふ問題について加納氏がまづ觸れてゐられることを發見したが、「（滿洲娘）のために」といふ評論では、單に社會環境として指摘されただけであつて、日本人であるといふだけの理由で精神的物質的優位が保證されそれがどういふ波紋を描いてゐるかといふ問題は展開されずに終つてゐる。いま自分はそのことが影響してゐると考へられるものに就いて樣々な雜考をしてみたい。

滿洲に於て、並に東亞共榮圏に包括されるべき國々に於て、日本がその盟主として指導國家となり、從つて日本民族が指導的民族として、東亞各民族の共榮共存と、資源の開發、物資の流通、文化交流に任じるといふことは基本的には何ら問題はないし、當然かくあらねばならぬところであると信じてゐる。

滿洲國はかゝる理念のもとに既に出發した國であることもいふまでもないところであらう。而して滿洲に於て、日本人であるが故に、一應の精神的物質的優位が保證されるといふことも、精神的に指導的立場にあり、物質的には、職場に於て指導的任務にあることに基因してゐるといつて一應よいであらう。

從つてもし精神に於て指導的人格に缺けた者が、たゞ單に國家の置かれたる指導的地位のみをバックとして、指導者的權威を振りかざしたならば、それは異民族の顰蹙を買ひ、消極的反撥心を醸成せしむることとなるのも自明の理である。

自分は嘗て數年前友人たちの座談のとき、滿洲への渡航者には、船中で、滿洲生活の心得書、即ち大陸に渡り、異民族の中で日本人として生活してゆくべきための信條といつたものが配布されたらよい。日本を離れ渡滿せんする者が一應船中で、精神的反省と渡滿後の期待を持つてゐるときに、若しさういふ滿洲新生活者への信條といつたものが手渡されたならば、それは深く腦裡に刻みつけられ、滿洲を見る眼、異民族を見る心といふものが自ら異つたものとなりはしないか……と言つたことがある。そのとき自分は座中の多くの者から一笑に附されてしまつたが、今でも決して間違つたことは言つてなかつたと思つてゐる。

ところで指導的地位といふと、これは日本人の指導者顔をする人達、さういふことが直

ぐ口に出易いところでは案外効を奏せず、指導などといふことを知らない、町裏の無智なお内儀さんや、日人計何人といつた田舎の小さな町で却つて本當の意味の民族協和が育つていつてゐるといふ反證をも生むものである。

指導者といふ精神的榮譽が、自責と自覺とによつて育成すれば花開き、自負、自大とを培養土として育つと、つひには他の顰蹙を受けるものとなつてくる。指導者が指導者意識を放下し、一個の人間として自ら發する香氣のみが、初めて異民族との接觸に於て對象を動かし得るものとなるのである。

今日我々が新聞をみる、ラジオを聽く、大東亞戰爭は、米、英の百年に亘る東亞侵略の排除と東亞諸民族の解放にあると、スローガンは叫ぶ。無限の共鳴と共感が我々を捉へて離さない。しかし我々の滿洲國は既にその活模範であらねばならぬことを知らねばならぬ。建國十周年を迎へ、政、經に、學術に、幾多の輝かしい業績を持つたが、果して人と人との繫りはどうであらうか。

日本人なるが故に、經濟的優位を把持するといふことに就いて以下少しく觸れてみようこれは日本人の職能的地位が、多くの場合指導的職務にあるがためといふことでほぼ說明されるし、また日本人の生活形態と他民族の生活形態との相異が齎すところもあらう。古來より土着したものがその環境に應じた生活を持ち、而も大部分が農に依存した環境ゆゑに、文化的にも立遲れ、前封建的支配下にあつたがために、一般的には極めて貧しい生活內容をしか持つてゐなかつたといふことも言はれよう。

外來者である日本人は、俸給生活者が大部分を占め、生活水準も、日本に在つても比較的高いものが多かつたといふこと、環境に慣れないためと、その職能的地位……といつた具合に生活膨脹と社會的地位による物質的優位といふことも一應是認されていいのである。

しかし乍ら、他民族の優秀な十分職務的に有能なものには、門戸は日本人に對するのと同じやうに、漸次開かれてゆかねばならぬのである。實力が物を言ふ世界に置換へることが新しい東亞の形態でなければならない。

生れながらに持つた經濟的優位といふものが抹殺されぬかぎり新東亞の黎明は生れないであらう。

そして日本人自體にとつても、生まれながらに持つた經濟的優位といふものが、もし今

KOKUSO KOOSS-LEAF ノ-836A 7mm ruled X 31 lines

後も存するなら、それは決して幸ひとはならぬ。倫安を貪るものは身の破滅を來たす。試みに明治以降の日本の發展を考へてみても先人の心血をそゝいだ學問の吸收と振興、産業文化の接種培養とによつて眞に日本的なものが形成され、世界の急速な發展があつて今日世界一流の域にまで到達し、多年アジア弱少國の膏血を絞つた米、英を、亞細亞から驅逐するに至る實力を獲得したのである。それには、火山、風水害、地震におびやかされやすい日本の風土的環境と明治維新に於ける世界的立遲れが我々の先人の血を奮起させたとみてもよいであらう。

温床に咲いた花は弱い。我々の末裔をして滿洲の環境を彼らの温床として遺すことは悔いを千歳にのこすものである。切磋琢磨のないところに民族的な繁榮は有り得ないであらう。假に他民族と同一スタートに起つとしても日本民族の民族的優秀性は光輝を放つものであることは全く疑ひのないところであり、温床に非ざる民族爭覇の試煉の位置に起つとしたならば、先天的に十の實力を發揮するところを日本民族の敢闘精神は、二十三十の威力を發し得るものとなり、所謂日本人であるが故の精神的物質的優位以上のものを示すに違ひないのである。

明治維新に於て、黎明日本を背負つて起つたものは決して大名でもなく、家老級人物でもなくさうした家名、家柄はなくとも眞に實力をもつた足輕、家人級の人物であつたことは、洽く歴史の實證するところである。しかるに大正昭和と日本興隆の一應の水準線に到達すると、漸次學歴、學閥の發生を見て、精神的には一種の安易性が生じたともみられないこともないのである。

今や正に再びそれの排除さるべき時が來たのではないだらうか。日本の實力が太平洋に於ても遂に雌雄を決せんとしてゐる。國内的にも實力時代が要求されねばならないであらう。殊に他民族が精神的、物質的に劣性にあれば、これを引上げることこそ我々日本民族に課せられたる一大使命ではないか。

次に日本人であるが故の先天性精神的物質的優位なるものを、他民族の立場から一應反省してみよう。

忌憚なくいへば、國内他民族、特に漢民族はその一部の覺醒せる人々を除いては、退嬰的心理を全く脱却してはゐなかつたかのやうである。このことは我々としても十分理解出來るのである。そしてそれは政治的自覺、國家意識に強烈なものほど、さういふ感銘も必

ず熾烈である。

從つて退嬰的な心理を有する人々は却つて一度味方とすれば最も頼もしき存在であり得るのである。

これらの人々はまた同時に、指導的人物とも成り得る人々である。指導者は決して日本民族の專賣特許であつてはならないのだ。

日本民族と肩を並べて指導者に起つ人物が、他民族の中から陸續として登場することこそ寧ろ望ましいのである。再び云ふ東亞の指導者の日本人獨占並に獨善は排擊されなくてはならない。東亞は日本民族を中核體として、これに積極的に協力する他民族の指導者の出現によつて初めて名實共に眞の東亞解放が生誕するのである。

この理想は、わが滿洲國に於てもそのまゝ踏襲され、他民族の强力なる指導的人物の、より一層の登場によつて、國民の國家意識は涵養され、さらに强固なものとなり得るのである。

故に精神的優位なるものも、逐次滿洲國民一人一人、總ゆる民族の、滿洲國民としての誇りにまで昇華されてゆくべき性質のものである。

さて、次に經濟的優位の問題である。これが、一應止むを得ざる事由は前述の通りであるが、これも亦早晩解消されてゆくべきもの、即ち實力本位の經濟的優位にならなくてはならない。

精神的には先づ建國精神に目覺め、建國十年間に蓄積されたわが國の格段の發展、產業開發、教育文化の躍進、將來の光明を約束する各種ダム工事、國軍の尖鋭化、僻地にも深められゆく行政刷新等々により、滿洲國に對する信頼感を深め、積極的翼贊體制に服さんとしつゝあるもここに日本民族の經濟的優位をみるとき、その翼贊的意慾のセーヴされる怖れがあるのである。もし眞に實力のみが一切を決定するといふことが、廣く社會、各種會社其他の機關に於て、さらに鮮明に表示されたならば、全國民意識の一丸となつた强力體制は早急に實現されるのではないかと愚考するのである。

民族協和とは、恐らく一種の微溫湯の如きものや、甘やかされたものではなく、國家の下に秋霜苛烈な各民族の實力發揮にあるべきであらう。さうであることは初めて大陸に在つて、この溫床に狎れんとする氣配の感ぜられる日本民族を更に眞に奮起せしめ、祖國日本の榮譽と、滿洲建國の眞使命の下に、儼然として誠心誠意、寔の東亞民族の指導者とし

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled X 31 lines

での實力を發揮するに至るであらう。

（十六年二月）

滿洲日本人

「……支那人に始めて接するほとんどの者が彼等の行動、動作を見て、第一に穢い、臭い、嫌だと皆呆れて居ります。潔癖好きな日本人として無理も有りません。中でも超潔癖家は飯が食べれないと言ひ弱つて居る狀態、其の點小生は別、生れは爭へません。皆の嫌がる彼等の一擧手、一投足に何とも言へない親しみ懷しみが起きて來ます。まるで我家に歸つた樣な氣持が致します。ハハハ……

然し淺念な事に發音の全然違つた〇〇語なので小生得意の？北京語も用を爲しません」

一昨年内地の原籍地の聯隊へ入營し、昨年秋南支へ向けて出征した義弟からの第一信の一節である。

義弟の父親といふのは、三十數年前、天津日本人小學校の教員をしてゐたが、日露戰爭後、滿洲に渡つて、遼陽で滿鐵經營の公學堂（支那人小學校の先生）をし、後大連に移つて晩年木炭會社などの企業に參劃し美事失敗して窮乏の上、病死したのであつた。

從つてその子供たちは、天津、遼陽、大連といつた大陸生れ、大陸育ちである。

その手紙の一節に「生れて海を見るのは始めて、勿論船に乘るのも、といふ山の勇士の餘りにもたくさん居るのに聊か驚きました」

とあるに依つてみても、初めて支那人を見て、飯が食べられないといふ超潔癖家が出てきたのも推察出來やうし、戰ひの跡の地に居殘つた一般支那人の狀態を親へないことゝもない。特にその感想が海も知らない山國から初めて支那に渡り戰禍の街に第一歩を入れた人たちのものとすれば決して不自然ではあるまい。

また義弟が支那人を見て、その一擧手、一投足に何とも言へない親しみ懷しみを感じ、まるで我家に歸つたやうな氣がすると告白してきたのも僞りのない實感に滿ちてゐやう。

義弟は遼陽で生れ、大連で生長し、二十一才徵兵適齡まで内地を知らないで過したのであるから、假令日常の生活樣式は違ふとはいへ、支那人を隣人として見、同じ土地、街に住む人たちとしての親近性を以て眺めてきてゐたことは、南支に於ける第一歩に於ても、

同じ日本人でありながら、支那人を見る眺め方の相異となつて現はれてきたのであらう。

この義弟が感じた、久しぶりに内地から支那人の國へ渡つて感じた「我家に歸つたやうな氣持」といふものは、一種故郷感に通じるものであらうが、これは一人義弟のみが感じたものではなく、少くとも滿洲生れの青年たちの誰でもが口にし、また事實さう感じてゐるところである。

多くの理論から抽象され、標語として押しつけられたものではなく、大陸に生を得て長い間に自然に體得された血緣に近く沁み出たものであつた。

嘗て二、三年前滿洲生れの一青年によつて自分は内地の所謂故郷に歸つてみたが、そこには故郷はなかつた。親たちの口や、滿洲の小學校の教科書で教へられたやうに、なるほど内地の風景は美しかつた。しかし故郷はなかつた、といふところから内地に懷いてゐた故郷喪失感が「夜の話」といふ小説のテーマに描かれて滿洲で發表された。

これに共鳴する多くの青年が現はれ、ある者は、滿洲の日本人教育の缺陷に歸した。即ち滿洲に育つたにも拘はらず、滿洲のことは即座に自己の血肉的な環境としては教へられず、内地のことも學ぶには學ぶが、そこには實感されるものがなかつたとした。

或るものは、自己の故郷喪失感を訴へ、眞に故郷感を抱くには、「土」に對する感情がなければならぬと述べた。

しかしながらこの問題も、今日考へてみればある意味で過渡期的な問題であつたと思へる。

第一に滿洲生れの青年たちが、滿洲で受けた當時の教育、滿洲のことは教へられたが中途半端にしか教へられてゐなかつたとは、滿洲事變前に於ける、僅かに滿鐵沿線附屬地内に、さゝやかに營まれてゐた日本人の生活を反映し、即ち滿洲に於ける日本の政治力をも反映したところの中途半端さなのであつた。

第二に、滿洲の土に對する感情がなかつたのは、さういふ附屬地内に棲息してゐた日本人たちは、滿鐵社員であるか、官吏であるかまた一族組の水商賣が大部分で、それらは社命官命に依つて轉々と居を移し、一族組に至つては最初から一儲けして歸國する日を數へてゐたのである。さういふ浮動性のもののみをバックにして、生長した滿洲生れの青年たちは正に不幸であつたに違ひない。

しかもさうした青年たちが、思慮の成熟ともう一つには滿洲事變後の、滿洲に於ける日

本人に課せられた大きな指導的地位に目覺めたとき、彼らは滿洲に生れてゐるだけに、死に身になつて滿洲のことを考へようとしただけに、自己の内からも、外からも、今さらのやうに滿洲自體に對する無知に愕然とした。その一つの現象として、故郷喪失感の問題が提出されたのであらうと考へる。

近頃滿洲でも、日滿混血の必要を力説する人がある。混血して初めて正銘な滿洲國人が生れるのだと主張する。滿洲醫科大學の教授が、日滿人の混血に就て、優生學的な見地から感想を發表してゐたが、惡質化するとは言はなかつたが、餘り判つきりしたことも說かれなかつた。しかしこれもどちらの血が勝つかといふことに問題の重點はかゝつてゐよう。

だが混血の問題は、さう性急に可能性のあることではない。假令混血の問題が實行に移されずとも、現在すでに滿洲國内の日本人が、漢人が、蒙古人が、朝鮮人が、露西亞人が、徐々に自然に變革の第一歩を踏み出しつゝあるのは事實である。

最初に擧げた滿洲生れの一兵士に、極めて微少ながらその徵候を認め得るし、一昨年の夏、二ケ月を南京に過した僕が、上海から船に乘つて、汽船が大連の港内に入つたとき、小蒸汽船に、埠頭に、日本人の中に慣れきつて、少しも差圖を受けなくとも、自己の任務を果しつゝある漢人の水夫たちの姿を見たときの驚きは思はず眼をみはらされたのであつた。その住みつき、慣れきつた、一應安心のある姿は、南京で二ケ月苦力を追ひ廻す仕事をしてゐた僕だつたせいか、それだけに一層深く印象され、美しくさへ映じてきた姿だつた。

滿洲國に於て變貌しつゝある各民族の姿を探さうとしたら、よく注意をしてみるなら、至るところに、發見することが出來よう。それは通りすがりの旅行者では困難であらう、旅行者には反つてエキゾチツクな面の方が寧ろ眼につき易いにちがいないから。

滿洲にも日本精神のスローガンが將來されてくる。日本精神は、日本人の裡に在る。それが眠つてゐるか、目覺めてゐるかの違ひである。そしてそれは一層磨かれなければならない。殊に多くの異民族と共存する滿洲では磨かれ、併せて擴がりをもたなければならない。日本人自體が大きく飛躍してゆかなければならない。

僕は先日京城に滯在して二、三の映畫館に入つてみた。觀客の七割は朝鮮人のやうだ。上映される映畫は日本物一本、外國物一本である。その時今更のやうに僕は日本映畫の貧困が哀しかつた。僕が若し朝鮮人であつたら優れた外國物と、貧しい日本物を見て、一體どう感じるだらうかと、ふと考へた。これは甚ださびしい思索であつた。また滿洲では上映されないアメリカ物を久しぶりでみて得た感慨はその國の大きさ豐かさでもあつた。誇張でなく嘆息の出るやうなものであつた。かういふ境遇では日本の立場など米國人に了解されよう筈がないとも感じた。

朝鮮できいた話では、朝鮮の小學校では、日本語だけで喋べることになつてゐるとのことだつた。朝鮮人の生徒たちは、校門を出ると、意味なく毆り合やら、摑み合をするといふ。さうして朝鮮語を喋べり散らすといふ話である。

過渡期の樣々の現象をとり擧げて云々するのもまた大人氣ないことだが、すべて異民族の敎化は、長い時期をかけて、一人一人の中に自然に生長してゆく溫床をつくるやうな行き方でありたいものである。

滿洲でも現在農產物の公定價格が制定され出廻が思はしくないやうである。これも恐らく一時期の現象にしかすぎまいが、矇昧な農民たちには、現下の戰時體制への認識を要請するのは、大へんムリな話である。しかし一度公定價格が制定された以上、農民の生活必需品の、農產物の公定價格に比例した保證が先づ第一に必要であらう。

（十五年三月）

或る座談會記錄から

—新情勢に寄せて—

この小論の當初に、僕はまづ過日、大每滿洲版に載つた「大東亞決戰とわれらの決意」といふ座談會記錄に出た、滿系知識人の言葉から、少しく拔萃をしてみたい。

「滿洲事變は本當に大東亞戰爭の第一步でもあり、先驅であつた。しかしながら、滿洲事變の當時は、嚴密にいへばこれが東亞解放運動だといふことが表面にまで現はれてゐなかつた。その後支那事變になつてもまだまだこれがハツキリしなかつた嫌ひがあつた。人によれば支那が敵である、日本が支那を侵略する戰爭ででもあるかの如く勘違ひしてゐた

KOKINO LOOSE-LEAF J-836A 7mm ruled X 31 lines

向もあつた。（略）抗日政權の蔭にかくれてゐた米英がたまりかねて本舞臺に飛び出して來た。これを大向ふからやつつける戰爭ですから全くもつていままでのモヤモヤしたものが一掃された。從つて明朗な戰爭になつて來た。大いに愉快です。一般的にいつてこの戰爭目的がハツキリしたことが滿系國民の中にも大いに影響してゐます」

「われわれ有色人種が白人の敵に向つて戰端を開いたのは、この前の日露戰爭がはじめてでありましたが、しかし堂々たる一等國——國防力、經濟力においても世界に冠たる米、英に對し、しかも兩國をひつくるめてこれを向ふに廻して日本が立ち上つた。この前の日露戰爭に比べると何百倍といふくらゐ大きい規模の大戰爭である。これを緒戰において打ち破つた。非常に愉快である。みんなが擧つて痛快と感じてゐる。だからこれに協力して行かうといふ氣分が勃然として湧き起つてゐるのです」

「もし大東亞戰爭がなかつたならば二十年經つても三十年經つても本當の民族協和はできなかつたかも知れないがこんどの開戰により、滿洲國內の諸民族が本當に艱難をともにするやうになれば民族協和は一ぺんにでき上るでせう。戰爭のお蔭で民族協和に三十年かかるところが三年にしてできる可能性がある。これこそ絕好の機會である。これこそ第二の建國だと僕は思ふのです」

「われわれの氣持をいへば、米英の勢力を東亞から驅逐するのは日本だけの責任ではない。東亞全民族が團結してやらなければならないといふので大東亞戰爭と命名されたのではないかと思ひます」

「滿洲國としてはどういふ形で責任をつくすか。滿洲國は農業國であるから農業生產を增加しこれを日本に送つて助ける。鐵、石炭も同樣です。かういふ形をもつて日本を援助しなければならないといふことを人民にしつかり敎へなければならないと思ひます。その責任を負ふのが滿洲國官吏であり、ことに滿系官吏です。かういふ際には日系が先頭に立つていろ〳〵いふよりも滿系の官吏がかういふ理由だからかうしなければならないといふ風に說明した方がこれを受ける滿人は納得するんです。はは、さうかナと思ひます。同時に日系に要望するのは滿系の官吏を疑はないといふことです」

「日系のみでいくらいつても民族協和は出來ないと思ひます。拍手する場合でも片方の手では出來ない。兩手でかうピシヤツとやると鳴るんです。だから日系が滿系を信賴しピシヤツとやるやうにしなければならない」

或る座談會記錄から

「今までの建國は日本人がやつて來た。これからは日滿人でやつて行く。第二の建國とはさういふ意味です。われ〳〵が待望した大東亞を建設するために皆一緒にやつて行かうといふ氣持です」

「今までわれ〳〵は同じ船の中に乘つて波も穩やかであつた。ところがこんど大暴風雨が起つた。いままでは舵を委してくれなかつた。ところがこんどはさうは行かぬ。同じ氣持で一生懸命にお互にやらうといふ時期に來てゐる」

「このチャンスを逃がしては滿洲の第二建國は絶對にできない」

×

座談會記事は三回に渉つて連載された。一回が新聞一頁の三分の一のスペースをとつてゐた。だがここに抄錄したのはそのほんの一部分にすぎない。そして僕はこの言葉の中から、多くの感銘を得たのであるが、それを秘して滿系の一友人にこれを讀ませた。彼は熟讀してから、少し物の解つた滿人なら、皆この座談會と同じやうに考へてゐる。どうしても日本に勝つて貰ひたいと思つてゐる。しかし我々のやうな地位の低いものは、ここに書かれた程度のことでも口にすることを憚られる。この座談會の出席者がこれだけのことを言へたのも、皆相當の地位に在る人達だから初めて可能だつたのである。――と言ふのだつた。それは正にさうであつたらう。浮つかりしたことは言へない、これは誰でもが持つてゐるらしい態度だ。だから自發的に國家目的に挺身するといつた信念も生まれて來ないし、自分の國だといふ立命觀も出て來ない。多くの者が精神的な彷徨者である。

×

座談會から拔萃したところを以下に要約してみよう。

（一）大東亞戰爭によつて、長い間同じ漢民族を敵として戰つてゐたのが、他に眞の敵がはつきりしたため戰爭對象が明確になると同時に、一部に侵略戰とも曲解されてゐた戰爭目的も瞭かにされた。

（二）支那事變は滿洲事變がなかつたら發生しなかつた。從つて滿洲事變こそが東亞解放戰の先驅であつた。

（三）有色人種が白色人種と戰つて勝つたのは日露戰爭が最初であるが、世界の一等國米、英に對し宣戰を布告、而も緒戰に於て赫々たる大勝利を博してゐる。同人種のものとして痛快であり發奮を促されるところが多い。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

（四）東亞から米、英勢力を驅逐するのは東亞全民族の責任である。そこに大東亞戰爭と命名された意義を感ずる。

――以上が大東亞戰爭に對する滿系知名士の感想である。そしてこれには僕は附け加へるべき言葉を知らない。しかし滿系知識人の大半が以上要約されたものに信念を以て認識してゐるかどうかに對しては、必ずしも確信することは出來ない。滿洲事變以來敗北主義的な心理に陷つてゐる人たちも少くないであらう。だがそれらの人々に就いて僕は云々することを好まない。なぜならば歷史の流れを見極める力のない不幸な人たちであるから。顚落するより仕方のない人たちであるから。

×

次に大東亞戰爭が、滿洲國是に與へた影響及び國民對策の問題を、座談會から要約してみよう。

（一）大東亞戰爭を完遂して徹底的勝利を得るためには、國內諸民族が眞に艱難を共にする、苦藥を眞に共にすることによつて、何年かゝつて實現するか解らない民族協和の實現も、急速に可能性をもつ。

（二）長期戰完遂のためにも農業、鐵、石炭の增產に努める。これを國民に徹底させる。

（三）國民に徹底させるには、日系が先頭に立つよりは、滿系には滿系が先頭に立つて說明し指導しなければならない。

（四）これを具體化するためには、日系は滿系を疑つてはいけない。信賴しなければならない。

（五）これまでの建國は日系がやつてきた、これからは日滿人がやつてゆく。これは即ち第二建國である。この機會を逸しては第二建國は絕對に出來ない。

――以上の五項目に就ても僕は殆ど異議をもたない。かういふ言葉が聞かれるやうになつたことに、建國十周年を迎へた滿洲建設といふものが、ここによく實を結んできてゐることを感じ、寧ろ僕はこれらの言葉が、單に放言として聞き過される結果を怖れる念が深い。

云ふまでもなく日系は指導民族として置かれてゐる。しかし乍ら指導者は日系の專賣であつてはならないであらう。指導者は滿系から、蒙系から、鮮系から、生まれて來なくてはならない。さういふ自主性のある指導者を培養することこそが日系の役割だと考へる。

この（三）に於て指摘されてゐるやうに、日系は指導者として異民族大衆の前にとび出しやすい。難解な文句を下手な通譯の譯で、理解力の乏しい農民の前に、滔々と演說するといつた滑稽は僕らのよく見聞するところである。多くの場合その大演說は空氣を徒らに震駭させただけで、講演者の自己滿足のみで終つてしまつてゐる。美麗な國策宣傳ポスターが、印刷されたことだけで能事終り、貧家の際き間風ふさぎに裏返しに張られてゐる。これらの愚は、その民族に屬する指導者にまつて爲されてはじめて、效果が生まれてくるのである。このやうに書いたこと自體が、宣傳の原則的なものとして日系間に於ても知られてゐる。にも拘はらず國策は決して農村に滲透してはゐない。既に彼らの先人が「言ふは易し」と喝破してゐる通りである。

座談會では、日系は滿系を疑つてはいけないといふ。凡らくこの座談會出席者の如き人人は信賴してそれに十分應へ得る人たちである。一方疑はざるを得ない人々の餘りに多いことも事實である。しかし乍らこの疑ひの發し方自體が、日系的、滿系的、事物の觀念、その處理取扱方法の相違に起因してゐる場合も多いかのやうである。結末に於て歸一するところは同じであるにしろ、方法の相違といふものは民族性によつて爭ひがたく、その迂遠な方式によつて初めて各方面圓滑なる結果に到る場合もある。合理的方則には、感情や、舊慣や、面子や、その他諸々の關係を考慮に入れない。ところが滿人社會に於て絕對優勢であるこの諸々の關係を一刀兩斷することは日系の權力によつてよく爲し得るところであるが、同時に成果の上らぬことも亦覿面である。—いくたの事例が語つて餘すところがない。

（二）の國內諸民族が眞に艱難を共にすることによつて生まれる民族協和。

判つきりいへば、物資の配給問題である。農村の者は街のものを羨望する。小さい街のものは都會のものを羨望する。甲の民族のものは、乙の民族のものを羨望する。羨望だけではなく不滿不平となつて現はれる。それから配給機構に携はるものの不公平への反感、一部特權者の不當、また闇買ひに對する闇强請の橫行。

いくたの溝が、農村と都會に、民族相互間に、或ひは同民族內に、次第に深く根强く掘られてゆく。そしてこれは今後益々物資が窮屈になるに從ひ深まつてゆく憂ひがある。殊に闇買ひ（滿系の家庭必需品）に對する闇强請の如きは、弱みにつけ込む惡辣極まる遣り口で、大部分が泣き寢入りになつてゐるやうである。さういふ愚痴がこつそり蔭で口から

口へ傳はる如きは、大東亞戰爭完遂下に、實に只ての外の事どもである。

恐らくは當局の、民族性、社會性を考慮して、その上で計劃された配給物資内容、量の多少が、時には適切を缺くものもあり、また品不足のため最低必要量も賄ひきれない場合等々もあるのであらうが、各民族の生活水準とそれに要する物資の種、量等に立脚した、配給の比率を、各民族の納得し得るやう宣明を期することも必要であつたらう。すべて一人合點でなされるところに、起らなくてもいい波瀾が發生する。と同時に違犯者に對する刑罰の極刑化もまた必要であらう。

（五）の今までの建國は日系がやつてきた、これからは日滿人でやつてゆく、これが第二建國であるといふ。

滿系の誰でもが意識してゐる、滿洲に於て置かれてゐる位置を、この言葉は計らずも物語つてゐる。自分の國といふよりは、お客さんである意識。從つて責任はなく、受身で、大勢順應の生き方。よく滿系は駄目だと、聞かされる。しかしこれは眞相の一半しか物語つてゐない。さういふ駄目であるより仕方のない立場においてゐること自體への反省が今こそ痛切に要望される秋に直面してゐるのである。

そしてこのこと自體の中に、今後大東亞共榮圈の民族政策をいかにするか、といふ問題の根本方針に觸れた問題を内包してゐよう。

民族協和は、春風駘蕩たるものではなくて秋霜烈日なものに置きかへらるべきである。即ち條件とスタートを等しくした民族間の切磋琢磨、實力爭覇でなければならない。

これが他民族を發奮させ自發的協力となり、また日系自身の知的精神的向上を促進させるものとなる。

（十七年四月）

勤奉運動について

私が國民勤勞奉公隊の現地作業の實際をみせてもらつたのは、奉天省公署の好意によつて省内のごく一部分であつた。それも私の見た三ヶ所ともが土工々事であつた。だからここに若干の感想を書かうとすることの、大局的には一部分の問題であるやも測りがたい感じである。しかし、この土工作業が「全體を通じて九十％を占めて」をり「殘りの五、六

%が工場、鑛山關係に、他の四、五%がコンクリート作業。或は水力電氣といつたところにゆく」といつてゐる（滿新所載、輝く聖燈勤員の戰果座談會、穴澤事務官）とすれば、必ずしもここに述べようとするのは烏滸の沙汰ともいへまい。

そして私がここにこの問題をとり擧げ、愚考を述べようとする眞意は、國防道路の建設、未墾地濕地の干拓、アルカリ地帶開墾をはじめ大規模な治水、利水工事や、生産工場に於て素晴しい成果を收め、「勤奉隊員が本年度中にやり遂げただけの工事を一般勞務者を以てあてると、概算實に延一千五百萬の勞務者を勤員しなければならない程の大きなものである」（同上座談會、江崎氏）といはれる、國土建設の上に遺した偉大なる功績といつた面も勿論あるが、實にこれはわが國の國防國家態勢を一段と強化しあるひは增産の基礎を固め、もしくは直接增産の上に作用した偉力は、殊に大東亞戰下のわが國情を思へば一層ふかいわけで、もう一つ今後を擔ふ中堅國民の錬成の面に於て他に見られないものであるといふ點からも、この制度の今後に於ける育成が國家總力を擧げて關心さるべきものであると信じるからである。

前記座談會とは別個に、同じく滿新紙上に於て「半田勤奉局長との一問一答」が掲載されてゐる。その中で勤奉制度の劃期的な成功を擧げた「原因」として、「第一に—治安の確立と行政の滲透がこの組織の運用を全からしめたこと、第二に國兵法の實施とこれに伴ふ諸施策の整備、第三に過去六年間にわたる協和會の青少年訓練、第四に國民就中、青年層における時局認識の徹底」を指摘してゐる。

寔にこれらのどの一つを擧げても建國以來の治績著しきものではあるが、特に協和會の青年訓練所の效果は、勤奉制度において初めてその威力を發揮したといつても過言でなく多年青年訓練に默々と精進された先覺の士にふかい敬意を拂ふものである。

——現場において中核體となつて未だ意識低き青年を引きづつてゐたのは青訓出身生であつた。

と同時に、成功を收めた原因の一つとして過去に於て賦役による勞力徵發に慣らされてゐたといふ點をも私は敢て指摘したい、なぜならば、今年度參加したものの一部は勤奉制度の如何なるものかも、また勤奉精神の存する所も知ることなく、參加して團體生活と、その指導、作業と、同輩の言によつて漸次勤奉隊の實態を知覺と行動によつて認識するに至つたものも少くないと思ふからである。

そして私がここに、勤奉制度の劃期的な成功を擧げた一因として、しかも一種嫌がらせのやうな一因として賦役に慣らされてきた點を殊更に數へようとしたのは、勤奉隊生活に於て、舊來の賦役とは異るものがあるばかりでなく、國民錬成であり青年訓練であり、勤勞生活に歡喜を訓へるものであり、一面において精神教育でもある點を、さらに一段と明確に體得せしめるべき方策が講ぜられるやう方向づけられることが必要であり、萬一この方向への努力が蔑ろにされたならば、要するに美字麗句に裝飾された賦役であるといつた印象を植ゑつける惧れなしとしないからである。

しかし以上の私の危懼は、全く文字通り私の危懼にしかすぎなかつたことは、「來年はもう少しゆとりのある生活—生活を樂しむといふ面も織込んで十分計畫を樹ててゆきたいと考へてゐます。日課も十分研究して作業を通じて國民訓練を十分にやる、その半面矢張り樂しみを與へる事に氣を配つて進めてゆきたいと思つてゐる」といふ半田局長の言葉に示されてゐるからである。從つて今はその計畫が來年度においてどういふ形態を以て現されるか期待したい。

勤勞する青年にとつて、第一の樂しみは、やはり何といつても食事である。「副食物の準備不足等が隊員の行動に支障をもたらしめたこともあつた」といはれてゐる如く送出縣では現地調辦の心算で、現地に到着してみると現地では入手できず縣からの物資到着まで豆油のみの汁を啜つてゐたといふ實例もあり概して十分な準備に缺けてゐた憾みがあつた。

遼陽では現地到着後、村の共有地を借りて、蔬菜の一部自給を圖つたり、解散時の馳走用に供するといつたことが試驗的に試みられてゐたが、これらは今後一層積極的に先遣隊到着と共に、隊員の共同管理として計畫的になされていいことであると思つた。しかしてこれが村に殘存する荒地の開拓といつた面に活かされたならば村に與へる好影響ともなり、小なりとはいへ增産に寄與するところともならう。この點も「來年度よりは、食糧の量を增し、更に隊で未耕地を開拓して、勤奉自給農場をつくり自給の道まで進む豫定である」といはれてゐる。

準備の點では、相當數の隊員が合宿したため、部落の井戸の使用過多に陷り、井戸の湧水量が間に合はぬ現狀にあつたところもある。同じく炊事用の燃料に於ても現地へ期待するところが大部分であつたため、井戸、燃料といつた部分に於て部落側に、なにか部落を荒された印象を與へたところもあつたやうである。井戸などについても、在來のものは極

めて淺くしか掘つてゐないために、かうした現象をまき起すもので、それは地下湧出といふよりは、外部よりの流入によつて維持されてゐるかの如き、不衛生のものであるのだから、勤奉隊の現地への寄與として、もし井戸施設への改善といつた風なことが施されたならば好ましいと考へる。

部落との問題に就ては、西瓜畑を青訓卒業生が不寢番を作つて守り、却つて農民からお禮に澤山の西瓜をもつてきた(前記座談會)といふ話さへあるほどで、また復縣の如きは、隊員を以て挺身隊を編成し作業の促進と部落への協力につとめる(水、火災その他)といつたこともやつてゐた風に、その外の點では問題にするところはないわけで、從つて部落を荒すといふ語弊の生じ易いひ方は當らないが、(イ)地方の隊が(ロ)地方の井戸、燃料を逼迫せしめ(ロ)地方の隊が(イ)地方において同斷といつた風になると、殊に勤勞奉仕工事自體が、畑を潰して道路、堤防を築くといつた場合鄉土荒廢の印象が人心に惡氣流を生ぜしめないとも考へられぬのである。

從つて私は、一面に於て現地部落、村への積極的寄與といつた點も考慮されていいのではないかと考へる。

都市に近く、また工事自體が直接その都市に寄與し、その上勤奉局直轄であるといつた場合、たとへば今年の、遼陽市護岸工事など市民からの慰問もあり又局からの慰問慰安等も十分になされたやうであるが、都市に近くとも、その都市と關係のない工事等の場合(例へば遼河沿岸海城縣開發)など、それらが絶無といつた狀態であつた。而も送出縣が地元であり乍ら全く出し放しであるといつた風である如き、全く心ないことであつた。

「市縣旗公署の職員、更に縣長、副縣長、或は市長、副市長等といふ人が自分の本當の親衞隊を作る氣持で心を打込んで誠の親が自分の子供を鍛錬するやうに鍛錬もし、また可愛がつて指導してくれたら將來滿洲を背負ふ中堅は立派に「勤奉隊員の中から出ると思ふ(前記座談會半田局長)といふ言葉をそのまま眞理と信じ隊員を軍隊と同樣援護する團體の構成について目下準備を進めてゐる」(前記一問一答)ならばそれはやはり送出縣官民を中心としてつくらるべきであると思ふ。

他鄉に於て自分の縣の慰問慰安を受けることは鄉土の支持あることを自覺せしめまた鄉土に對する愛情を渙起することも可能だからである。今日滿洲に於ては鄉土化こそ、鄉土意識の確立こそ、一見甚だ迂遠にみえながらも急務たることはない。

なぜならば、國防に對する必死感は鄉土土着の感情なくては眞實のものとはならない、增産も確たる自己の耕作權あつて可能のものなので、國家意識の發生また鄉土意識を基礎として芽生えるものだからである。

次に、作業服務半ばにして發病、一部は入院し、一部は歸宅を命ぜられたが、思ふに發病者は、作業、團體生活中に發生したものではなく、元來その萌芽を保持してゐたものが、急激な環境の變化によつて表面化したといふものが多いのではないかと考へられる。

これに對しては、事前に綿密な身體檢査を行ふ餘裕があればいいのであるが、實際問題として不可能であらう。よつてまづ軍隊的基礎訓練を現地到着前に實施し、これに耐へ得ざるもののみに、身體檢査を施し、參否を決定する程度のことは、或は實施されてゐるところもあるのかもしれないが必要であらう。

豫定人員を整備するために少し無理と思はるる虛弱者をも派遣すれば必ず發病しやすい、かへつて發病者の歸鄉は、その原因が派遣以前に潛伏してゐたとしても、これを勤奉作業の過勞、もしくは榮養障碍とみらるる怖れあり、爾後の派出に好ましからざる心證を與へることとなしとしない。

事前にかくの如き方策が十分に施されたならば、發病者は減少し兎角の批難を免れるであらう。而して、發病者は發病のままで歸鄉せしめるといつたことは、これを極力避けるだけの準備がなされたならば、と思ふのである。

逃亡者は「相當出ることを豫想してゐたがこれも一部省市縣旗にはあつたが、全般的に見ると一名も逃亡者を出さぬ縣が非常に多い。大體十名乃至四十名といふ程度でむしろ此方が意外に思つた成績です」(座談會半田局長)といはれてゐる。これは一に青年の自覺と行政の滲透と現地指導者の指導よろしきを物語つてゐるわけであるが、逃亡者が出ても應急の對策をとらず、これを一時放任してゐたことが、他の隊員に心理的惡影響を及ぼし、或は逃亡者を續出せしめた傾向も見逃すことができない。逃亡者は、これを追はずといつた多忙にかこつけての放任は決して許さるべきではない。

隊員中には、ある程度の學識ある者あり、全く文盲者もあるわけであるが、これを二部に分つて一日一時間乃至三十分程度の諸種の教育はぜひとも望ましいものである。

文盲者に對しては、識字教育特に片假名程度を理解せしむることは、服務期間中に容易になし得ることである。作業といふ行を通しての鍊成、規律と、知覺を通しての啓蒙もま

た並び行はるべきであらう。而してこれが實施には、國民學校以上の卒業者と、白紙の者とはこれを二部制にして、その程度に應じた教育がなされるべきである。

種々感想を述べんと思ひつつ、大方は滿新所載、一問一答、座談會の紹介に終つてしまつた。しかしこれもまた火して徒事ではないことを私は信じる。

（十八年十一月）

文化時評

一、菊五郎の描いた波紋

尾上菊五郎の、建國十周年慶祝藝能使節としての來滿は、いろ〳〵と話題を提供していつた。

大體に於て、誰それ一座の來演となると、滿洲公演に限らず日本に於ても、俳優の顔觸れが貧弱になる。假に寺子屋に例をとつても菊五郎の松王に吉右衛門の源藏といふところが、男女藏の源藏になり、これが吉右衛門一座の公演でもさうで、吉右衛門の松王に九藏の源藏といつた風に落ちてくる。だから主役一人で濟む所作事のやうなものでない限り、舞臺面が落ちることは當識である。

僕は菊五郎が來るかもしれない、來るぞ、來たぞ、演つてゐるぞ、といふ新聞ニュースが載り、それから某々氏の自己滿足的にして自家廣告的劇評が一つの新聞に何回載らうと——いささかも關心も興味も起さなかつた。

それは何も僕が前述の如き理由から、歌舞伎を觀るなら木挽町さ、といつて一通りの劇通のやうにオツに澄ましてゐたわけからでもなかつた。

おそらく我々如きには觀れないであらうといふことを豫め達觀して、菊五郎の來滿に關して我不關焉と考へてゐたからである。

しかし、思ふに尾上菊五郎丈は、苟も我が國の建國十周年を慶祝して、藝能使節として遙々日本からやつてきたのである。我々はたとへ自分が見ないにしても、少くとも氣持の上で歡迎の意を表すべきが本當であらう。殊に僕は菊五郎丈にはお世話になつてをり、一寸（正に一寸）口をきいたこともある。といふのは、震災當時、菊五郎邸のお隣りに住んでをり、菊五郎が出入りの者を督勵しての消防によつて僕の家もあの大火災からあやふく

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled X 31 lines

免れることを得たのである。また移轉の際、菊五郎丈自身拙宅に挨拶に見え、僕が口をきいたわけである。正に二十年昔の話である。さういふごく薄い緣があるのにも拘はらず來滿に對して僕の感情は冷かであつたし、大體に於て僕ら如き階層の人たちの感情もそんなに張り切つてはゐなかつた。

一體それは何故だらうか？　つまり自分たちには見られないだらうといふ諦觀が、一方では菊五郎を獨占する人達への反感と相俟つて、心理的に我不關焉を形成させてゐたからであつた——とみるのは間違ひであらうか。

それは從來の例が、さういふことを豫想させた。我々はよく滿洲の農村に決定的な支配力をもつ土豪劣紳について口にする。そういふ勢力の牢固として拔き難きを口にする。しかしながらさういふ牢固として拔き難き舊體制は、滿洲の日本人社會に在つても、例へば花柳界と稱する一廓に於て容易に發見することが出來るのである。

しかし今度の菊五郎の來滿、殊に建國十周年慶祝藝能使節といふ負託に鑑みても、一部では、觀劇の適當なる配分を考慮してはゐた。例へば新聞の社說である。社說に於て菊五郎のこの度の來滿の意義を宣明し、それが從來みる如き花柳界の獨占にならざるやう關係機關に於て愼重を期すべきだといふ論調が載つてゐた。

ところで新聞の社說といふものは、或る問題についてその意義を强調するとか、或ひは尾鰭を添附して格式を與へるとか、或ひは一寸注意を喚起するとか——、はするが、決してその具體的對策について述べないことに約束されてゐるかの如くである。ときにはそれに就いてホンの輕いヒントを與へる場合も見受けるが、それはむしろ例外である場合の方が多い。菊五郎の社說の場合は、その中の一寸注意を喚起するの部類に屬してゐた。從つて果して效果はなかつた。社說の面子は丸潰れな筈であるが、大概の人は社說を讀まないやうであるし、讀んだ人は忘れてゐるから、社說の面子が潰れてゐるといふことにも氣がつかない。僕は社說について論じてゐたのではなかつた。再び話を菊五郎の來滿、來演に戻さねばならない。

これも新聞で讀んだが、三面記事（近來は本當に三面の記事になつた）で、どこか遠い奥地から寫眞を抱へて會場にかけつけた人の話が出てゐた。菊五郎の來演をニュースで知り、ぜひ見たいといつてゐる中に亡くなられた。そこで寫眞を抱いて遙々新京まで寫眞觀劇に遺族の方が來られたが、どうしても切符が手に入らない。そこで會場に驅けつけて懇

願に及んだといふ話である。しかし滿員で斷はられたのである。斷はつた當人らしい人が談話まで載せてゐるから間違ひあるまい。

この話が何故新聞に載つたかといへば、一面には菊五郎の人氣の紹介であり、氣分を煽るためであり、一面には孝行美談でもあるからである。しかし美談は前半で明瞭に陶絶され、後半は醜談である。いかに切符が賣切であり、滿員であるからといつて、たつた一人の人間を入れる餘地がないといふことは常識で考へられない。またはるばる奥地から出てきて、菊五郎の來演に心を遺しながら死んだ人の寫眞を抱へて懇願する人を、滿員だといつて斷はり切つた人間の無情冷血さは、醜談と呼ぶより外言葉はない。今日、有がたい時世には法にさへ涙も血もある。しかるに人情にかくの如き非情を以てする如きは、人道地に陷ちたりともいふべきであらう。

それから見たのは（菊五郎の舞臺ではない）某々氏の劇評風なものである。しかしこれは劇評ではなかつた。芝居を見られない我々はせめて劇評でその樣子を窺へたらまだしもであつたが、この某々氏のものは胸糞の悪い、通ぶりであつた。これは或ひは僕が菊五郎を見られなかつたので、妬みがさう感じさせたのではないかと一應反省してみたが、少くとも胸糞の悪いひけらかしであつたといふ感慨については未だに觀念は改められてゐないといふことを書いておく。もし必要あれば、詳細に詮議してみてもよいと思ふ。

その次にいよ〳〵菊五郎はわが町にも登場した。僕がそれを何で知つたかといふと、今度は新聞ではなくて、會社の歸り、いつも通る映畫館の前までくると、花柳界の女たち――と一見さう感じさせる類の女たちが群れてゐたから、直感的に菊五郎を感じ、果してそれは誤りでないことを看板などで確かめた。尙歩いてゆくと、社宅街の入口の課長級の住宅から二人の紳士が浴衣掛けで現はれ、手にお辨當や酒壜の包みを提げて馬車に乘るのを見かけたので、また菊五郎を感じさせられたのである。

事後、僕の町で公演中、僕はその映畫館の前を通らず、外の道を抜けてかへつた。

僕の住んでゐる町の市公署でも、何でも菊五郎の來滿については、多額の金を出したといふことをたしかな筋からきいてゐる。それは出していいに違ひない。しかしながら市の金といふものは、決して市が公益事業で儲けた金ではない。（尤も僕の家では水道代毎月三圓いくらとられてゐるが）市の金は市民から收められてゐるのが大部分とみていいのではないだらうか。――そして市民の大部分のものはさう多くは負擔せず、やはり大きい規模

のところが負擔額も多いにちがひないが、だがさういふ金の高によらず、市の仕事、市の支出には、全市民の醵出が例へ精神的の程度にしても加味されてゐることは否定できないであらう。從つて市民の意を汲んで市の仕事がなされたとき、市と市民の繁榮が結びつき、市民としての意識が誕生し、協同體としての、鄕土としての誇りと團結が生まれてくる。ところで僕の町で、誰が市民としての意識を持つてゐるだらうか？

僕の住んでゐる町でも、市で招待公演の一日があつたらしい。しかし僕らの如きものの見聞の範圍では、たつた一人もこれに招かれた人も、招かれた人を知つてゐるといふ人にも出遭つたことがなかつた。すべてがどこかでなされ、市民と呼ばれるべき人の大半は我不知道で終つた。

僕はまたここで、はるばる奥地から寫眞を抱いて觀劇に來、斷はられて去つた人を思ひ出す。さういふ人々は決してその人一人ではないだらうといふことも。

日露戰爭以來三十五年經つた。大陸の先驅者として渡滿し、今日は老齡、孫の相手をしてゐる人たちもゐよう。その中には若き日、歌舞伎に情熱を湧かせた人もゐやう、中には早くから渡滿し、まだ菊五郎を知らない人もゐやう。そしてさういふ人たちは、決してす

べてが順調な惠まれた生活をしてゐる人たちばかりではない。

僕は市公署が、會場の一部を、さういふ高齡者に頒ち與へてくれたのなら、僕は市を敬愛の念をもつて眺めたことであらう。そしてまた僕は、市が僕にさういふ風に市民としての敬愛の念で市を仰ぐ位置においてくれることを望んでやまなかつたのだ。しかし市は、市民の大半が知らぬ間にその招待會を終つた。

だがかういふことも考へられる。高齡者については他の方法で表彰といふことも出來るから、（まだやつてはゐないが）いま下部組織の隣組で、組長が相當自分の時間を犧牲にし、公けのために働いてゐるから、かういふ人たちを犒ふのも、この際隣組精神昂揚のため、また迷惑がられたりする傾向もみえる組長優待の一つとして、招待するといふのも當世向な趣向である。さう考へて、僕は所屬の組長さんにきいてみたが、いやそんな話はなんにもきいてゐませんヨとのことだつた。

後に新聞の報ずるところによつてみても、やはり花柳界のものが公演期間中の大部分の座席を占めたらしい。

僕は歌舞伎と花柳界の縁故をさう無下に取扱はうとは思はない。そしてまた滿洲邊りの

田舍藝妓の何人に菊五郎の生粹の藝が解るか、などといふこともいはうとは考へない。しかしながら花柳界のものが、十何圓といふ觀劇券、しかもそれにプレミアムのついたものが、やはり花柳界に大部分流れてゐるといふ事實から、その十割の税金にも拘はらず變らざる繁榮をしてゐる、彼女らの繁榮を維持してゐるものは何處に所在してをり、どういふ利益を、今日の經濟統制下に於て得てゐるのだらうかといふことを思ふのである。菊五郎は踊り、彼女らも踊る、踊らせてゐるものはなんであらうか？

もし菊五郎が、公園の廣場の假舞臺で、或ひは普樂堂で、舞踊の一つでも公開したのなら、まだしも話は解るのだ。その一さしの踊りに菊五郎を觀たといふ感激に眼を潤ます人も恐らく少くはなかつたであらう。それがどこかの招待と、花柳界を賑はし、建國十周年慶祝藝能使節としての大役が終了したのでは、どうかと考へる。

昔まだ滿洲演藝協會などといふものの出來ない以前、市村羽左衛門が來滿したことがある。そのとき彼は公演に先だつて、挨拶と何か一幕を無料で公開した。その挨拶は、海外に働く人たちの勞苦を犒ひ、まことに辭低く懇切な、日本人同志の呼びかけが感じられ、感激に涙してゐた人さへあつたことを僕は記憶してゐる。

近頃でも何か來ると、さういふ意味の談話が新聞には載るが、實際は高くて、現實に勞苦してゐる人たちには手が出せないものが大部分である。

羽左衛門は最近の寫眞週報でみても、信州の製糸工場へ行つて俄か舞臺で芝居をし、女工さんたちを慰安したりしてゐるやうである。してみるとこれは俳優自身の精神如何と、周圍の人の良き助言とも考へられるが、近頃の滿洲ではかういふことをやるにもむづかしい制限が、例へば滿洲演藝協會によつてつくられてゐるのではないだらうか。

菊五郎の來演は、新聞の社説が豫想した如く、その通りに終つてしまつた。やはり新聞の小さな欄で、花柳界中心で終つた公演を慨嘆するやうな文句も見えた。がすべて淡泊で諦めの早い大方の日系市民が物忘れしたころ、このやうに感じる自分は、我不關焉といひながら恰も最も關心を拂つた結果になつてしまつた。

二、歌舞伎開拓團について

歌舞伎開拓團などと書くと、菊五郎が見られなかつた腹癒せに、不生産的な俳優などを止めさせて開拓地へ送れ！などといひ出すのではないかと、早合點する人があるかもしれ

ぬが、さうではない。僕自身は歌舞伎よりは新劇の方がいい。大歌舞伎は例へば東京に於てさへ、決して大衆のものではあり得ない。大衆と共にあり得ない仕組のもとに置かれたものに對しては、例へ個人的に好きなものであつてもこれを極力嫌ひたものにするといふのが僕の生活信條である。

因襲と門閥のうるさい歌舞伎の世界から脱し、歌舞伎刷新の聲を擧げた前進座、その首領株の河原崎長十郎が名門の出であることも亦興味ぶかい。

僕はこの前進座や、移動劇團を組織した歌舞伎の下積みの人たちの成功から省みて、實力はあるが、到底大歌舞伎にあつては幹部級になれない人たちの一團を、滿洲演藝協會邊りがこれを滿洲に移駐せしめ生活の保證をなすと共にこれを全滿の各都市を巡回公演せしめるといつたやうなものが出來ないだらうかと考へる。

或ひは人あつていふかも知れぬ、我々は菊五郎、羽左衛門なればこそ見たいのであつて、無名の新人なら見たくもないと、それは一應道理である。しかし前進座結成前、前進座の誰が社會的に知られてゐたらう。成程、河原崎長十郎は名門の出だつたが、大歌舞伎に於て果してどんな役がつき、どれだけの名聲があつたらう。むしろ鈍重のそしりさへあつた。洋行したり、舟橋聖一らとの心座の結成や、傾向劇エレンブルグの「トラストDE」の上演やで、歌舞伎道の異端者扱ひこそされたが、決してスターではなかつた。

すべて前進座結成後の、よく統率された一座の熱と實力、上演新戯曲の選擇よろしきを得た結果の賜であつた。かくみてくれば、人氣とか名聲とかは、實力あるものが再三親しまれ馴染まれて生まれてくるものである、といふことが解る。從つて無名であるといふことは、當初しばらくは一部阻害となるかもしれないが、反復開演することによつて阻害の部分は解消し、人氣と名聲が一方に誕生してくることが解る。

また優秀な演出家を帶同することによつて脚本の選定、素人劇團の育成といふことも出來よう。

滿洲に歌舞伎をもつてくることにいつも阻害となつてゐたものは、大歌舞伎の人たちである、大半一年近い先きまでの毎月の大體の出演箇所が定まつてをり、これを變更することの困難である。またわざわざ滿洲へ來なくとも日本で立派に公演して十分の收益を收め得るといふ安定感がある。

ところが歌舞伎開拓團は、新京なら新京中心に根を下ろし、各都市を巡演するのである

から、如上の二つの難點が全く問題にならない。

歌舞伎のみならず芝居好きの滿洲日本人に演劇の自給自足感をもたらし、滿洲生活に潤ひと土着感を增加さすといふ好影響もまた考へられるのである。凡らく歌舞伎開拓團が編成されれば、九月上旬は哈爾濱、下旬は齊齊哈爾といつた風に、一年中の年度計畫も出來だらうし、その日が待望する樂しみといふものも生まれてくるにちがひないであらう。

さらに公演の合間には、農閑期の拓地へ行つて移動巡回公演をするとか、鑛山、工場の産業戰士慰問公演、或ひは職場劇團の指導といつたことも爲し得るにちがひないのである。

歌舞伎が滿洲へ來て經營上問題となるのは、宿泊と輸送費である。故に都市公演に際しては、豫め劇場を決定しておき、この劇場内若しくは附屬施設内に宿泊の設備をしておいて經費の膨脹を削減する。輸送費の方は、劇團專用の車輛をその實際の必要に應じ一輛なり、二輛なり作製しておき、移動に都合のいい時間の列車に連結して貰ふやうにする。かくて繁雜さを省き、經費の節減を計ることによつて觀客の負擔を減じ、國民演劇としての眞の姿を示すやうにする。また滿洲出來の優秀戲曲を上演し、時には日本に行つて公演もする。この位いい滿洲宣傳はないかもしれぬ。

僕は一人の名優を招ぶことに各機關が多額の失費を負擔するよりも大衆をして眞に生活の喜びを新たにさせるやうな新鮮な劇團の結成、而も將來に於て發展性を十分豫見し得るものに對して、眞劍に考慮するやうになつたら……と思ふものである。一時のパッとしたやかさは忽然として消え去るものである。さういふものは土着心をもたぬ轉勤から轉勤で雪だるまのやうに次第に大きく地位の上つてゆく人たちのその場當りの仕事には向くかもしれぬが、全く根もない花にすぎぬ。今日あらゆる意味に於て力强く叫ばれなければならないのは、根の在る仕事、若しくは根を生やすための捨て石としての仕事、或ひはその雰圍氣の醸成にあると、自分は考へるものである。

三、映畫は指導力だ

今日映畫はもはや單なる娯樂ではあり得なくなつた。

映畫は國民思想の統一を圖る一つの方法であり、また國民精神振作の役割をも附與されてゐる。この意味に於て僕に言はせれば、映畫は見に行くものではなく、見せなければな

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

らないものである。

しかるに實情はどうであらうか？例へば、文部省の推薦映畫「母子草」は實に一回三十錢の入場料竝に稅金をとつてゐる。

一方にはかういふ說があつて決してこの入場料は高くはないといふ。

つまり都會生活者は外にいくらも生活の慰安となるものがある。（實際はさうたんとき有りはしない、酒に女であらうか、さういふものが奬勵されていゝだらうか？）從つて、都會では高くとつても、これを完全に利益としてしまふのではなく、滿映はこの金を使つて、現地の人々の慰安の巡回映畫をやり、（これはたゞでは見せてゐない）、いい映畫を作製して啓民、娛民を圖つてゐる。

しかし、現地の人たちは、僻地なるが故に手當の加增を受け、實質的な生活費に於ては都會生活と大した徑庭はなく、時々都會に出沒して湯水のやうにバラ撒くこともある。いい映畫は作製されてゐるらしいが、大部分は滿系向きのものなのであらう。日系向はのいい映畫といふのは見たことがない。しかし滿系向きのいい映畫の作製費捻出のために、僅かに映畫に慰安を求めやうとする、日系の善良なる多くの豐かならざる大衆が犧牲にされていいものだらうか。

日本ニュース、我々は近頃感激なくして見ることが出來ない。そして一人一人の滿洲日本人にぜひ見て貰ひたいといつも考へる。しかし實際は一圓三十錢でつまづく。場內は決して混んではゐないのだ。僕はこゝに不合理を感じる。

日本ニュースはぜひ見なければいけない。國民の全部に見せねばならぬ。かういふ考へ方を先づ第一において、入場料稅金といふものが考慮されなければいけないのが今日の急務ではなからうか。

速急の考慮を煩はしたい一つである。

（十七年九月）

樣々な想ひ

一、

牡丹江に出張したとき、偶然その地で藝能祭があることを知り、私は大へん樂しみにそ

の會場に出向いた。

實は切符は貰つたのである。たゞ〳〵私が文筆に從つてゐるところから、切符をくれたのである。その主は、牡丹江藝文協會の役員の人であり、初對面であつたが切符を下さつた。私は切符を自分で買つてもその會場へ出かけるつもりだつた。しかし貰へたことが遙かに有がたかつた、といふのは金錢の問題をはなれて、滿洲で同じ藝文のために働いてゐる同志として心の交流がヂカにひびいてきたからである。

滿洲の地方地方で、夫々その土地の藝文のために働いてゐる人たちが、既知も未知の人もお互ひに同志的な感情をもつやうになつたものがどういふところから發生したかといふと例の文話會からである。今日もはや文話會を云ふ人はなくなつたが、かういふところに尙文話會の精神は生きて遺つてゐる。まづ私はさういふことを、またもや感じさせられたのである。

藝能祭を見ての感想を、いまここにくだくだしく取擧げようとは考へない。たゞ今後の參考になりはしまいかと思ふ點を書きとめておかう。

第一には、日本の劇映畫を一本添へ物にしたのが解らなかつた。或ひは當事者としては藝能祭に華を添へるつもりだつたかもしれないし、また入場者の少いことを氣づかつたのかもしれなかつた。しかし私の見た限りではこれは杞憂にすぎず、映畫はむしろ邪魔物の感じだつた。

白系露人の音樂、歌、舞踊、滿系の支那芝居、鮮系の歌と舞踊、日系の演劇、私たちはこれだけで十分堪能出來、全く樂しい雰圍氣に浸ることが出來たのである。

入場者は、一日限りの晝も夜も立錐の餘地のない滿員で、かういふ催しへの期待がいかに大きいかといふこと、かういふ催しがいかに民族相互を、同じ國民としての感情の中へ近づけるかといふことを私は沁々と感じさせられた。

觀衆は見渡したところ、各民族を遺憾なく取混ぜてゐる。そして異つた民族の演じるものを心を開いて受け入れてゐる。かういふ雰圍氣は寔に尊いものだと思ふ。

そしてかういふ雰圍氣を巧みに醸成さすためには、解說の役目が實に大きい。この解說が十分に施されてゐないと、徒らに相互のもつてゐる文化の甚だしい喰ひちがひのみを味はせるのみで、場内を喧騒にしたり、民族相互間の近づきにくさを感じさせたりする恐れたしとしない。

二、

私は今度或る國境の町を覗いてきて、その町の凄涼としたさまに驚かされた。料亭屋、カフエー、名ばかりの食堂があるばかりで、その外には何もない。北邊の守りのために、無言の戰ひを戰つてゐられる皇軍の將士が、たまの休日に町に出ても、このやうな魂の凍るやうな雰圍氣のみでは、全くお氣の毒でならないと感じさせられた。そして私はつくづくと私の都會生活について反省させられた。

それと同時に私の考へたことは今日滿洲の大都會に集中してゐる喫茶店を、かういふところに移駐せしめては如何といふことであつた。一軒でいいから、お茶だけを飲み、或ひはレコードをきき、備へ付の新聞、雜誌の類をゆつくりと讀んで、一時をすごせる場所を捧げたいと思つた。かういふものが營利として成立しないといふのならば、さういふ設を設けることを滿洲に居る私たちの間で運動を起してもいいのではないかと思ふ。現在の將士が決して料理屋カフエーでは心を滿たされないであらうことは、火をみるよりも明かなことである。さういふことは例へば牡丹江といふ都會を歩き、書店の中に群れてゐられる多くの軍人を見てもわかることである。さういふ意味から私は「滿洲良男」といふ雜誌の行き方にも、限界を感じる。

三、

無駄、贅澤、節約といつたことが、私たちへ何か執筆を頼んでくるときの主題に扱はれてくることも多くなつた。

けれど今日は、無駄なことであるからとか、かういふ贅澤は怪しからんとか、かういつたものがもつと節約されなくてはならないといつた風の言ひ方で濟まされるときは、もはや過ぎ去つたと考へる。

今日では、いかなる物の不足、いかなる困苦缺乏にも、耐へてゆくところの精神力を漲らさなくてはならないと考へる。必ずしも無駄のみが問題なのではなく、無駄なものではなくても、この一戰の完遂のためには犧牲にされなくてはならないものが生じてきよう。節約は自らこれを行ふのみでなく、計畫的に節約が要求されても來よう。

贅澤といふ言葉が、過去に於て有り得た追憶の言葉としてのみ意味をもつやうになるところまで行くことになるであらう。そこで私たちにとつて必要なのは、無駄、贅澤の排除、節約のみではなく、いかなる困苦にも耐へてゆくところの勇猛心、一大決意が今日で

は必要なのである。それは要求されて目覺めてゆくばかりでなく、私たちの一人一人が、さういふ場合に直面して、直ちに「おう！」と受けて起つてゆくだけの覺悟を養つてゆくことが必要なのである。

四、

近く日本でも、圖書、雜誌が四割減となるやうである。現在でもぜひ讀みたいと思ふ本は毎日のやうに本屋の店頭に日參してゐないと手に入らないのだから、四割減ともなればいよ〳〵その入手は困難だと考へなくてはなるまい。

過日田中總一郎氏が、隣組を通しての雜誌の輪讀を說いてゐられたが、まことに適切な發言であつた。知識といふものは個人が私有して濟まされるものではないのだから、隣組の輪讀などといふことは、例へ購讀が窮屈でないときでさへ實施されてよかつた筈のものである。

しかしそれがいよ〳〵窮屈になつてから實行されてくるといふところに、ものの自然の姿もあるわけで、人間といふものは追ひつめられぬとこれを實感として體得しない傾向があるのだから、さういふ風にして思ひ知らされるといふことも確かにいいことであらう。

それと同時に一方に於て、今後いよ〳〵施設を擴充して貰ひたいところがある。それはどこかといふと圖書館である。

讀書生活に於て、元來圖書館への觀念は、即座に必要でしかも手に入らない本を讀みにゆくところといつた傾向があつた。讀書生活に於ける副次的な存在として圖書館は考へられ勝であつた。しかし今後は、個人の購讀といふものはいづれかといへば特殊なものとなつてゆくであらうから、圖書館はまづ優先的に優れた本に對しては副本を備へるべきであらうと考へる。

元來私は、圖書館がどの本に對しても一通り一冊づつ揃へてゆく方針に對して疑問をもつてゐた。なるほど廣い範圍に一通り揃へてゆくといふのも、たしかに一つの方針ではある。しかしそれは圖書館としての性格の消極性をも現はしてゐるともいへよう。

今後圖書館は、この本は一人でも多くの人に讀ませたい本だといふものは二冊でも三冊でも備付けるべきだと考へる。圖書館はさういふ擇一眼と同時に、人心に對する指導力を發揮してゆくところに今日の圖書館としての意義が生じてきよう。

勿論文獻の永久保存といふことも圖書館の役割ではある。だがそれは文獻が生かされて

讀まれたその結果としての機能だと考へる。殊に今日出版される活字本に於ては、その優れたものについては一人でも多くの人に讀まれるための方策を講じるところに、圖書館の社會教育機關としての職能が果たし得る筈である。そのためには、いい本は別本を備へていくといふ方法を積極的に取擧げなくてはなるまい。これからが圖書館のその存在意義をくきやかに發揚し得る絶好の機會である。

五、

先日の滿新の社說で、米英文化の撲滅を扱ひ、ハンドバツクの排擊にまで觸れてゐた。私は讀んでゐて些か憮然とした。私とて何もハンドバツクを擁護しようとは思はないが、かう話が底を衝いてくると、論者自身の苛らいらと焦躁した表情ばかりが眼に泛んできて書かれてゐることは、少しも讀者の胸に迫らず、しかも共鳴から遠ざかるばかりなのである。

ハンドバツクはいかん、それなら近頃發明のあの大きな買物袋がいいだらうか。あの買物袋は、澤山物が入ると見えて、何でもかでも買ひ漁つて呑みこんでしまふ。これではまた時局の要請に反するではないか。

してみるとハンドバツクがいけないのではなく、また買物袋がいけないのでもなく、落着くところは、各人の心構へではないだらうか。

私は今こそ戰ひの覺悟の必要なときはないと確信する。目に見えるものを論ふのは、むしろ末梢を論じるに等しい。

敵は我々を叩きつけるといふ。私たちは彼らを叩きつけてしまはなければ、どうしてもならないのだ。そのためには私たち一人一人が反省のある生活をし、常に決意を新たにしてゆくことが最も大切なのだと考へる。

（十八年三月）

非常時の感想

このごろ映畫を見にいつてもの足らないのは、日本ニュースが、日本ニュースとしての完全な形で見られなくなつたことである。滿映のニュースの中に、日本ニュースの中から特に大きいトピツクが一片なり二片なり挿入されてゐる形に改められたのはどういふ事情

に基くのであらうか、映畫界の内側の事情に知識をもたない自分などにはよく解らないことである。

或ひはフヰルム資材の節約とか單なる節約以上に、さうせざるを得ない程度に、資材が窮屈になつてゐるためかとも考へられる。それからもう一つ全然異つた角度から考へられることは、滿洲國といふ一國の見識から、やはり國内に於けるニュースを中心とし、日本におけるニュースはこれを寧ろ從屬的立場に置くといふところから出發した考へ方である。もしこの考へ方から滿映ニュースへの日本ニュースの採錄挿入といふことが行はれたとしたとするならば、私はそこにもう少し考慮の餘地がありはしなかつたかと疑問符を打ちたいのである。

改めていふ迄もなく今日のニュース映畫は、恰も新聞に於けるニュースが、單なる事實の漫然たる報道といふ域から脱却し、そこに民心の統一、輿論の指導的意義が尊重されるやうに、ニュース映畫も、殊に各新聞社で亂發されてゐたときとは異り、日本ニュース一本に統一されてからは漸次に統制力を備へ秩序づけられた指導意識が明確にされてきつゝあつた。

一方滿映ニュースは當初より國策として出發したものであるとは、指導力の期待されたことは當然であつたが、時局畫の撮影、編輯、アナウンスは未だ十分ならざるものはあつたが、その意圖するところはどうにか窺ふことが出來た。[illegible]

そこで日本ニュースを省みるに假に戰爭、國内双方の劃期的ニュースがないものであつても、必ずそこには銃後の緊張した生活風景が現れ、海を越えた大陸にある我々に屢々深い感銘と反省を促し、祖國に對する愛情を呼びさまされ、或はそれを一層濃化するものがあつた。私はその故に日本ニュースを見る事は、在滿日系にとつて是非必要な日本認識と時局認識の有力なる資料と考へてゐた。[illegible]

また何程なく背景とされた日本の美しい風景、名所古跡に接し鄉土愛と、鄉愁を呼びさまされ、それが祖國に對する愛を濃厚にし、さらに海外に在るものゝ心情を潤してゐたのである。[illegible]

この故に私は滿映ニュースを觀ることが、滿洲國民として必要なる如く、日本ニュースを觀ることとそれを原型において見ることの必要性を痛感するものである。[illegible]

商店の無愛想といふことが近頃強く叫ばれてゐる。親切運動などといふことが云はれ、内地に於ても物資が窮屈になるに從ひ、この問題がいろんなところから火の手が上つてゐることが、新聞紙上などで窺へる。

ゆしかし滿洲では無愛想たことは今日にはじまつたことではなく昔からの氣風で、それが最近濃化されたとみるべきが正當のやうである。

それは商人に植民地出稼ぎの意識が強く、從つてそれが店員に反映してゐたとみらるゝべきであらう。しかし今日の無愛想といふものは、無愛想といふ程度のものではなく顧客を輕くみるといつたところにまで脫落してゐる。もとよりこれには顧客の側に在つても反省すべき點が幾多あるかと思ふ。

たとへば行列をみれば何を賣つてゐるかを調べてみようともせず、並ばなければ損だといつた氣持で直ちにその行列に參加して醜體をさらすごとき、また風聞に怖えて徒らなる買ひ溜めに狂奔するごとき、更に店員に向つてまるで哀訴するが如き態度に出づるもの、無いものねだりを執拗に要求するが如きは、販賣者側の輕蔑を增すばかりであらう。

先日かういふことがあつた。明治製菓賣店で紙袋入りの菓子を賣つてゐた。そのとき人々はまるで中に入つてゐるものが何であるかを透視したかの如く無雜作に買つて歸つていつた。偶然通りかゝつた私は、中に入つてゐるものが何であるかを、その係の女店員に訊ねた。すると女店員は訊かれたことが意外かのやうに口でもつて答へようとはせず、その紙袋入りのものゝ一つを開いて、盆の上に四つ五つ出して見せた。

そこで私はそれを買はうと思ひ一つ下さいと言つたところが、女店員はその四つ五つ、固パン風のものを取り出した紙袋の分を、そのまゝ私に差出したものであつた。まさかそんな四つ五つ拔かれたことについて文句をいつて代へて貰ふといふのも吝くさく、そのまゝそれを買つて歸つたもののやはり好い氣持ではなかつた。近來菓子は貴重品である。

それに對してこの無神經な扱ひをされると、私はまづ商店の店員に對する訓練の不十分な感じをさせられた。これは親切とか無愛想とかいふ事以前の問題に屬しよう。

かつて大連の電車やバスでは、切符を切つたり、下車する度に毎度有難うございますといふことを言はせてゐた。車掌に「毎度有難うございます」といふ言葉の意味するものに理解がなく機械的に言はれる場合はむしろ空々しい感じを免がれない。

これは正に行き過ぎである。接客業者に親切を求めることはいいしかし嘗ての如き追從、阿諛、虚榮心の滿足に通ずるものが、顧客の意識に若し鄕愁となつてゐるとしたら、これは新商人道を辨ぜざることの甚だしいものといふべきであらう。

あるひは社說となつて現れ、學藝欄の論說となつて現れ、文藝專門家出現に對する待望の聲は益々熾烈を加へてゐる如くである。

これは最近の如く滿洲作品竝びに評壇の沈滯低調ぶりにあつては、當然起るべき主張であるかもしれない。なるほど日本に於ける如き、而して世界の文學界に於ける如く、職業文學者の出現を要望する聲は、極めて自然な聲であるやもしれない。

ところでかういふ文學專門家の出現を期待する論說の場合に於ていかなる作風のいかなる程度の作品が期待されるのかといつた點にまで觸れたものは殆どみないかのやうである。私はこゝに不滿をもち、こゝに問題を感じるものである。

といふのは、試みに想ふのに、滿洲の新聞、雜誌刊行物紙上に現れる內地作家依存が解かれ、とに角滿洲の作家によつて滿洲のジャーナリズムの全紙面が飾られ、とに角一應賑かになつたらそれで濟むかの如き口吻をこれらの文學專門家出現待望の聲の中に聽きとれ

[illegible]

[illegible]他の部門、分野におけるが如く自給自足然出來たらいゝといつた感色をこれらの主張の放つ雜音と見えきゝとれなくもないことは、私の秘かに遺憾と思ふところなのである。

私は滿洲文學に於て眞に必要であり、欲せらるゝものは滿洲大文學の出現ではないかと思ふ。單に內地作家の占めてゐたスペースを滿洲の作家が獲得しさへすればそれでいゝ、それで濟むんだといつて事終ることではないと考へるのである。

假に何人かもしくは十何人の職業文學者が起つたとする。しかるに新聞にしろ、雜誌にしろ、漸次紙面の窮屈さを加ふることは爭ひがたき、また止むを得ざる事由である。すると純粹に本格的小說のみで起たうとしたものも、雜文なり、或ひは寶文的意識の下に書かれたものなりをも、書かないことには生計が成立しないといふ結果に陷りやすい。そしてそれが所謂職業作家の陷りやすいところの陷穽なのであることは、これを事例に求めるまでもなく瞭かなところである。

いふまでもなく職業作家にしても生まれながらの職業作家といふものは有り得ない。いづれも當初は素人として出發し、而してその實力によつて專門化するものである。

かく考へてくると、滿洲大文學を生むためには、今の文藝家協會會員が中心對象となるばかりでなく、もつと廣く野に遺賢が探求さるべきであらうと思ふ。さういふ意味での方策こそが今日只今最も緊要に關するものではないだらうか。

中山義秀氏が嘗て「愛國」と題する短文を書いた。私はこの短文がいつまでも頭から離れないでゐる。

いまその一節を拾つてみると、次のやうな言葉がある。

「幾千幾萬の生命が、護國の鬼と化しつゝあるやうな現代において、國を愛する熱意と、文學に奉仕する精神とは、兩立しない」

「現代を純粹に生きるには、愛國の至情に徹するよりほかはない。さう考へたら私の心は、とみに明るく淸々しくなるやうな氣がした」

「ともあれ私は非情な文學精神に奉仕する情に堪へられなくなつてきてゐる」

寔に悲痛な感慨であり、かゝる想ひは今日まで所謂純粹に徹して文學してきた人々、即ち文學に奉仕し、文學のみに生きてきた作家態度を持した人ほどに勁い實感であらう。

私はかゝる述懷に寔に深く衝たれたのである。そしてこれは今日までの日本文學の特に大正、昭和の文學の影響の下に育つた若い作家たちには一應共通的に理解されるものであらうと考へる。

といふことは文學する想ひに在つて、その中心となるものに國を想ふの情が貫かれてゐなかつたことを意味しよう。まことに遺憾であつたことには、文學に於てはひたすらに人間のみが對象であり、普遍的人間或ひは人生探求のみに終始してゐた感がふかく、そのために徒らに人間心理の解剖から心理のからくりを弄ぶのにも似た所謂心理小說、現實尊重の行過ぎとして、專ら醜惡なる事實の暴露を事としたもの、或ひは浪漫主義の美名に隱れて作家生活の放恣ささへこれに甘んじせしめようとする如きもの、或ひは文學を以て、第三國の走狗となり國を賣らんとするが如きものさへ登場する。その他樣々な意匠が用ひられたやうに思へるのである。

かういふ言ひ方自體は、甚だしく文學の尊嚴を傷けるものとしその譏を受けるかもしれないが、私は今日までの文學がその意識において國を想ふの一線にふかく立脚してゐなかつた限り、かく極言して近來の文學を呼びたく思ふのである。

國家存亡に際して文學がその人間の感情に訴へる機能に於て、その立場から、國民意識

の統一に向つて働くことは當然のことであり、直接にはさういふ主題を扱つた作品ではないにしろ、少くともかゝる國民意識の統一昂揚といふ一線からは決して離るゝことはなく、離れたものは今日發表は許されないはずである。特に滿洲文學に於ては、各民族を貫いて運命共同體的意識の下に貫かれた大文學の出現こそが、今日最も求めらるべきものではないだらうか。

（十七年十二月）

言葉について

戰爭が次第に深刻になるにつれまして、人々の心がそげくしくなるのは、どこの國いつの時代にもみられる所であります。心がとげくしくなると、思ひやりとかやさしさが少くなり、人に對してどうしても不親切になつてきます。するとその不親切が次ぎから次ぎへと人に傳はり人の心を荒げます。これが國民の一致團結した結束を紊すもとにもなるのであります。だからいかなる困難に際してもお互ひになごやかな心と親切な態度を持ちつゞける國民こそが、最後の勝利を得るのであります。

お互ひにやさしく勵まし合ひ、親切を盡し合ふことは、物の不足を心で補ふことになるばかりでなく、敵の一切の謀略を受けつけないことになるのであります。そこで溫い心を現はし、親切を示すものはなにかといふと、人に接する態度とか表情とか、心づかひとかありますが、第一には言葉であります。

私たちの日常生活に缺くことのできないものとして、よく衣食住（着る物、食べるもの、住まゐ）が擧げられますが、これらと同じ程度に私は言葉も數へたいと思ひます。人は生活を樂しいものにするために、着るもの、食べる物、住まゐには、色々と工夫を重ね、それを實行します。ところが言葉もそれを聽く立場に立ちますと、發音は正しいか、言葉の調子、言をうとする事を正しく傳へてゐるかどうか、また相手の理解の程度にピッタリ合つてゐるか、相手に失禮に當る所はないか、餘りに丁寧すぎはしないか、周りどくい言ひ方ではないか、ムダはないか、相手との距離から言つた聽きとれる聲の高さであるかどうか、言葉尻が判つきりしてゐるかどうか……一寸拾ひ擧げてみましても、このやうに多くの問題をふくんでゐるのにも拘はらず、實は私達は實に不用意に喋べつてゐる場

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

じが強いと思ふのであります。

このやうにおろそかには出來ない筈の言葉が、どうして案外不用意に扱はれてゐるかと申しますと、一つには言葉は空氣を振動させるだけで相手に傳はり實在がないために、一度で解らなかつたらもう一遍言ひ直す、失禮な言ひ方、間違つたことを言つた場合、或ひは要領の悪い周りくどい言ひ方をしても、簡單に改めて言ひ直せる。

それは金もかゝらないし、少し餘計に喋つたからといつてテキメンにお腹が空きはしない。それに私達は小さい時から家庭で、學校で、友達同士で、社會で、日本の言葉に慣れきつて、殆ど反射的といつてもいい程大して頭も使はず喋べれるといつた狎れもあり、それらのことが重なつて言葉を尊び、大切にし、快いものにしようと進んで努めないのではないかと考へられます。

一體に私達は言葉、日本の言葉、日本語、國語に狎れすぎてしまつた憾みがあります。ここで私達は國語の尊さについて反省してみることが大切ではないかと考へます。

わが國語が、原始アルタイ語系を引いたものであるとか、或はマレーポリネシア語とも關係があるとかいつた問題はこれは言語學者にお任せするとしまして、少くとも國語は悠久二千六百年の上代から現在に至るまで、大和民族の發展につれまして、時代から時代へ傳りその間常に少しづつ變化し發達しながら私達に傳はつた、大切な寶物ともいふべきものであります。私達の血に日本精神が脈うつてゐますのと等しく、私達の國語には大和民族の遠御祖からの傳統が流れてきてゐるのであります。と申しますのは、實に國語には、大和民族の國民性とその物の考へ方とか、物の感じ方とか、日本國土といふ環境とを、母として畑として、その上に發生し、發達してきたものであり、それはまた極めて自然に發達してきたもので、そこに本當の日本的なものを映し出してゐるのであります。

最近出ました「國土の精神」といふ本がありますが、その中で日本の言葉に觸れまして「個人的な意志をことさら强調して表現しない」つまり自分を主張しない。これはもつと大きなもの、家なり國で統一されてゐるからであります。また「呪唱や罵詈の言葉がなく、その代りに鄭重ないひ廻し方が多いといふ點の外に、特に誇張的な裝飾的な表現、比喩、華やかないひ方が少い。更に呼びかける言葉や、感嘆の言葉が少いことに氣がつく」と申し、最後に「このやうな日本語の特色は、要するに久しい年月の間に育まれた共通の民族的體驗が前提となつてゐるのであつて、言語の外に不識の中に互ひの感情、意志を

表現することが、これによつて可能とされてゐるのである。言語は人と人とを結びつける數多の紐帶のひとつにすぎないからである」と申されてますがこれは定にこの通りでありまして、大和民族の血と血との連りは、多くの言葉を用せずして意志がよく傳はり、言葉の餘韻によつて感感に慧く、氣持を傳へることができたのでありまして、例へば會話中に、手振り身振りの少いことからも窺へるのであります。

從ひまして、日本は「言擧げせぬ國」といはれ言葉を多く用ひずとも、血の連りが強く言はずしてよく團結をみたのであります。その代り發せられた一言は鐵石の重みをもつたものでありました。よく額などにあります「不書實行」、それから下世話に申す「武士の一言」、また「日は口ほど物を言ひ」といつた言葉もこの間の消息を傳へてゐるのではないかと思考へます。

[illegible]が今年の陸軍記念日だつたかと存じますが「撃ちてし止まむ」が標語に選ばれまして、今日では、商店街至るところに見受けるのであります。これは日本の國語ではありますが神武天皇樣の御代のお言葉で、今日では大へん變化してをり、果たして日本人全部が、正しい言葉の意味を解してゐるかどうか、私には解りかねます。しかし、このお言葉をくりかへし拜誦してをりますと、日本人ならどこかとくるものがあるわけです。それは言葉の意味といふことを離れて、私たちの血に、言葉としての調子、感じから私たちの胸に、耳に訴へてくるものは、本來意味するところとピツタリ合つた感情が傳はつてくるのであります。これが大和民族の血を受けたものの有がたさであり、國語の尊さであるといへると思ひます。このことは毎日お畫の默禱の時間の「海行かば」にもいへると思ふのであります。[illegible]

さらに、詩を大にして誇つていいところの一大特色が、國語にはあります。それは敬の語であります。敬語の使ひ方によりまして、相手を尊敬する心や、自らをへり下つた謙遜語心をこまやかに現はすことのできますのは、恐らく世界の言葉の中で、他に例をみない所だらうと存じます。[illegible]

「初等科國語」七の卷に載つてをります如く、[illegible]

「古來わが國民は、皇室を中心とし、至誠の心を表はすためには、最上の敬語を用ひることをならはしとしてゐる。さうしてまた長上を敬ふ家族制度の美風からも、丁寧な言葉づかひが重んじられてゐる。わが國語に、敬語がこれほどに發達したのは、つまりわが國

がらの尊さ、昔ながらの美風が、言葉の上に反映したのにほかならないのである」

と言はれてありますが、全くこの通りでありますことを、私たちは私たちの國語の誇りとする所であります。

先程來申上げてをりますやうに、私たちは日常に於て、言葉の尊さといふことを殆ど忘れてしまひこれを美しく亡してゆかう、正しく話さうといふことに努力が足りない恨みがあります。殊に近頃のやうに、各人が忙しくなり、色々不自由も多く、物を買ふにも手數がかゝるといふとき、ともすると荒々しい心がむきつけになり、それが、とげとげしい言葉となり、その荒々しい言葉を受けた相手は、また第三者に向つて、相手を刺戟するやうな不用意な言葉遣ひとなるといつた傾きが濃いのであります。

私先日一寸、北鮮の羅津へ參りまして、氣づいたことでありますが、どの商店に參りましても、寔に溫い言葉遣ひをしてゐるのが強く印象に遺つたのであります。

もはや餘計なお世辭を求める、客に阿ねる時代ではありません。また客であり商人であるといふ立場から商人は客に對して言葉を愼しめといふのでもありません。日本人と日本人同士の緊密な血の連りに於て、もつと同じ同胞としての溫い親しみの心から、言葉が發せらるべきであると思ふのであります。お客意識で横柄に出る、かういふ傾きは近來全く薄れましたが、これもやはり間違ひであり、むしろ近頃は、時には商店などで憐れみを乞ふやうな言ひ方をしてゐる場合さへ見かけるやうになりましたが、これも亦却つていかがかと思ふのであります。必要以上にさういふ態度に出ることは、心ない商人をして增長させ侮らせるもとともなるのであります。

再び羅津の話に戻りますが、假にかういふ親しみのある言葉遣ひの行はれてをりますところへ、例へば滿洲の都會から商店が進出してゆくとします。すると滿洲人は人を人と思はないやうな言葉遣ひになれてゐた商人も、必ず短い時間の間に、大して苦勞もせず、意識もせず言葉遣ひは、改まつてくるのであります。

つまり言葉遣ひの良し惡しは、環境に支配されるところも亦大きいのであります。

今度は羅津の商人を滿洲の都會へ進出させたとします。すると自然にこちらの言葉遣ひに同化してくるだらうことは、もしその商人に、國語に對する深い認識、尊ぶ心、またはそれらがないとしましても、餘程心構へのしつかりした人でない限りは、次第にこちらの言葉遣ひに狎らされてしまふものであります。

「言葉は心の鏡」――かういふことが言はれてゐるやうに記憶してをりますが、その通りであります。

もし荒々しい、人を人とは思はぬやうな言葉遣ひの横行してをります中に、一人心の温かさをしのばせるやうな言葉遣ひをしてゐる人を發見しますならば、必ず皆さんの耳の神經が緊張し、それが心に傳はり、心は頭に注進し、頭は目を動員して、その人の方をふり向かせます。この活動はほんの一瞬の間になされるのですが、まアさういつた過程を通るものと思ひます。

果して、頭への眼からの報告はどうかといふと、物腰し、態度の落着いた、靜かな或ひは顔は美しくはないかもしれないが、感じの良ささうな人だ、といふ報告になるだらうと信じられます。

まことに「言葉は心の鏡」であります。いかに言葉だけを飾つても亦、これは綜合點は惡いのです、「おべんちやらだ」、「口先きだけだ」、「お調子者で……」といふことになります。

そこで「言葉は心の鏡」であるといふことの裏づけとして、「言行一致」といふことが言はれるわけであります。この子供のときから耳慣れた「言行一致」といふこと、いま皆さんもかなり輕く聽かれたのではないかと、私は推察するのですが、「言行一致」といふことを、自分の胸に靜かに反省してみると、この言ひ慣れ、聽きなれ、或ひは目で見慣れた文字が、いかにむづかしい困難なものかといふこともお解りになつてくることと存じます。

只今交通訓練が行はれてをり、國民學校の上級生が街で交通整理に當つてをります。

「左側を通つて下さい。」かあいい聲で叫んでゐます聽へない風をしてゐる人默つて左側にゆく人、「ハイ」「御苦勞サン」といつてゆく人は殆どないこれは淋しいが實際です。

さてもう一度話を羅津の町に戻します。私は先程羅津の商人の言葉遣ひの溫かさを擧げました。それでは、その人たちが、半島の人にどんな風であらうか、といふことが氣にかゝつたのであります。

言葉は形を遺しませんから、今までペコペコした物言ひをしてゐた人が、俄かに相手が

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled × 31 lines

變はると、忽ち横柄な、人を見下した言ひ方も出來るわけであります。往々にしてさういふ場合を見受けまして、眼に傳令を出して、その人を見直すといつたときも決して少くないのであります。

夕方のことでしたが、ある瀬戸物屋さんに、半島の國民學校二年生位の女の子が、配給のお弁當箱を買ひにきました。

「お弁當箱ありますか」

「あ、お弁當箱はネ、大きさが色々あるから配給票を見せてごらん」

「ハイ」

女の子はしやがんで地面の上にグルグル卷いてゐた風呂敷をひろげ、その一方の隅に配給票とお札をまきこんでゐたのを開いて出しました。主人はそれを受とつてみて、

「あゝ、これはね。家ではないよ、ホラここをもう少し行くと、左側に金物屋さんがあるだらう。あそこへ行きなさいよ」

「ハイ」

この主人もさうでしたが、半島の子の「ハイ」といふ返事は、きれいな言葉で、胸を校られるやうな美しい聲で、私は大へんうれしくこの會話をきいてをりました。

これまで私たちは、私たち日本人の間だけの國語、そして言葉遣ひについてお話して參りました。ところが、私たちが滿洲で日本の國語を話してゐることは、同時に滿洲帝國の國語としての日本語でもあるわけです。

國内の他の民族の人達、殊に青少年層の人達は一所懸命みな語學を勉強してをります。語學として日本語を勉強してゐます。

その人達は、或ひは電車、バスの中で、街で、商店で、日本人が話をしてゐるとき、耳を澄まして皆さんの會話をきいてをります。皆さんは話に熱中し或ひは買物に無中になり、この默つて耳を澄まして、自分の語學の勉強に役立てようとしてゐる青年なり少年なりに恐らく氣づいてはゐられないでせう。しかし他人の會話を、私はきいてゐるぞといつた態度をしなくとも、耳から容赦なく言葉は耳に入つてくるものであります。

果たして皆さんは、不用意なお喋りをしてゐないだらうか。かう申上げますと防諜關係のお話のやうにもなりますが、話の内容そのものについても幾多問題はあるわけでありますが、いまは、言葉としての日本語として、正確だらうか、發音は、言葉の調子は、へん

なナマリは入つてゐなかつたか、―これらの諸點に確信をもてる人が多ければ全く幸ひ。

あります。

いまや日本語は、私達だけの日本語ではなく、大東亞の日本語、世界の日本語として飛躍し發展せんとしてをります。殊に滿洲國に於きましては、國語になつてゐるのでありまして本家本元の日本人である私たちが、亂れた日本語を喋り散らすことは、將來滿洲に、大東亞に亂れた日本語を傳へ擴めることにならないとも限りません。私達は正しい國語のお手本を示せるように努めることが、私達大陸に在る日本人の一つの勤めであると存じます。

大連のある家に、京都のそのまゝの方言でおし通してゐる小母さんがありまして、そこに小さいときから住みこんで働いてゐるボーイさんはその聽き覺へで、一切京都辯を使ふのですが、まことに變な感じのものでありました。

南方でも青少年日本語教育を着々とすゝめてゐますが、肝心の日本人が亂れた言ひ方をするので、それが障りとなつてゐるといふことを最近ききました。

物を買ひにゆく、「コレナンボカ」「コレグレ」「コレハイクラデスカ」

私の友達に、日本語の特等を通つた滿系の方がありますが、文法上のことなど訊かれると、私など確信を以て答へられないことを恥じてゐるのでありますが、あるとき、この方が、

「どうも日本の娘さんが、『アラ、さうーネツ！』といつてゐるのをきくと、身ぶるひするほどイヤな感じがするのですが、青木さん、どうですか」

と言はれまして、なるほど私自身は狎らされてしまつて、身ぶるひするほどではないですが、「アラ！さうねツ」はたしかに感心できないものであります。

滿洲に居ります日本人は、日本内地全國からの寄り合ひでありまして、樣々な方言が亂れとび、それらのナマリの幾つかは知らない間に、感染してしまつてゐることも多いのであります。

方言といふものは、それぞれの鄕里にありましては、正しい言葉であり、他鄕の者の圖られない微妙な感情をも傳へられ、打てばひびくの感があるものであります。しかしそれは同鄕人同士の間だけのことでありまして、一たび他國の者と一緒になりました場合は、標準語によるべきでありませう。

殊に滿洲に於きますやうに、他民族が日本語を大いに學びつつある所においては、方言を用ひ、或ひは方言に容易に感染してしまつた、亂れた國語とすることは、私たちの相共に大いに警めなければならないものと信じます。

また滿語を用ひます場合に在りましても、これを「ニイや」といつた如き、珍妙な言ひ方をする如きは、ぜひとも止めるべきであります。

ある人によりましては、「ニイや」といふのは、國語でいふ、「坊や」、「姉や」の如きもので、「坊やん」「姉やん」、「坊さん」「姉さん」の變化したやうなもので、必ずしも侮蔑した言ひ方ではないとも申されてをりますが、或ひはさうでありませう。

しかし乍ら、「ニイ」といふ滿語の下にもつてきて、さういふ甚だしく變化した、或ひは變化してゐないとしたにしろ、日本語をつける如きは變態も甚だしいもので、國語の尊さを傷つけるものであり、また滿語をも傷つけるものであります。

私たちが滿語を使ふ場合は、國語に於ける如く、どこまでも正確な言ひ方に努めることが、私たち自らを卑しめないことになると信じるものであります。

殊に私たちの後を繼ぐ子供たちに對しましては、第一に「相手に解る言葉」、そのためには、その場その場で動かしやうのない正確なものであること、前後の連絡のはつきりした纏りのある述べ方、發音正しく、高い聲、言葉尻を判つきりさせる、第二に「相手によつて正しく使ひ分ける」、第三の「標準語であること」といつた三つの點に十分注意して指導さるべきだと存じます。

言葉は相手に、こちらの考へ、感情を傳へる道具にすぎないといつた考へ方は、根本的に間違つてゐるのでありまして、この點に就いては、もはや御解り願つたことと信じますが、使ひ方によつて、心と心、即ち人と人とを結びつけもしますし、又切り離しもする力をもつてゐます。さらに私たちの國語を正しく用ひますことは、小さくは、その人自身の人格、育ち、教養の物さしともなり、また今日の未曾有の國難におきまして、還御祖からの傳統の精神を發揮し、お互ひに助け合ひ、いたはり合つて、國内の團結を固め、勝ち拔く精神力を生むもととなり、言葉は國内の團結を強力に固める武器であります。

（十八年十月）

主流よりの逸脱

一、

用紙配給制限から、嘗ては雑誌ヂヤーナリズムと共に、日本文壇に大いなる發言と、地位と、寄與とを果してきた東京の各新聞學藝欄も、一、二紙を除いては殆ど見るかげもない、有るか無きかの存在となつてしまつた。しかしこの現象を單に用紙統制が學藝欄スペースに影響した結果とのみ斷ずるのは、少しく早計である。もし嘗ての華かなりし當時の學藝欄が、眞に讀者全般の支持のもとに在り、讀者に良き日日の精神的慰藉と、啓發とを與へてゐたものであつたとしたら、例へ用紙制限があり、學藝欄の縮小といふ問題が起つたとしても、その縮小のされ方は、壓縮されても彈力性のある、所謂「小粒でもピリリと辛い」ものになつてゐた筈である。

然るに實情に就いてみれば、例へばその文藝欄が呼びものの一つであつた讀賣新聞の今日の學藝欄の如き、まともに論ずるには耐へられない、埋め草的存在に陷つてしまつてゐる。かゝる悲慘さに顚落したのは、今日社内上層部に於て學藝欄に對する考慮が强力でなく、從つて配屬される記者も優秀ではなく、良い原稿を集めるための企畫と、執筆層の支持も生じて來ないわけである。

かゝる結果を生んだ大いなる據點をいへば、嘗ての學藝欄が、文學者乃至文學志望者のみに興味ある文學論といふよりは、文壇的原稿が中心となり、全讀者の精神的生活の伴侶としての道を選ばなかつたことに起因してゐよう。即ち學藝欄が一般讀者、國民の生活と餘りにも隔絶された專門家内部での論議と、ゴシップ的記事に滿たされてゐたことが、國民のための新聞でありながら、學藝欄のみが一の矛盾を胚胎してゐたとみられるのである。

二、

わが國に於ては各新聞學藝欄は、藝文欄、文化欄として、用紙配給の實情やスペースからみると、比較的學藝欄への社内での支持が大きいやうにみえる。これは表面的には社内首腦部に文化に對する關心が强いからだともいへるし、その根柢を形成してゐるものの中には、弘報關係の一切の指導に當る弘報處の、藝文指導要綱に翼賛態勢をとつてゐるとも、遲れたこの國の藝術文化分野に對する擔任記者自身の熱意ある企劃、編輯振りとも、乃至

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

は讀者の大半が俸給生活者層によつて維持されてゐるところからくる、讀者側の知識水準が高く、藝術文化欄に對する關心が、內地に於ける讀者層の知識水準の分析より高度であるといふことも指摘することが出來るであらう。また國內に今のところ有力な藝術文化に對する綜合的雜誌ヂャーナリズムが存在せず、從つて文藝欄に對する意義も深い。

もう一つ見逃すことの出來ない事由としては、ニュースが統一せられ、各紙とも殆ど同じ紙面になつてゐるので、せめて連載小說、學藝欄、家庭欄、圍碁欄等に紙面の變化をみせるより方法のないことである。

これらの諸因が相互に影響して、滿洲に於ける代表的新聞紙たる、大連日日新聞、滿洲日日新聞、滿洲新聞、哈爾濱日日新聞が、藝文欄、文化欄を重視してゐるのであらう。

ところでここに一應明かにしなければならないのは、學藝欄、文藝欄、藝文欄、文化欄と新聞によつて異る欄の名稱の有する意義を一應明瞭にしておくことである。學藝欄は學術、藝術に關する欄とでもいふべきであらうか。文藝欄は、文學各分野の綜合的名稱とみていいであらう。文化欄は、最も曖昧模糊としてゐる感があるが、學藝欄と實質に於ては同一方向を辿るべき名稱ではないであらうか。

最後に殘された藝文欄とは、藝文指導要綱の發表以後、哈爾濱日日紙、滿洲日日紙が、その學藝欄、文化欄を改稱したものであつて「文化の概念中より文藝、、美術、演藝、映畫、音樂、寫眞等を抽出し藝文と指稱して、其の觀念を明確ならしめんとす」（藝文指導要綱）といふのに則つて、藝文欄と改稱されたのであることは、要綱發表以後間もなく、藝文欄と改稱したことによつて明かであらう。

さて弘報處が文化の概念の混淆を憂ひて、所謂藝術文化を藝文と指稱し、それに則つた哈日、滿日兩紙が、藝文欄と敢て呼稱した欄に於て、前述の五つの分野に就いて遺憾なく紙面を解放してゐるであらうか。事實は滿日にしろ、演藝、映畫に關する欄は夕刊紙上に在り、その小欄に於て、最近も滿映に關する論評が連載されてゐたし、映畫批評などもこの欄に於て取擧げられるのが通例になつてゐる。また音樂、舞踊方面などの消息も、どちらかといふと演藝の欄に於て扱はれてゐるやうである。

してみると、藝文指導要綱に呼應して、藝文欄と改稱したものの、實際には單なる文化欄乃至學藝欄の看板の塗換へだけであつて、藝文の名に於て當然變革されるべきものがサボタージュされてゐるといふか、反省さるべきものが置き去りを喰つてしまつてゐるとみ

ていいのではないのだらうか。まして滿日には「思想戰と平和主義」「東亞の解放」といつた政治論文まで載り出したのでは、折角弘報處が規整した「藝文」の概念を、敢て弘報機關が混淆を計つてゐると、見られなくもないのだ。

而してかゝる矛盾に陷つた事由は、要するに「藝文」解釋の認識不足と共に盲目的な便乘主義、追從的態度が齎らしたところの結果である。

藝文が、文藝、美術、音樂、演藝、映畫、寫眞を包含するとはいへ、文字に表現されること自體が發表である文藝が、藝文欄の中心的要素となることは當然であらう、しかし藝文欄と敢て呼稱する以上は、他の五つの分野に屬する諸問題がもつと活潑に取上げられなかつたら看板に僞り有りといふことになりはしないかと考へるがどうであらう。

三、

以上で一般的問題は切上げて、現象的隨感に移りたい。

まづ思ひつくまゝ述べるとして、第一に、竹内正一氏が滿日紙上で鑓田研一氏の長篇「黃風」の剽竊に就いて書いたのに對し、鑓田氏の三百代言的駁文を、欄のトップに持つてゆくのは、まづ編輯者の頭腦を疑ひたいのである。これが若し論の當否はいざおいて少しでも中央に名のある人ならトップに持つてゆくといふ常識編輯でやつたとするなら、尙一層滿洲國の代表紙と稱する滿日の見識のなさに驚くのである。まだしも竹内氏の抗議文がトップであり、鑓田氏のもさうであるなら、機械的編輯として諒解出來るのだが。

それから滿日紙の横山敏男とかいふ先生の「しばらく批評の筆をとらないが云々……」で始まる「滿洲の文藝家に與ふ」といつた一文はあれは一體どういふ考へでのせたのだらう。あの先生は滿洲で今までなされた文學論、作品を少しでも讀んでゐるだらうか。まるで當てズツポウでものを言つてゐて風呂で屁をしてゐるみたいな代物である。そしてまたしても、編輯者の眼識を疑ひたくなるのだ。

またこんな例もあつた、大連日日に「滿洲の小說はつまらん」といつた式のいかなる積極的意義もない小文がのり、それを御丁寧に滿日が轉載し、遠田民雄氏によつて徹底的にやつつけられるといつた如きは、やはり編輯者の愚鈍さによるムダ道である。

最近の坂井艷司氏の滿日文藝時評も、氏の怪氣焰を擧げるために作品が引合に出されただけの話で、少しも作品の批評にはなつてゐない。あゝいふ論じ方をされたのでは引合に出された作家たちが莫迦をみるだけだ。

野川隆氏の評論も、筆者は橘先生の「民族性格の改造」には深い敬意を表してゐる一人だが、それの文學上の問題としては、もう以前野川氏の言はれた程度のことは論じられてゐる。實作上にまで進展した姿で論じらるべきだつたらう。

滿新は、文化欄と稱してゐる。これは融通性がある欄名なので、給講も、兒童文化問題も、民族問題も、科學も、歌舞伎の短評さへとび出してくる。

本紙の特長らしい投稿によるブックレヴューは多く內容紹介、提燈持ちを出でず、あれは醜體である。時々雜誌短評も載る。今日は「作文」第五十輯が取擧げられてゐた。現象に餘り捉はれず作品に精出せといふ親切な批評である。しかしこれは筆者に言はせると、藝文界に作品だけ沒頭させない種んな空氣はないだらうか。筆者の知る限りでは今まで滿洲で文學をやつてきた者たちには、自分の作品さへよくなればいい（勿論その努力はするとして）といつたエゴイズムよりは、滿洲の藝文界を少しでも明朗なものにしてゆかうといふ氣持が强かつたのではないだらうか。それが滿洲文話會をあそこまで盛り立てたのではないだらうか。もつと滿新に就いても書きたいが、間口が廣いせいか、載るものが散漫でとりつきにくく、大概見出しだけみて本文に入つて行くだけの食指が動かないものが多いのは評者の怠惰のせいだらうか。

大連日日は、近來相當活氣づいてきた。滿洲農村問題の文獻解說といつた風のものでいい仕事をしてゐる。しかしやはり市民のための新聞なのだから、さうした文獻の解說の方法についても、もつと筆者側と十分な連絡のもとでなされたい、「滿鐵調査月報」の附錄式な內容になる怖れがあらう。

哈日も北滿といふ地域的意識を編輯者側で用意して、相當の努力を拂つてゐるやうである。殊に萠芽ともいふべき、北滿在住の人々の、小說、隨筆等を折々連續的に特輯してゐる如きも將來のため貢獻するところが大きいであらう。しかし每日讀んでゐるわけではないので筆者は十分これに就いて書けない。

四、

さて一體藝文欄乃至文化欄はどういふ方向をとるべきであらうか。

自分は藝文欄は單に藝文家乃至その關心家のみを對象にしたものではいけないと思ふ。否決してさういふ人々のみを對象にして編輯してゐる譯ではないのだらうが、結果的にさうなり勝なのである。

國民生活の精神的伴侶として、或は心の糧となり、或ひは藝文方面への啓發的なものを含み、而して一國藝文の指導的使命をも果すべきだと考へる。

特にその編輯プランの作成に當つては、進んで藝文各分野の發展に即して、その間に胚胎せる重點、缺陷、外部からの影響、良き萠芽、國際的な動向といつた點にまで、細心の神經を拂つて、主流をして妙な脇道に入らせないといつた所にも注意し、廣くわが國藝文の進展を計るべきだらうと考へる。而してかゝる見地からしてみると、特に滿日、滿新の一紙に、無氣力、無方針、原稿の取捨に見識のないことが、例へば一ケ月取纏めたその關を通讀してみると痛切に感じられるのである。

（十六年九月）

職場と藝文

皆さんの働いてゐられる職場生活と藝文の結びつきについて主としてその精神的なものについてお話申したいと存じます。まづ藝文とは何でせうか。

藝文といふのは昔からある熟語でして、學問、藝術を含めて藝文と申してきたものであります。しかし今ここに申上ます藝文とは、一言でいへば、藝術文化を指すのでありましてこれは一昨年弘報處から、藝文指導要綱といふ滿洲國家としての藝術に對する方針を明らかにしました文書の中で、藝術文化を藝文といふと定められたのです。これまで文藝、音樂、美術、演藝、映畫、寫眞などを總稱して一般に文化と申してきたのであります。そしてこれらのものが、まだ滿洲に於て十分發達してゐないといふことを、滿洲の文化は貧困だなどといつてきたのであります。處が文化といふ熟語は、これを廣く解釋しますと、たださうした藝術だけを指すものではなく、政治、經濟、產業、交通、或ひは科學、道德宗教などをも含めた廣い意味をもつてゐるのでありまして、今日の滿洲の政治、產業、交通などの目ざましい發展からみましても、藝術關係のものだけが貧しいといふ事をいふのに、滿洲の文化は貧弱だと申したら大へんをかしな形になつてくるのであります。そこで弘報處では藝術に關する文化を藝文と定義して、判つきりと區別され、そして滿洲國に於ける藝文の精神なり、或ひはそれを立派に育ててゆくために方針を示されたのが、先程申上ました藝文指導要綱なのであります。

さて以上で藝文とは何かといふ事は大體解つていただけた事と存じます。次に職場ですが、申すまでもなく、職場とは仕事場であり作業場です。しかしこの職場は、贅澤品を作つたり、國家が今必要としないやうな仕事に携つてゐるやうな所は、ここでいふ職場にはなりません。職場とは大東亞戰爭に勝ちぬくために日本が、滿洲が必要とする物をつくる所、そこを指して職場と申します。

そこで職場と藝文とがやゝ判つきりしたことと思ひますが、それではこの二つが、どういふ結びつきがあつたか、この點から申しませう。

芝居に例をとりますと、昔芝居は、豐年のお祭りに、うぶすなの神樣、鎭守樣への感謝のために演じたといふところから始まり、お百姓が舞ひ、またお百姓と見て樂む、そこから生まれてきたものであります。恐らく皆さんもお神樂を御存じでせう。あれがそもそもの芝居の元の姿だつたのです。春祭は仕事始めの儀式であり、秋祭は取入れの感謝祭でありその時お神樂が演じられ、まづ鎭守樣に御覽にいれ、演ずる人、見る人とたのしむ、即ち芝居は働く人と共にあつたのです。

ところがそのお神樂が段々專門化し變化して芝居となり、つまり芝居をしてお金を貰ひ生活してゆく人々が出來てくるやうになり、今日のやうな劇場で演ぜられる芝居となつてきたのであります。芝居がさういふ生活のために演じられるやうになつてきますと、それをする人はいつでも演らなくては生活できません。そこで暇のある人、お金の餘つてゐる人たちが樂しんで見るやうになり、從つて演じる芝居の內容もさうした人たちに喜ばれるものとなつてゆき、即ち芝居を見ることも、その芝居の內容も、次第に働く人々、勤勞者から離れてゆきました。そしてそれは近世になるほど甚だしくなつてきたのであります。

日本の文學にしましても、神樣へのお祈りなどから出發しまして、例へば一番古い歌集萬葉集にしましても、上は天皇から、下は地方の民までが國々の方言を以て唱ひましたもので勤勞者と共にあつたものですが、時代の進みと共に、次第に言葉遣ひの面白さといつたものが尊重されるやうになり、文學も亦次第に働く人々の手から離れてゆき、一部の人達の遊び、樂しみとなつていつたのであります。

勿論、江戸時代におきましても俳句（當時は俳諧といつてましたが）に、小說に、短歌に、平民の文學がなかつたわけではなく、寧ろ壯んだつたのでありますが、殘念なことにはそれらの大部分は、少しも働く人々の、嘘りのない氣持、感情といつた面に目をそそが

うとせず、生活から離れた俳諧の世界、和歌の世界、小説の世界を通して人生を遊戯的に見、一種の遊びとしかこれを扱はなかつたのであります。これは一つには當時働くことをムシロ卑しい身分の低いもののすることと見下してゐたといふ點とも關係してのことでした。

しかし明治になりますと、文學を働く人々の手に取戻さうとした先覺者も出てきてをります。例へば明治三十三年に、正岡子規の短歌のお弟子で伊藤左千夫といふ牛乳屋さんをやつてゐた人は、

牛飼ひが歌よむときに世の中の新しき歌大いにおこる

といつた歌をつくつてゐる事からも推察されるのであります。しかし一般的には、文學も、演劇も、繪も、音樂も、働く人々とは緣遠いところで伸びてゆき、深い結びつきを持つてゐなかつたといふのが最近までの現狀でした。

從つて、勤勞者が芝居を見る、或はする、また小説を書く、俳句、歌を作るといへば一種の遊び道樂のやうに見、それらが勤勉に働かうとする人々には、必要のない、むしろ有害な邪魔なものといつた見方が生まれてきてゐたわけであります。

しかしこれは今日では間違つた考へであり、先程簡單に申しましたやうに、本來藝文は働く人々のものだつたのが、今までの芝居なり、文學なりが、誤つた道に深入りしすぎてゐたのです。美術、繪にしてもさうです、今日までは繪描きに描かれた繪は應接間に飾られるやうな物ばかりでして繪にした材料自身が、少しも働く人々の生活に關係のない風景、裸體畫、靜物、肖像畫といつたものが大部分であり、職場に働く人から美しさを發見し、また機械の美を描いたといつたものは少く、從つて美術も職場の人々に緣のないものが多かつたのであります。從つて繪を描く者、文學をする者、芝居をやる者といへば、どうしても勤勉な勤勞生活に緣のない別世界の異端者扱ひをされた傾向のあつたこともまた止むを得なかつたのであります。これを藝術家にいはせると、勤勞者に理解されない、勤勞者に藝術が解らないといつた風に見たりしたのですが、彼ら自身、勤勞者に理解されるやうな內容をもたず、自らが狹い道に入りすぎてゐたことに反省がなかつたのです。

だからどうです、皆さんの中で、例へば工場なら、工場の雰圍氣、そこで働く人々の氣持をよく現はして書いた小説を讀んだ人がありませうか。凡らく滿足できるやうなものはなかつたと思ひます。これは文學が人間として一番尊い勤勞生活に目を開くことがおそか

つた證據です。

ところが文學の中でも短い形式のもの、歌などでは先程申した「牛飼ひ」の歌の流れをくんだ松倉米吉といふ人は町工場で働いてゐた人ですが、例へば、

機械場の機械も止みて夜は深し明り取より月流れたり

工場に仕事とぼしも我が打つ小鎚の音はひびきわたりぬ

胡坐して鑢する我に朝日さし我尊くて働く今は

といつた歌を作つてゐます。この人は大正八年に二十五才で死んだ人で、やはりそのせいか暗い感じの歌が多いやうですが、とも角その時代に職場からこれだけの歌を歌ひ出してゐるのです。

さてそれでは職場生活に藝文がどういふ役目を果たすでせうか。

第一に働いた後の疲れた心の養ひとなり、感情を豐かにし、生活に希望をもたせ、明日の活動に備へる力づけを與へてくれます。—それでは將棋や映畫見物と違はないぢやないかといふ聲が出ます。しかし映畫にしても藝術性のある映畫はただ面白いといふばかりでなく心を淨くし、希望を與へるものをもつてゐる筈です。

又藝術と申しますと何か特別の學校教育でも受けない事には解らないものだといつた考へを持つた人もありますが、これは誤りです。今日の勤勞は、米英の技術以上に、一層優れた技術が必要となつてきてゐます。さうした技術を發明しそれを理解する頭は一つには正しい藝文が解ることによつて間接に養はれもするのです。頭の柔軟性が養はれる、よくいはれる教養といふものが培はれるのです。

今日では勤勞者の生活から離れてゐた文學も繪も音樂も芝居も本來の姿に還つて、職場に働く人々としつかり結びつかうとソレゾレの立場から努力を重ねてゐるのであります。

次に藝文は、これを與へる側と、受ける側、觀賞する側とあります、文學をつくる、讀む、音樂を演奏する歌ふ、これを聽く、繪を描くこれを見る、芝居をする、これを見物する立場、といつた風です。

優れたものを讀み、聽き、見る事は皆さんの心を和め、高め、豐かにします。

それと同時に、自ら作り、書き、演ずることも奬勵されてよい譯です。職場の同志で俳句會、短歌會を作り、才能ある人は小說を書く、或ひはその方面の先輩の話をきく、座談で指導して貰ふ。音樂も自ら歌ひ、演奏する。又經營者の好意でブラスバンドをつくる。

職場の行事に、職場生活から生まれた芝居をして仲間と樂しむ。

職場の藝文は、外部に見せるといふよりは、どこまでも職場を中心に、その中で充實したものとなるのが本筋です。さもないと勤勞をなほざりにし、一部の人の半ば專門化した勤勞者の藝文としての枠からハミ出した、折角職場を中心にして作つた意味がなくなつたものとなつてしまふ怖れが出てきます。

中には、藝文どころか仕事に逐はれて暇がないといふ人も多いでせう。勿論一概にさう言つてしまつて何も求ようとしない所からは、何も生まれてはきません。機械に使はれ、追ひまくられることから脱け出せないでせう。休日にしても仕事を休む日だといふ考へから、藝文に心を豐かにし高め敎養をつける日だといふ積極的な考へ、生活に何とか潤ひをつけようと意志する所から始めて勤勞者の藝文は生まれてくるのです。

職場の芝居は、自分の藝の自慢や道樂ではすまない。自ら考へ作ることを尊ぶ、勿論上の人の指導も仰ぐ。登場人物の動き、感情、惱みにつれ共に喜び、哀しみ、考へる、人生のむづかしさ、樂しさに、舞台の人と同じ感動を味ふ。そこに人生に對する眼が開け、心を豐かにし、この大戰爭を勝ちぬく力を養ふ。やる人は仲間、見る人も仲間、その氣持が一つに融けて、職場の協力一致の精神が高められるのであります。だから一番大切なことは、産業報國の精神が力强く脈うつてゐなくてはならないといふことです。芝居に例をとりましたが、職場の藝文はすべて産業報國の精神から出發しなくては健全な發展は望めませんすでに開拓地の青少年からも文學の芽は生まれてきました。建設の勞苦にひき緊つた心は、自然に文字となり、文學となります。文學が人を惰弱にするとか、たゞ泣き事を並べるとか言ふのは、且つての文學しか知らない人の考へで、今日では勤勞者と共になくてはならないものです。

先日北滿のある義勇隊開拓團を訪ねました。そこは驛から馬車で二時間近くかゝる田舍でしたが、その團員達が、驛のある町の日本人たちに、クラブで芝居をして慰問したさうです。脚本を作つたのは團長さんで、町の人に開拓團の使命を知らせる意味ももつた芝居でした。團員の人達は　舞台も衣裳も一切手作りです。開拓團が慰問を受けたのでなく慰問をしたのです。この意氣はまことに尊いものです。若い團員の人たちは詩も俳句も壯んに作つてゐました團長さんは二萬冊位の村の庫も計畫してゐるといつてました。そしてかういふ開拓團は百姓を怠けるどころか、協力一致美事な成績を上げてゐるのです。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31 lines

ある本にかう書いてありました。

「極度に農事に優れた人、世にいふ篤農家または農村の優れたる指導者といはれる程の人は、いふまでもなく人間的に傑出した偉人であり、その心は豊かに大きく、また深くたたへ、その志は激しく、厳しく、また正しく、而も農民としての職域に於て最も深く人生を生き抜いた人たちであるが、かういふ人々に共通した一つの性格或は風格として、詩歌のうたひ手としても又優れていたといふ事實が挙げられる」キンロウ藝文ニ思ヒヲイタスモノノ味ふべき言葉だと思ひます。

満洲では藝文聯盟を中心に藝文各協會が設けられてゐます。職場の皆さんが望まれるなら、必ず良き相談相手となつてくれるに違ひありません。

（十八年四月）

戰爭と文化

戰爭が破壞と建設とをともなふことは自明の理である。それは單に物質的なものの破壞建設を意味するばかりでなく、敵國の精神文化との面に於ても、これと戰ひ打倒せずんば止まざるものである。政治思想、經濟思想、倫理思想の各分野が闘ふ戰爭は、所謂思想戰といはれるものであり、こゝにとりあげんとする藝術文化もまた思想戰の一翼を擔ふものであるが、政治、經濟、倫理思想が主として理性に訴へるものであるのに對して、藝術文化は感情に訴へるものであるところにその特性を示してゐる。

大東亞戰爭が勃發して間もなく私たちは探偵小說、股旅もの小說を店頭に並べた書店の入口に「米英文化を打倒せよ」云々の看板をみかけたものであるが、文化戰線に於ては、股旅もの小說を堆高く積んで、敵文化の打倒を叫んでもこれは困るのである。旗印は實質と相俟つてはじめて、敵の撃滅を促進し得るものだといふことは、言ふまでもないところだ。しかしながら私はさういふ旗印の意義を輕んじようとするのではない。旗印の必要を痛感するが故に一層その内容的充實の圖られることを願ふのである。

前述したやうに政治、經濟、倫理思想と藝術文化との大きい違ひは、前者が理性的であるのに對し、後者がより感情的であるところだ。人間には、理性では判斷し得ても、感情的についてゆけないといふ、一種贅澤みたいな特性がある。そこでこの感情に訴へるとい

ふ藝術文化の特質が、敵味方相互にとつて戰時に於て藝術文化を蔑ろにしておくことのできない一因も生じてくるわけである。

今日私たちの一切を擧げ米英撃滅に向つて集中されるべきとき、藝術文化が動員されることは、極めて大きな意義を持つてくる。なぜならばどうしても米英を打倒しなければならぬといふことは日本人である限り解つてゐるが、感情的な米英に對する「憎しみ」に不十分なものがあるやうに見受けられる場合がある。これに對處して、感情に訴へる特性をもつ藝術文化が最大限に採り上げらるべきであるからである。そしてそれは單に敵への憎惡ばかりでなく、國民の聖戰貫徹といふ意識の昂揚において、試煉の突破において、生産力增强といふ要請において、士氣の鼓舞において役立てられまた果すべき使命が存する。

米英製作曲の排撃から、米英レコードの積極的締出しが唱へられてゐるのに、家庭よりの供出が思はしくないともきいてゐる。敵性音樂の締出しはなされなくてはならない。それが活潑でないといふことは、まさか戸に鍵をかけてそれを聽かうとする者がゐるわけではなく、米國式な仰々しさでさういふものを持ち出すことをしたがらない日本人的な内氣さで戸毎に叩き割つてゐるか、或ひは一種の臆劫さから俄に取り出してもみないといつたこともあり得るだらう。しかし私たちがもつと怖れなくてはならないのは、觀念的な米英作曲レコードのみに米英的なものがあるのではなく、過去の日本人、今日も尙尾を引いてゐる日本人の中に沁みのこつてゐる米英風な日本人の作曲である。私はそれを例へば喫茶店のレコードから何枚でも拾ひ出すことが出來るだらう。といふことは、米英的レコードの排撃はマークやレッテルで決められるものではなく、私たちの耳がまづ日本の心に淨められなくてはならないといふところから出發してあるべきだと考へる。

そしてそれは映畫に就いても同斷である。殊に映畫においては製作會社の米國式資本機構に思ひきつた改革が加へられなくては、清純な日本的性格をもつた映畫は中々生れにくいであらう。今日の事態に在つて豫想し得ない作品がなほ製作され上映されてゐる事實と思合せたならば瞭然である。

藝術文化の國民精神の統一に果たす役割といふ風に說いてくると、いかにも藝術文化を功利的にのみ見たやうに思はれるが、私は藝術文化の藝術性といふものを決して否定してゐるものではない。

よく永遠性といふことがいはれるが、それのみを抽出し孤立して存在し得るものではな

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

い。

それぞれの時代環境にあつて最も勇敢に現實の上に立脚して自ら赴くべき方向にむかつて最も生きた活動を示したものが永遠性を體したものではないだらうか。ここに於て私たちは、私たちに遺された不朽の作品といはれる文學作品について省みたら一層明かとなるであらう。

けふは初めての防空日で、ラジオは一日中よく防空に關するものを放送した。夜は防空日にちなんだ寸劇があつた。これは防空日を認識さすことには役立つたかもしれないが藝術性は稀薄だつた。

だからすぐ忘れられる。もしこれが藝術的にも優れてゐたら、最初の防空日の日の記憶と共に、聽者の印象に强烈に遺つた感銘のふかいものとなり得たであらう。

そのやうに即效的な役立ちはしなくとも、さうしたものが表面上とりあげられてゐなくとも、國民の精神的な糧となり、明日の勤勞への勵みとなるやうなものもまた今日の藝術文化に課せられた使命であらう。いなむしろ即效的な效果を狙はない、自ら成つた滋味ある作品の中に、精神的な力づけとなる作品が現はれる場合が多いやうである。同時にまたさういふ作品が陷りやすい獨善的な偏狹さも發生する。

私たちの文化は、今日ではもはや私たちだけの文化であるばかりでなく、大東亞を背景とした擴がりをもたなくてはならなくなつた。それは廣域圏を意味すると同時に高度と、深度を要求されるのである。（もはやこれに就いて論じる紙面が盡きたが―）

私たちがいま書店の店頭に立つたとき、おびたゞしい傳記小說の類に驚かされるであらう。二千六百年の歷史から、色んな人が眠りから醒まされ書かれてゐる。中には呼び醒まされ方の不手際に苦い顏の被傳記者もあるのではないかと考へる。私たちが直面するこの大戰を完勝するには、私たちのもつたこの多くの偉人に學ぶことは大切であるにはちがひない。しかもその傳記され方についてはすべてを信用するわけにはいかないのである。―そしてそれは戰時の藝術文化のいろんな面にみられる現象である。

（十八年六月）

農村への宣傳

先日、蒙字新聞青旗報として、發展的解消を遂げた蒙古會館のN氏と少し雜談をする機

會をもつた。

同じ宣傳的な仕事に從つてゐるので、自然話はさうした方面のことに流れた。N氏は言ふ、蒙古人の宣傳についても、日本人が通譯つきで喋べるよりは、蒙古人の指導者的人物が養成されて、その者を通して蒙古人に對する宣傳がされたら一番いゝのであるが、まだそこまでいつてゐないといふ。

このことは同時に對滿洲人宣傳に對しても云はれる。しかしこの場合は、多少は滿人中にも指導者といはれる人物が出てきつつあるが、彼らがさういふ宣傳といふ仕事を離れて個人生活に戻つた場合どの程度まで指導者としてもつてゐなければならない人格をもつてゐるか、また世界觀を把持してゐるか、疑問である。

過日チチハルで滿系の指導者を十人ほど集めて座談會をやつた。開會に當つては、この席上で喋べつたことは、誰がどういふことを言つたといふやうに記錄に殘さず、ここでどういふことを喋べつたから、後でそれがどう問題になることもないと、繰返し申添へたのである。しかしそれでも僕らが決して彼らが腹を割つて喋べるとは確信されなかつた。ある程度の效果を期待するばかりだつた。

そのときの話で、一體滿人への宣傳は、日系の者が中心になつて當つた方がいいか、滿系の者が中心になつて當つた方がいゝかといふ問題になつた處、直ぐ口を開いた一人は、それは日系の人の方が信用があるし、日系の人が當つた方がいいと言つた。さうかなアといつて言葉をきると、もう一人が、滿人は常に動かされる受身の立場にある。だから我々が行つて宣傳した處で、結局背後には日本人がゐて指導してゐると思ふのだから、寧ろ日本人が行つた方がいゝ、と言つた。いや自分はさうは思はない。外國人から何か言はれるよりは、自分と同じ民族の者からきいたことの方が信用する氣になれるし、第一お互ひによく諒解し、納得のゆくところまで話合へるではないか、と言ふと、皆は、それはさうだと初めて頷いてみせるのだつた。

初めのN氏の話によると、蒙古人百萬について蒙古語の讀める者は、十萬にすぎないさうである。そこで蒙古人に對する文字宣傳によることの限界性といふものが考へられてくる。

このことは農村に於ける滿人の場合も同じである。農村の識字者は今日どの位のパーセンテイジにあるか、判つきり覺へてゐないが三十パーセント位ではないかと考へる。だか

ら蒙古人の場合よりは少し率がいゝわけである。同じ蒙古人でも、熱河に近い地方の蒙古人は早くから支那人と接觸してゐるので、蒙古文よりは漢字の讀めるものが多く、性質も興安北南省邊りからみると、悪擦れしてゐる者が多いといふことは誰にも考へられやう。

文字の宣傳は、どんなものが農村に受け入れられるかといふと、金のかゝる割合に一番効果の薄いのが、所謂美麗なポスターである。五色も六色も使つて上質の紙に刷つてあるが、從つて枚數が制限されてくる。農村に滲透する筈がない。

むしろ、お正月の春聯を利用する。この美辭美文中に、宣傳文字を巧みに挿入する。またお正月に祭る、カマドの神様の繪を書いた一枚刷、これの下方に文字を挿入する。カレンダーの利用なども考へられるが、農村生活には暦日はない、從つて所謂カレンダー式のものではなく、農村生活に結びついた一年間の農事知識を挿入し、また民間信仰なども忘れず、その間に宣傳を忘れず行ふ。即ち彼らの生活の實用となり、喜んで欲求するものの中に宣傳を持ち込む。

一つの知識を宣傳するためには、パンフレットなどを作るよりは、繪解きの一枚繪がいい。觀念的な文字を弄するよりは、即物的に彼らに及ぼす利害を説くべきである。その繪も彼らは決して極彩色のものには慣れてゐない。よく街頭で貸本してゐる繪本をみると、木版乃至凸版の黑インク一色のものである。それを一頁一頁ゆつくり繰つては、上欄の文字を味ひつつ、看る。字の讀めないものは、繪があるから、自然魅惹つけられて、横から顔を覗かせて、本をもつてゐるものに訊く。そこで字の讀めるものは、少し得意になつて讀んできかせる。即ち文章による宣傳に挿繪を挿入することは、文盲の者にも宣傳目的を理解させることに役立つのである。

文章宣傳による場合は、彼らに悅んで受け入れられ、何らかの意味で彼らの生活を豐富にし、しかしてこちらの宣傳目的を達するといふ方法が、最も賢明である。

次に口傳による宣傳では、先にも書いたやうに異人種が行ふよりは同人種が行つた方がいゝ。それも農村の外來者がやつてきて喋べるよりは、農村の中に宣傳委員を獲得して、その者に喋べらせる方がいゝ。宣傳委員の資格としては、村の下層民ではいけない。中層以上の人格者を選ぶことである。ところでそれは村長が一番いゝではないかといふ意見も出てくるが、地方によつてはその村の有力な富農たちが、自分たちが村長をやることの煩を避けて、これを二流の人物に押しつけ若干の金をにぎらせて納得させて村長をやらせて

ゐるところもある。さういふところでは、外部からの宣傳に關する限り、村長の威令は行はれない。

外蒙邊りでは、單に文章、口傳の宣傳のみならず、實證的宣傳を大いに行つてゐるさうである。例へば、喇嘛教の排擊といふことについては、喇嘛僧が十人の病人の中、五人までを施術によつて癒し得たと稱するに對して、近代醫術の力を以て、十人の病人の中、十人近くまでを快癒させて、以て喇嘛僧徒に對する信頼、喇嘛教に對する信仰を、現代文明の威力の前に歸依させるといつた方法である。

特に遲れた民族に對しては、かゝる實證的宣傳へ重點を指向することが望ましいのであるが、これを例へば滿洲に就いてみるのに、その貧困を嘆かないわけにはいかない。

先日熱河省を出て古北口まで行つてみたが、丁度承德にあつた全熱河省の農產品品評會を見ても、その物產の貧しさは、何か恐ろしいものさへ感じさせたほどである。周知の通り熱河は、罌粟の栽培によつて知られた處であるが、それがいま禁壯され、比較的農產に適した耕地は、承德、古北口間の鐵道敷設によつて買上げられてしまつた。元來民食の不足してゐた地方ゆへ、今日の窮乏は推察に難くないのである。毎年五月ごろには、全く食べるものは食べつくし、借りられるものは借りてしまひ、木の葉をグタ〳〵に煮つけて食べてゐるのを目擊したと語つてゐた人があつた。

この山岳地帶へ、第八路軍の先鋒が入つてきたのである。彼らは侵入に先立ち、豫め政治工作員を潛入せしめ、まづ村民への、口傳文書宣傳を行つた後、窮乏せるものには、現金もしくは物資を與へるのであるから、その民心を把握することは必定なのである。

滿洲國の宣傳が、一年かゝつてなし遂げる程度の工作を、僅か一兩日中に彼らは得てしまふのである。

こゝに宣撫の必要性といふものが浮び上つて來る。そしてまた宣傳並びに宣撫を相共に行ふといふ觀念から、村民の地域的貧富性の考察によつて、宣傳重點地點と、宣撫重點地點との判別の必要といふことが生じてくる。

宣傳とは、宣傳工作自體が直接對象を均霑しないが、宣撫工作とは、まづ對象を何らかの手段によつて均霑せしめ、以て對象を順應せしめて宣傳を施し得る素地を形成することである。

宣撫には、物品の惠與、物品の貸與、施設施療施藥、散髮、その他農村に恩惠を與へる

種々なる方法があらう。僕が承德できいたのでも、鑛山、會社現場その他の職業の轉旋を行ひ、大いに村の人望を集めたといふ話もきいた。

民食も缺乏してゐるやうな處では、いかに宣傳工作を行つても決して民心を把握することは出來ない。食へないといふ苛烈酷薄な現實の前には、いかなる國家宣傳も空念佛に等しいものである。そこでまづ何らか彼らを潤して以て、宣傳に耳を傾け得るところの物心双方からの餘裕を生ぜしめる必要性が起つてくる。その方法が即ち宣撫である。

しかしこの宣撫も限界があつて食へなければ米をやる、何をやるでは、徒らに彼らに依存心を發生せしめていけない。彼らが自立し得る方策の研究、施策が必要となつてくるがこれはもはや宣撫の領域には屬しない。政治問題である。

この宣撫も比較的富裕な農村には必要がない。そこにこそ宣傳を中心に指向すべきである。むしろさうした地方では、衛生思想の普及を始め、生活改善運動に全力をつくした方が效果的であらう。また村の運動會を開催して、その機會を通して宣傳を行ふとか、村の富裕性に應じて種々宣傳方法は湧出してくるのである。

（十六年一月）

宣傳と知識人

宣傳といふものが一般に理解されてゐる、そのされ方をみると、例へば手近かにある、小林秀雄の「文學」といふ評論集にある、「宣傳について」といふ一文の中から拾つてみると次のやうである。

「自己宣傳に汲々たる小人から、輿論なぞ宣傳の力でどうにでもなると、大宣傳の效果に脂下つてゐる政治家に至るまで、凡そ宣傳を事とするものは例外なく不安なのである。たゞ宣傳の面白さだとか忙しさだとかゞこの不安を糊塗してゐてくれるに過ぎない」

「宣傳は決して歴史の動きを創り出す力はないもので例へばフランスの一流思想家達が將來のフランス革命といふ事件を用意した樣な意味では、宣傳家は決して將來の事件を用意するものではない。宣傳家は事件が起つてみなければ商賣は始まらないのである。利か

なかつた宣傳とは、實際の世の中の動きが默殺したものであり、利いた宣傳とは、實際の世の中の動きに追從したものである。」

「宣傳は民衆が考へて居ない事を、どんな宣傳技術を凝らした處が、民衆に考へる樣にさせる力はないが、民衆が既に考へてゐる事を拔發する力はある。だから民衆の現に考へてゐる事がどんなに幼稚なものであつても現に彼等が考へてゐるところのものを掴んだなら、どんな尤もらしい理窟による宣傳も大きな效果があるといふわけになる。この事實が宣傳屋を自惚れさせるのである。併し宣傳のもつこの性格を、宣傳が利いたと脂下る者の側からではなく、宣傳に乘ぜられた民衆の側から考へてみよ」

「宣傳家は、民衆はつまらぬ宣傳にうかゝ乘るものだと言ふだらう。だが民衆は、なあに乘つてやつたのさと答へるだらう、何故なら、どんなうまい宣傳にも自分の實生活と結びつかぬ空言には民衆は決して乘らぬとしたら、乘つてやつたと答へても少しも可笑しな返答ではないではないか。さう考へれば、ちよつとした宣傳にも引つかゝる民衆の輕薄さとは、取りも直さず、實生活に緊密な利害によつて乘るべき宣傳と默殺すべき宣傳とを嗅ぎ分ける民衆の甚だ鋭敏な鼻の存在を語るものだ。そしてお役人根性などゝいふものは、凡そこの鼻とは關係のないものである」

こゝで、僕は僕に與へられた課題を明かにしておかなければならない。「宣傳に於ける知識人の役割」

所謂、宣傳といふものに對して、これを最も白眼視し宣傳さるゝ內容に對して、宣傳者に對して、宣傳を强いる權力に對して、懷疑的であり、批判的であり、もしくは無關心を裝つたのが、所謂、知識人であつたと云つても、云へないことはあるまい。

しかしながら、この常識的な見解は、果して知識人の光榮に價するものであるか、果して一定不動のものであり得るか、再考察される必要があらう。そしてそれには現在日本及び滿洲國が直面してゐる國際的諸狀勢からいつても、正にその好機なのである。

宣傳が、知識人と結びつくには、宣傳自體が變革されなければならないし、知識人自體も一段と飛躍、生長しなければならない。

宣傳が浮游的な、その場その場の思ひつきによるものに依つて、宣傳され、確たる指導精神をもたない限り、知識人とは無緣に終るだらう。

また宣傳に、指導精神があつたとしてもそれが時勢に逆行するものであつたり、進步性

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled × 31 lines

のない實行力の伴はないものであつたら、知識人は參與しない。

要するに宣傳は、進歩的な指導精神をもつた、同時に力强い實行力を具備したものでなければならない。

宣傳は單に大衆を踊らして以て足れりとするものではなく、彼らに唯一の指針を與へ、その指針のもとに、覺醒と共感を感じさせるものでなくては、眞の宣傳とはいへない。

世に「宣傳技術論」（小山榮三著、昭和十二年刊、高陽書院發行）なる本が在る。その他幾多の、宣傳、廣告の技術に關する本が發行されてゐる。或ひは理論的に說いたもの、或ひは心理分析學の立場から說いたもの、經驗の上から說かれたもの、樣々である。

しかし乍ら、根本的なものは工作方法にあるのでも、技術にあるのでもない。在るのは、いかなるものが宣傳されるかといふ、宣傳されるものゝ實體の上にかゝつてある。

德川時代までは、武家であり、學者であり、町人の上層部の一部にあつた知識人は、それ〴〵の屬する身分や階級が、同時に思想的なものまで決定した。

明治以降今日に至る知識人は、或ひは官公吏であつたり、教師であつたり、會社銀行員、失業者であつた。彼らは要するに勤勞所得者であつて、所謂サラリイ・マンといふ言葉によつて代表されてゐるものに、その大部分が所屬してゐた。彼らは肉體や頭腦を時間の切賣りはしたが、一度それから解かれたら、自由人であつた。彼らは學校で、主として西歐的な學問を身につけ、例へば、嘗て社會主義的な思想は、彼らを幻惑した。それを公式的に身につけ一應知性の滿足を得てゐた。しかし乍らそれは、彼らを全面的には動かさなかつた、日本の現實は、必ずしもその線に添ふて發展しはしなかつたのである。

彼らは、徒らに苦惱し、消極的になり、果ては懷疑の泥濘におち込んでいつた、その底には、たゞ不安が色濃く流れてゐたのである。彼らのうちには、信念となるべき基礎がない。日本の內外に動き行くものに對して徒らに、傍觀し、傍觀しながら、焦慮を感ずるのみだつた。彼等のもつた教養とは要するに竇の持ち腐れといふ狀態だつたのである。

滿洲事變が突發しても、彼等知識人の大半は、未だその眠りを醒まさず、冷淡であり、一種白眼視してこれを傍觀してゐたに過ぎない。今にして思へば、滿洲建國に參畫し、進んでその建設の第一步に飛び込んだ知識人は、今日知識人全體に、革命的なものを捲き起したその先覺者とも云はれるべき人々であつた。

その頃より滿洲では、新京を中心にして、徐々に知識人の再出發が、新國家建設といふ

大課題のもとに、新しい自覺にせまられていつた。彼らが積極的に參加して行つたのは、滿洲事變が斷じて帝國主義的侵略ではなく、民族協和、共存共榮といふ理想が彼らの一種のヒューマニズムに共感を誘つたからであり、彼等がその支配下に生長しながら、常に懐疑と不滿を抱いてゐた資本主義の排擊乃至是正といふ問題などが、眞劍に取上げられて問題となつたからであらう。そしてそれは、

「インテリは思想よりも更に現實的な焦眉、現前の政治に對する革新的進入の勇氣を持たねばならない、滿洲で新京イデオロギーと稱してゐるところのものはその萠芽であり、彼等は先刻出發してゐる。幼稚に混雜に失敗多く、然も勇敢にその政治的成長を遂げんとしてゐる姿をわれ〳〵は笑つてはならない。此處に新しい突擊路が試みられやうとしてゐることを。」（吉野治夫）

といふ風にも觀られてゐる。

この意味から、日本内地知識人は、滿洲事變では大部分が未だ眼を醒まさなかつたやうである。彼等は大陸の一角に、營々として力强い躍進を遂げてゆく滿洲國といふものを遠くの方から、一抹の危惧の念を抱いて靜觀してゐたにすぎない。

今次支那事變が勃發しても、その當初に於いては、彼等は靜觀の域を遙かに脱しなかつた。しかしながら事變の進捗に連れて、次第にその全貌が明瞭になると共に、漸く積極的な姿勞へと轉じてきたのであつた。

一國一民族としての運命が、直ちに一個人の運命に響いてくるといつた、日本が有史以來持つた大試練の一つに直面しては、知識人の白眼視とか、狐疑逡巡とかは吹きとばされたのである。そして先づ危惧の念が高まつてきた。戰況はどうであらうか、日本の經濟力はどうであらうか。戰後は一體どういふ風に收拾されるのであらうか。第三國は容喙してきはしないだらうか。

彼等の一部分は、さういふ危惧の念にとざされてゐるとき、事變は日本の連戰連勝するところとなり、支那に於ける決定的な主要領土は、速かに皇軍の占領するところとなり、蔣介石を主班とする國民政府は、正に地方軍閥政權に顚落し、背後に躍つてゐた共產黨が、漸次その假面を剥いで、抗日主力として登場してきた。

一方日本の大陸政策は、東亞共榮圈思想として出現し、それは從來歐米諸外國がとつた植民地化する方式を排除し、日、滿、支國家の共存共榮を基調として、その必然性が說かれ

るに到つた。而かもそれは、未だ理論的には意見の一致をみてはゐないが、理論的成熟を胎動しつゝ支那に於ける占據地域に於いては、その實踐に移行しつつある。また國内的新秩序としては國民再組織の問題が幾多の障害を乗り超えて尚實現されなければならない處にきてをり、内外の狀勢はその必然性を示唆してゐる。即ち今日の社會經濟關係を、個人的利害を基調として律しようとする資本主義的體制が、もはや絶對に成り立たぬ時代が到來してゐることを示し、革新的政治、經濟機構の樹立といふ課題に直面してゐるのである。

滿洲に於いて指導民族としてあつた日本人は、今後では更に、東亞に於ける指導民族として在らねばならないことが豫見されるのである。しかしそれは從來ある日本人そのまゝで果してよいのであらうか、決してさうであつてはならないのだ。支那に在る良きものは咀嚼し得、それを一層發展させる抱擁性と、更に敎へ、與へ得るものを有するところの、文化的にも、民族的にもより高度に飛躍した優秀民族であることが、今日以後要求さるる日本人なのである。そしてその中樞になるものが、即ち知識人であらねばならない。若しそれを拒む知識人が在つたとしたら、それは最早、今日の知識人とは、稱し難い一個の脫落せる舊知識保有者に過ぎない。

過去の知識人にとつては、宣傳といつたものは凡そ緣なきもので、寧ろそれに對して背中合せにあつた。

而しながら今日、東亞に於ける指導民族としての日本人、その中核的存在である革新されたる知識人にとつては、宣傳といふものも、直接政治に携はるものと、否とに拘らず改めて認識される必要がある。

今こゝでは宣傳に對する知識人を、廣く一般知識人の立場に置き、暫く直接政治に參與する官公吏たる知識人の、公けの立場の場合を離れて考へてみたいと思ふ。それは、直接政治行政に携はる公務としての宣傳の理解と工作と、一般知識人の立場からの宣傳に對する解釋は、同一に視ることは困難でもあるし、同一と斷定するのも正しくないと考へられるからである。

即ち、國家の思想統制が强行され、政治、經濟、文化體系の、革新が實踐されて、一方に於ては知識人自身の内的な革新が遂行され、思考の極端なる自由さが抑制されたとしても、知識人の有する知性の尊重と、知性それ自體の國家の動向に添うた發剌たる顯現が

なくては、知識人とは稱し得られない。さういふことを考へてくると、行政の立場からの宣傳と、知識人が認識しなければならない宣傳とは、同一であつても、その工作に於いては必ずしも同一では有り得ない。

知識人は、ときには宣傳される側に置かれるときもあらう。同時にまた彼等は、宣傳される內容に對する、積極的な企畫者として、その好意的批判者として、その助言者として、即ち政策自體に直接間接の差はあれ參與するものとして登場することであらう。而して、その批判がその宣傳される內容に對する自己の積極的な主張が、またそれへの共鳴者としての發言が、その解說が、大きくは、宣傳に於ける知識人の役割とも見られるのである。

知識人の宣傳に於ける理想的な場合を具體的にいへば常に國家の內外の情勢に注目して、政治、經濟、文化の問題に關心し、宣傳といふ型態をとる以前に、その宣傳さるべき內容に對して、確固たる意見と主張を開陳し、一度宣傳過程に移るや、積極的にそれに贊意を表すると共に、口を通し、文筆を通じて、これを廣くその性質に應じて內外に認識せしむべきである。

しかしこれは未だ理想論の域を脫しない。なぜなれば知識人の過半は、未だ時局に對する正常なる認識に缺けてゐるやに見られる、だがこの知識人の時局認識の緩漫なる步調は、餘り多くは責められない。知性に照らしてゆく彼等の眞實の步みは、のろくさくとも眞劍であり確實な一步一步である。これを宣傳する側の問題としてみれば、或ひは知識人に對する世界政局正解の宣傳が、十分でなかつたとも見られないこともない。

知識人の宣傳に於ける政治、經濟上の役割は、更に文化面に於いて一層强力に遂行されなければならない。即ち文學、美術、演劇の諸分野に於いてゞある。

文學に於いては、例へば每年民生部主催になる建國記念文藝に對しても、滿洲に於いて積極的に活躍してゐる大部分の文藝人は、これを白眼視し、積極的な參加をしなかつたのが現狀であつた。

しかし乍ら、建國文藝募集の主旨たる、民族協和、樂土建設、道義國家の大理想は、著々健實な軌道の上に步み出してゐるのである。困難なる異民族との協調融和といふ問題が、文學上の作品として描かれなければならないのである。現實の手嚴しい眼を通した、リアルな作品として、民族協和の實が描かれることが、今日の滿洲文學の一つの課題であ

る。

それと共に、滿洲に於ける凡ゆる建設的な部門が、大量的に、而かもリアルに、建設的に、力强く描かれなければならない。

昨年來、日本文學人のおびたゞしい來滿を見、主として開拓、開拓村の問題が、見られてゆきまた幾多の現地報告として書かれた。それは、招聘者側の希望であり、またヂャーナリズムの取上げる要望であり、日本農村に於ける重大なる關心事であつたからであらう。だが滿洲國自體にとつて取上げられなければならない建設面の文學的素材は、決して開拓村の問題だけではないのだ。産業開發五ケ年計畫に添ふための、農産物增殖、日、滿、支三國の産業交流、滿洲國への役割とされた耕種栽培品目の轉向を課題とする、各縣農事技士の寢食を忘れた決死的活動、舊張政權時代、軍閥資本と結びついて、不當搾取をつゞけてきた糧棧、その支配下に在つて極端なる貧困化に陷入つた勤勞農民層の生活向上を目的とする、同時に農産物增殖といふ結果を導き出す、農事合作社運動、その他多くの建設的分野が、潑溂と活潑に文學作品の素材として取上げられなければならない。しかも知識人の文學は、飽くまでもリアルな眼を通して、作品として骨肉化されなくてはならないのである。

また同時に長期戰に對する認識、その覺悟、東亞共榮圈に對する認識、その實踐が、文學の中に融け込んで、身についたものとして作品となつて現はれるべきだ。

今日の時局認識に缺けた、浮動した言行や、銃後にあるまじきまた斷じて許されない私慾をもとゝした非國民的行爲や、社會の頽廢、腐敗、醜惡面が、曝露され掖抉されなければならない。

その他國民精神を昂揚する、國民歌謠への積極的な協力、凡ゆる建設的な標語募集に對する參加、放送さるゝラヂオ・ドラマ、ラヂオ小說、ラヂオ風景、歌謠音曲に對する自發的なその製作などが一層活潑に行はれるべきである。

美術に於ては、特にその繪畫の分野に於いて、有力なる自主的な協力が期待される。例へばポスター製作に於いて、もしくは漫畫の考案に於いて。

滿洲鄉土色研究會を母體とする、パンプタオ集團の傾向に就いてみるに繪畫に於ける滿洲的なものを追求した彼等は、過去に於いては、やゝもすれば、その滿洲的な取材を、平康里、阿片窟といつた、社會の否定さるべき暗黑面から、例へば淫賣婦、阿片を吸つてゐ

る圖、賭博をする一團といつたものから、得てして素材を求めがちであつた。それらは僕の最も不滿とするところであつたが、然し昨年邊りから彼等の素材の發見は、俄然その方向轉換を開始した。

即ち、大曠野に睥睨する蒙古人の少年が描かれ、農産物出廻期の曠野を走る馬車が描かれ、悠揚せまらざる六曲の大作「河の宿場」が描かれるに至つた。滿洲の鄕土色といへば平康里、阿片窟といつたものに求め勝だつたそれが、かくのごとく滿洲的な意慾的な題材を豐富にするに至つたのは、正にパンプタオ集團の時局認識、視野擴大に努めたたゆまざる勉强の賜物といはれるべきである。

更に一層題材が擴大され、農産物の交易場風景、畑を耕す農民、開拓村の子供たち、縣公署風景、協和會の仕事、國家的なものに目覺めゆく國民、國境を守る將士の姿、滿洲國軍の行動、國都建設風景、縣農事技士の農村に於ける指導、集團部落風景、水田開拓の鮮農の姿、民族融和のリアルな風景といつたやうに、視野と素材の擴大されてゆくことを祈つてやまない。

その他、映畫に就いては、目醒めたる建設的なシナリオの提供、演劇に在つては脚本の製作、紙芝居の利用の問題等いくらもあるが、すべて未だ十分な活動に達してはゐないので、それ〴〵の分野に於ける知識人の覺醒と、自主的な活動を願つてやまない。

これらは、いづれも民間の中から、知識人の中から、自主的に動き出されるべきであつて、これが國家、または國家機關からの動員となると、自ら異つた面貌を帶びてくるであらう。

以上は餘りにも當然すぎることであつたり、未だ說明不足の點もあるが、すべて專門外の僕が、現在知識人自體が革新され、彼等が白眼視してゐた宣傳といふのがもう一度見直さるべきであるといふ信念から、その點を强調したいためにをこがましくも、乞はるゝまゝに一雜感として書いたものである。

（十四年二月）

宣傳對象としての滿農

宣傳の對象の性質（その民族性、農村事情、家族制度、生活內容等）をよく知つておく

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

ことは、宣傳をその相手によく理解させるためにぜひ必要である。よく言はれるやうに敵を撃破するには、まづ敵の内容を知らなくてはならない。しかし敵を知るとは、その實力を知ることで、それに敗けないやうに味方の軍備を用意するのであるから、最後に物をいふのは味方の實力である。

宣傳に於て相手を知るといふ事は、どうしたら早く、ぴつたりと相手の頭にこちらの要求するものを傳播させることが出來るかといふことを測定する一つの方法である。支那通は必ずしも支那人の心を摑めるとは限らない。敵の内幕をいくらよく知つてゐてもこちらの軍備が出來てゐなくては勝てないのと同じやうに、いかに對象の實情を知つてゐても、宣傳者の人格如何によつては相手を信服させることが出來ない。また宣傳者の人格と、對象への十分な理解があつても、宣傳者が自己の宣傳せんとするものに對して、絶對的な信念と熱意を持たないとやはり相手を納得させる力はない。

即ち宣傳者には、(1)宣傳せんとする目標への搖ぎない信念、熱意。(2)宣傳者の人格、(3)對象への理解。この三つがどれ一つとして缺くことの出來ない條件である。

かゝる三つの條件を前置きとして、以下に農村滿人のもつ民族的特性、その農村事情、生活諸關係について書いてみよう。

一、民族的特性

(イ)國家觀念のないこと

滿人には大體國家觀念がない。これは長い間惡い政治に苦しめられてきた漢民族の特性である。日本國民の尊崇の中心には、皇室があり、皇室は正に天壤無窮であるが、元來支那は何度も天下が代つては滅んだ國であり、民衆は地上に崇信の對象をもつことが出來ない。從つてその崇信の對象として天を仰ぐ。君主は天命によつて君主となる。

また日本に於ては、肇國以來君臣の道は明らかであるが、彼らに於ては官に仕へて俸給を貰つて初めて臣となる。即ち役人だけが臣で一般人は單なる民衆である。忠を盡すのは俸給を貰つてゐるその恩返しとしての忠なのであるから、民衆は忠とは無關係である。民衆は善政を布いてくれるのなら、例へいかなる民族が君主とならうと滿足してゐる。

また政治といふものは、人民には何の恩惠も與へるものではなかつた。政治と人民とは離れ離れに在つて、政治が人民の生活に僅かに影響を及ぼしたものは、人民の苦痛に屬す

るもの、例へば重い稅金、多くの賦役、人民が生活上に種々の便宜を得るための賄賂などであつて、決して人民を安らかに生活さす種類のものではなかつた。

從つて善良なものほど政治からは出來るだけ無關心を示し自分の力で自分を守る考へ方、よく言はれる利己主義、個人主義風な考へ方が發達してきた。だから國家に對する愛國心などは生まれて來ず、公けの施設に對する保護觀念なども極めて薄いのである。

我々はよくかういふ彼らの氣持を理解して、まづ同情心を持つてやらなければならぬ。さもないと一寸したことで彼らを輕蔑してしまつたり、工作に自信を失ひ熱意を無くしてしまつたりする。十分相手の心事に理解を持ち、その上で今日、日滿の軍備の充實とその防衛力によつて、初めて自分達が畑を耕し、安心してその收穫に期待が持てるのだといふことを知らしてやる。即ち國家意識が芽生へてくるための、最も初步の考へ方を彼らに植ゑつけてやらねばならぬ。

（ロ）老成と老獪

彼らは極めて穩健、柔順である。まるで竹を曲げれば曲げただけしなふやうに、また水をどんな容器に入れても入るやうに、どんな環境にも、どんな苦しい生活にも……

また權力者のいかなる横暴さにも追從して、少くとも表てだつては不平不滿を言はない。從つて向上心に欠けてゐるし、改善、改革といつたこと、新しいものを受け入れる氣風に乏しい。一面に於て素直だとも見えるが、實は素直なのではなくて、事無かれ主義なのである。彼らには情熱的な理想家などといふものは、決して理解出來ない。改革や新しい計畫に向つては、その良いところを採らうとするよりは、その實現のむづかしい理由を、得々と述べる方が得意である。

從つて頭から東亞共榮圈などといふものを說いても理解されないし、後述する彼ら獨自の猜疑心によつて、その裏の意味を嗅ぎつけようとする神經の方が、まづ活發に働いてくるのである。

「敗けるが勝」「三十六計逃げるが上計」「君子危きに近寄らず」これらは誰の頭にもある。老獪は、利害に敏感で、世間のことに冷淡である。進步に疑問を持ち、穩和な素直さを粧ふ。努力を惜しみ、改革、理想といつたものに冷淡である。

過去に於ては訴訟事は九分九厘まで法廷の外の工作で勝負が定まるものだといふ通念をもつてゐた。だから眞面目に努力することはバカらしいといつた考へがある。

「觸らぬ神に祟りなし」といつた格言が生れてくる譯である。從つて對外的に無關心を裝ふ。無關心は亀に甲羅があるやうに、自分を守るために生まれてきたものである。中には三十代位までは公共のために一肌脱ぐ者があつても、彼は軈て何かで手を焼いて、無關心の良さに入つて行く。そこで支那で、最も成功した新聞記者とは、自分の意見をもたない記者であると言はれてゐる。

だから彼らに新しい考へ方、新しいやり方を宣傳するにはただ口で言つただけでは效果はない。彼らの直接身にひびいてくる利害損德に結びつけて、具體的に說明する。例へば農事の指導なら、實例を示してやる。東亞共榮圈の話なら、彼らの日用品と結びつけて說明してゆく。すべて彼らの身にとつての利害、損耐から話を導いてゆかねばならぬ。

（八）　忍耐心と知足

我慢强いことは、彼らの美點である。しかし忍耐が强すぎて、實は欠點にもなつてゐる。惡政、暴虐、秩序のない不安に曝らされた日々にも、彼らはヂツと忍んできた。この忍耐强さが作られてきたのは、主としてその家庭生活が、大家族主義で、兩親、祖父母、嫁たち、兄弟、その子供たち、親戚の大ぜいが、一家の中で毎月お互ひに辛棒し合つて共同生活をしてきたところから生まれてゐる。大家族主義の家庭では各人が讓り合ひ、辛棒し合はなかつたら暮せない。もう一つは大自然の暴威への屈從である。

忍耐强さは、忍んでゐる必要のない惡政に對しても、また權力者の横暴に對しても、少しも反抗しなかつた。よく言はれる「沒有法子」の考へ方が根强く涵養された所以である。

我々は彼らの忍耐心の强さ、口にして言はない辛棒强さに對して、よく推察してやらなければならない。すべての場合にさうである。これを洞察していたはつてやることによつて彼らの心を摑むことが、容易に出來るのだといふことを知つておくことが大切である。

農產の乏しい地方に行くと、住民の多くが乞食みたいにして暮らしてゐる。しかし案外に彼らはその中に樂しみを持ち安んじて過してゐる。外見だけで彼らの生活がひどいと判斷するのは、我々の生活を標準にして考へるところから起るものである。

勿論彼らは出來るだけ多くのものを欲する。そして享樂しようと慾望するが、それが得られないとしても、大した悔いもなく、分に安んじてゐる。前述の向上心の欠乏と關聯してくるのであるが、しかしその間の心理の機微をよく理解した上で、彼らの生活が少しで

も良くなるやう指導してやつたならばやはり彼らの心を摑み得る一つの方途となる。

（二）ユーモアと洒落

洒落とかユーモアは常識から生まれる。彼らは常識の信者であるから、洒落もユーモアも備はつてゐる。またユーモアは自分の失敗や困却した立場から多く出てくる、彼らは殊更に自分を惡い狀態の立場に考へ、そこに落着く、一種の敗北主義者である。

洒落に富んだものは、罪惡に對しても寛大である。大概のことを大目にみる。從つて環境は惡化するし、物を眞劍に考へるといふ能力に貧しい。

さういふ欠點はあるにしろ、彼らのこの餘裕のある洒落やユーモアを善導することが必要となつてくる。いつも時局講話や建國精神を說いたり、困苦しい訓練で、その間に笑ひを伴はない限り、彼らの心に近づくことはむづかしい。彼らの洒落や、ユーモアのある會話に入つて行くことは困難であらうが、表情や擧動や、片言混りの滿語の中に、自ら彼らを笑はせ、彼らの心を軟らかくほぐしてゆくことが大切である。彼らのもつユーモラスな氣持、洒落を愛好する心情をよく理解し、これをうまく外側から動かしてゆくことである。

（ホ）保守主義と順應性

前述の「老成と老猶」の項でもふれたやうに彼らは一樣に、保守主義だ。改良とか改善とかはすべて肌に合はない。だからもし我々が浮つかり彼らの在來農法なり、生活改善一例へば衞生の爲に便所を作らせることにしても、口を出せば物好きに餘計な口を出してくれるものだとみる。けれどその癖融通性が强いから決して表て立つて反對して來ない。

筆者は先日敦化の近くの農村で、農家の戸口に、木箱に一摑みの砂が入れてあるのが、軒並に目についた。凡らく協和會から燒夷彈に備へるために命令が出たためであらうが、かういふ田舍にさういふものを準備させるのもどうかと考へるが凡らく農民はそれがどんな時にどんな役に立つかといふことも解らず、とに角衙門の命令なれば一應形だけはしておくのであらう。

彼らを權力で引つぱる位容易なことはない。しかし心から信服させることはむづかしい。權力で引張ることは出來るが時局の切迫した狀態になると、彼らは逃亡するに違ひないのである。しかししつかりと味方にしておけば例へ訓練が出來てゐなくとも、非常時態に立派に働かすことが出來るのである。

さういふ點で清朝初期の皇帝たちは、よく漢民族の心理を摑んでゐたといへやう。漢民

族は滿洲人である清朝を「塞外の蠻族」として蔑視してゐた。これを洞察してゐた皇帝は過去の支那の書籍全部を新たに筆寫し、これを四庫全書と命名し、大書庫を作つて保管した。これは漢民族の事大的な學問愛好、書物を寶物視する感情にピツタリと調子を合はせたのである。また宣教師を皇城に招き、優遇して科學天文を學び、漢民族の侮りを防ぎ、むしろ尊崇の念にまで導いた如きは、民心把握の要領を得たものであつた。

もう一つ順應性についていへば、例へば彼らに忠告すれば「たしかに自分は惡かつた」と衷心から認め、それを指摘された親切に感謝して「永久に改める」と誓ふが、それによつて相手の怒りが和らぐと、もう彼の目的は達したわけで、そこに實質的に改められたものは少いのである。

だがこの問題についても日本人の短慮で、性急に責めるのは間違つてゐる、今までの彼らの世界では、そのやり方で立派に通つてゐたのである。それが當り前であつたのである。このことを理解した上で善導方法を考へてやるべきであらう。

（八）猜疑心

彼らが、なぜ人並に人の言ふことを信用しないかといふと、一つには「お互同士知らないから」であり一つには「お互同士知つてゐるから」である。知り合つてゐればゐるで安心して信用出來ず、勿論知らなければ信用出來ない。

例へば巡警が、何か分所長に間違ひなり、なんなりを注意されると、「どうしてこれに氣がついたらう」と考へる前に「誰が一體これを告げ口したのだらう」といつた疑問を第一に胸に浮かべる。

支那料理屋で、チツプを置くと往來にまで聽へるやうな大きな聲で、チツプの金額をよびあげる。これはお客に對する感謝の意味からではなく、その起因は貰つたチツプの額をお客の前で公言して、外のボーイ達に、決して自分が誤魔化してはゐないことを證據立てるためである。支那の諺には「一人で廟に入るな」「二人で一緒に井戸を覗くな」と云ふ。一人で廟に入ると坊主が殺すかも知れないし、二人で井戸を覗くと、相手の持ち物を取つて井戸へ投げ込むかも知れないと云ふ、猜疑心の現はれである。

浮つかり部落に行つて何か調べるやうな風をすれば、新しい稅金が課せられるのではないか、何か徵發されるのではないか、何か難題を持ち込まれるのではないか、とまづ疑ふ。すべて外部からの交渉には、まづ警戒するのが通常である。工作者はまづ彼らを安心

させてから取りかゝる必要がある。

二、社會生活

外國では個人が社會の單位になつてゐるが、支那では一家が社會組織の單位になつてゐる。よく言はれることだが、漢民族は國のために死ぬといふことは理解出來ないが家のためには一身を犧牲にすることもある。何のために滿人は働くかといへば自分の屬する一家のために働くのである。出稼ぎして儲けた金も決して自分勝手には使はず家へ持つてかへつて一家の共有財産とする。山も畑も家も一家の共有財産であり、家長が家族中の働く人働かぬ人でもすべての人の生活費を全收入を纏めた中から支出してゆく。働く目的は一家の繁榮のためであり、彼らは家を通してのみ社會人なのである。從つて又、一家に於ける目上の者の目下の者に對する威嚴は絶對である。

ある一家の青年を動かさうとしたら、その目上の者、特に家長たる人を說得するのが最も早道である。

次に社會組織の單位である家族が、他の家とどういふ風に結合するかといふと、

(イ) 血緣團體

これは血統による結びつきで宗族ともいはれる。日本でいふ本家、分家で、これを綜合したのが、宗族である。北滿の或る地方には、一部落の大部分がこの家族で開拓された所もある。先祖が同じだから彼らは皆同じ姓を持つてゐる。先祖の祭なども共同にやり、家族内の紛爭なども處理する。そしてお互ひに助け合ひ、利用し合つて家族の繁榮が計られる。

(ロ) 地緣團體

次に部落同志の結合が出來る。十家を牌とし、長を定めてこれを牌長又は排長といふ。十牌を甲といひその長を甲長、十甲を以て保といひ、その長を保長といふ。この制度は保甲制といはれるもので、警備力の乏しい農村の自衛手段としての役目が大きい。尤も今日は自衛團と改稱されたが、農民にはまだ前の觀念の方が頭に判つきりしてゐるので、何かにつけて口に出るから、一應この制度の事も知つておいていいであらう。

又今日では村制が確立され或る程度自治が行はれ、村の下に各屯があり、屯長があることは言ふまでもない。村長には村の有力者が當るのが普通だが、眞にその地方に權威のあ

るやうな有力者は往々村長のやうな繁雑な職務に就くのを嫌ひ二流の人物に多少の金をやつて勤めさせるといつた所も北滿では少くない。

眞に村民を動かすには、まづ村長を起てることも必要だがこの隱れた實權ある有力者に目をつけ、これを把握し善導してゆく事が大切である。（この有力者の有する欠陷に就いては後述する）林語堂は次のやうに言つてゐる。

「家族制度は支那社會の根抵である、ここから支那人一切の社會的特徴が起源するからである。家族制度と村落制度、この二つが支那人の社會生活の上に於て說明しなければならないものである。面子、人望、特權、感謝、禮儀、公然たる賄賂、公共機關、學校、會館、博愛、歡待、正義、そして最後に支那の政治全體一等これら一切のものが、家族及び村落制度から生ずるのであり、一切がこの制　から彼等に特有な性質を藉り、その特性に對する說明をそこに求めて初めて納得がゆくのである。何故なら、家族制度から家族的精神が生じ、この家族的精神から社會的行爲に對する規約が生ずるからだ。それ故これらのことを研究し、社會的精神の缺除した人間が如何にして社會人として行動するかを調べてみることは仲々興味が深いのである。」

即ち人間同士の間の社會的義務（忍耐、禮儀、家への義務兩親への孝）が、一家の繁榮のために子供のときから種々な形で敎へ込まれるのである。

三、屯の實態

（イ）同鄉關係

北滿の農民は、直接支那本土から來住したものは極めて少く、大概は南滿のどこかを足場にして來た。そして一應そこで共同生活の經驗を持つたもので、北滿に渡つてくるには當時の役人や兵隊がどんなものであるかも知つてゐたから、彼らが頼りにするものは農民達自身の共同生活以外にはなかつた。そこで親戚同鄉の者を誘ひ合つて渡つてきた。耕地の問題から自衞も皆共同で當つたのである。屯が出來るには同鄉關係といふ嘗て土地を同じくした機緣が有力に働いてゐたが、しかし同鄉といつても故鄉が同じだといふのではなくて、現在の屯の土地を耕し、生活をしてゆく上での便宜的なところから出てゐるのである。

それでは屯生活を基にして新しい鄉土意識は生まれてきてゐるかといふと、屯意識は成

長してきてゐるが、屯を鄉土と感じるやうな強い愛鄉心は昂められてきてゐない。屯を中心に共同連帶の自治は行はれてゐるが、それはさうせねば生活出來ぬし、さうした方が利益だからするので、彼らは他に有利な處を見つければ屯を離れてゆくのである。雇農や小作人が移りやすいのは解るとして、地主富農でさへ他にもつと安い土地が多く手に入るなら、惜し氣もなく移つてゆく。これでは人情は厚くならぬし、まして愛鄉心の湧かぬ限り愛國心の芽生へる筈がないのである。

（ロ）親戚關係

屯によつては、戸數の半數乃至三分の一が親戚關係になつてゐる所がよく見られる。これは同時に移民してきた場合だけでなく、生活難のために、支那から親戚を頼つて來住したものが一屯で戸數の二割平均でみられる。それでは同鄉關係と親戚關係と、部落生活でどちらが強いかといふと、入植當時に於ては強弱がつけ難いが、屯に定住してゆくに從ひ矢張り血は水よりも濃かつたのである。即ち同鄉關係は便宜的なものであつたから、屯に落着いてしまへば關係は漸次薄らいでいつた。これに反し親戚は、祖先の祀りや新しい婚姻で一層親しさを增してゆく。しかし一方、利害の不一致などでその結合力は弱まつてきてゐるのも事實である。また彼らの親族觀念は、數千年來父系を中心にしてきたものであるから、母系の弱さは問題にならない。

（ハ）階級關係

各農家の利害の不一致、背反關係を擧げると、同じ屯の居住者でも、土地所有者と無所有者、耕作者と無耕作者、傭ふ者と傭はれる者、役畜農具の所有者と、無所有者とは利害が一致しない。

その不一致は、屯の結合を緩める作用をする。前述の同鄉親戚關係は共通の利害から、屯の結合に役立つが、一方で階級間の利害の不一致によつて屯の結合は緩まる。

しかし別の面から新たな結合が生まれてくる。地主は地主同志、小作人は小作人同志の結合が生まれてくる。

以上三つの關係によつて、ある屯では同鄉關係の結合が目立ち、或る屯では親戚關係で強く結び、或る屯では地主、富農の力が強く働き、そしてこの三つが交錯して種々な微妙な空氣を造つてゐる——かういふ農村への見方も一應知つておいていいだらう。

長してきてゐるが、屯を鄉土と感じるやうな強い愛鄉心は見められてきてゐない。屯を中心に共同連帶の自治は行はれてゐるが、それはさうせねば生活出來ぬし、さうした方が利益だからするので、彼らは他に有利な處を見つければ屯を離れてゆくのである。雇農や小作人が移りやすいのは解るとして、地主富農でさへ他にもつと安い土地が多く手に入るなら、惜し氣もなく移つてゆく。これでは人情は厚くならぬし、まして愛鄉心の湧かぬ限り愛國心の芽生へる筈がないのである。

（ロ）親戚關係

屯によつては、戸數の半數乃至三分の一が親戚關係になつてゐる所がよく見られる。これは同時に移民してきた場合だけでなく、生活難のために、支那から親戚を賴つて來住したものが一屯で戸數の二割平均でみられる。それでは同鄉關係と親戚關係と、部落生活でどちらが強いかといふと、入植當時に於ては強弱がつけ難いが、屯に定住してゆくに從ひ矢張り血は水よりも濃かつたのである。即ち同鄉關係は便宜的なものであつたから、屯に落着いてしまへば關係は漸次薄らいでいつた。これに反し親戚は、祖先の祀りや新しい婚姻で一層親しさを增してゆく。しかし一方、利害の不一致などでその結合力は弱まつてきてゐるのも事實である。また彼らの親族觀念は、數千年來父系を中心にしてきたものであるから、母系の弱さは問題にならない。

（ハ）階級關係

各農家の利害の不一致、背反關係を擧げると、同じ屯の居住者でも、土地所有者と無所有者、耕作者と無耕作者、傭ふ者と傭はれる者、役畜農具の所有者と、無所有者とは利害が一致しない。

その不一致は、屯の結合を緩める作用をする。前述の同鄉親戚關係は共通の利害から、屯の結合に役立つが、一方で階級間の利害の不一致によつて屯の結合は緩まる。

しかし別の面から新たな結合が生まれてくる。地主は地主同志、小作人は小作人同志の結合が生まれてくる。

以上三つの關係によつて、ある屯では同鄉關係の結合が目立ち、或る屯では親戚關係で強く結び、或る屯では地主、富農の力が強く働き、そしてこの三つが交錯して種々な微妙な空氣を造つてゐる——かういふ農村への見方も一應知つておいていいだらう。

四、家の實態

農民は、數百晌の大地主も、荒れた貧農の家も「劉家、張家、李家」といつた風に一樣に家姓で呼ぶ。これは彼らの家に對する觀念を親ふに足る手近な一例である。彼らに在つては、前述の社會生活の項でも説明したやうに、個人が問題でなく常に何家といふ「家」が最初に頭にくるからなのである。

大抵の家が、家譜（系譜）を大切にしてゐる。舊家や豪農のみでなく、貧農でも大概は傳はつてゐる。自分らを生み傳へた代々の祖先への尊崇の念と、家の意識が强いからなのである。

大家族主義についても前述したが、家族數の少い貧農、雇農でも、兄夫婦の一組、弟夫婦の一組が、一家を作り、日工として働き乍ら家事を取締り、弟は年工に出て給料を稼ぎ、子供は豚追ひをして稼ぎ、すべての收入が一家全體の收入として納められる。

十五人以上、三十人以上といつた大家族は、富農、中農上層に限られてゐる。農耕の上に於てもこれが便宜であることは、第一に耕地がばら〳〵にならず集中される。第二に自家勞力を豐富にする。第三に農耕、家計、對外交渉にそれぞれ適合者を選べる。第四に居住の安全といふことが數へられる。即ち大家族制も、一つには傳統的な意味もあるが、それが現在の農耕法に實利があるからこそ續けられてゐるのである。

大家族内の家務の分擔は

管事的　（一家の庶務、農耕の監視連絡、雇農の取締り）

辦外事、跑街的又は跟車的（外部との交渉、穀物の販賣、物資購入）、

會計的　（金錢の出納、管事的が兼任する場合多し）

打　雜　（家内の雜事一切）

之らの内で一番活躍するのは管事的で、家長の統制の下に一家の切り盛りをやる。そして一家の繁榮も分散も、全く家長の德望と管事的の手腕によつて定まるのである。

五、政治生活

(イ)官治の變遷

北滿の部落は、開拓以來百五十年といふのは稀な位で、多くは五十年にも滿たない。し

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

かもその間に、清朝の滅亡、中華民國の成立、滿洲帝國の出現と、三つの國家を送迎してゐる。其の間に於ける將軍、官吏の更送毎に政策は變り新行政組織の下に移されてきた。而も今日では鐵道は縱横に通じ新興都市が曠野の中に、突如出現した。

過去の官治組織が、正しく運用されてゐたら滿洲の農民は十分な政治訓練を受け、政治の理解者となつてゐたかもしれなかつたが、事實は屯の上べを素通りしたにすぎず、眞に部落の自治機能が生かされなかつたのである。

（ロ）自治の發達

要するに農民は、官治組織の變化に、上へだけ調子を合はせて順應してきた。さういふ順應性だけが洗練されていつて自分たちの手際が上手になつた。つまり國が變れば新しい國旗を立て、縣長を迎へ送るに表面上の儀禮だけが巧妙になつた。

そしてその表面に立つて接衝するのは、地主や富農で、彼らは部落から金を集めて銃器を購入し、農民を武裝させて自衛に當て縣長の轉任には部落から金を集めて、仁政感謝の碑を立て、しかもその中から一部著服するのは當然の手數料であつた。現に農事合作社の仕事に於てさへ、村の顔役は手數料を文具費なる名目のもとに著服してゐた實例が多いのでもわかる。

ここに於て農村を訪れた者が、村長の家で、思はぬ歡待を受けたりして、その厚意に滿足してゐたりすると、それが後から全部落民の上に、手數料を含んだ上での一種の稅金となつて課せられることのあることを、銘記しておかなくてはなるまい。

一般部落民の、お上への交渉や、自衛のことは、一切有力者にお任せするより手はなかつたが、滿洲國が出來て、治安が治まり、國家の制度が整ひ、役人や軍人の質が變つてくると、顔役たる地主、富農の有難味が薄らいできてゐる。

殊に今まで忍んできた地主、富農の横暴、例へば招待費、村費、保甲費の割當ての下層農民への過重、賦役の度に下層農民に多く割當てたり、徵兵にも貧農を振當てたり、種々の手數料をとつたり、また地主、富農の地位といふものが階級的に眺められてきて、今や地主、富農中心の封建的な自治制は、眞に農民全體の自治制度に變つてきつつあるのが現狀である。

（八）結び

要するに、農民は彼らの屯を守る意識によつて、今まで國家の變動や、政策の變化に順

應してきて、自分たちの利益を擁護してきた。國家や政權が直ちに彼ら農民の社會的利益とピツタリ一致してゐなかつたから、彼らには、國家意識など芽生へる餘地はなかつたのである。

ここに於て考へなければならないことは、今日の滿洲國の存立が、小さな屯の利益と全く同一の地盤に立つといふことを、よく徹底させることである。國家の發展が屯の發展であり、家の繁榮であり、國家の衰亡が、屯、家の衰亡に不可分關係を有するものであることを理解させねばならぬ。彼らの日常生活に對する敏感さを、摑まねばならぬのである。

それと共に、國家の政治が、屯の有力者のみが關與するものである限り、一般農民は自分らの有力者に對する無力から無關心を示すといふことは試驗濟みである。政治が有力者との交渉である限り、一般農民の國家意識などは芽生へる根がないのである。即ち有力者を動かすことの大切であると共に、彼らの部落での動きを監視する必要があり、一方部落民の一人々々を味方に獲得してゆくことが重大な仕事となつてきてゐるのである。

（十七年七月）

鄉土意識について

人間を作るといふことに於ては、後天的にはもとより學校教育といふものを第一に考へないわけにはいかないが、もつと切實な問題としては、やはりその人間の置かれた環境が決定的な部分を占めてゐるやうである。

學校での教育といふものは、人間を磨くといふことは變りはないにしても、人類が長い歷史の間に發明發見され、それを一層深め、究めたところの人類の遺産としての受渡しといふ、即ち知育といふものが中心になり、より高い人格との接觸による生徒の人格の陶冶即ち德育といふ點になると、主として先生の口で爲されるところの話としてしか、受渡されないといふ缺點がある。

そこで、生徒の於かれた環境、家庭といふものが大きな責任を持つてくるのである。そしてそれは家庭での父母の感化といふ問題に移つてくると、その父母が生活を營んでゐるところの職業、父母の生きてゐる在り方、といつたものが大きな問題となつてくる。

「土地と樹木との因緣は、我々などよりもずつと深く根强く、從つて又ゆつくりとして居る。（略）斯ういふ場合こそは推理の力、もしくは單なる想像を以て遠い結果を夢みてもよい。おまけに我々は人間の意志を以て自然を美しくした許多の歷史を學んで居るのである。願ひ求めることは他に在つても、人が集つて作り上げたものは感動させる。多くの風景の發端を考へて見ると、寧ろ無意識にたゞ見ぬ世の同胞と共に、樂しみ悅んだ痕跡に過ぎぬものが多い。たまたま設計者の功績が記憶せられて居てもその目的とした所は、必ずしも後人の禮讃するものと一致しない。秋田の海岸を特色づける物靜かな森森は、もとは防砂の爲であつた。武藏の野火止の並木の村が、遠い行く手に武光山の明るい峯を望ましめるのは、多分はたゞ繩張りの見當にしたものと思はれるが斯ういふことをして置くと、百年二百年後の旅人が皆悅ぶ。利害は決して一地域のもので無くなつて居るのである。昔の人たちは斯んたことまでは豫期して居ない。强ひて風景の作者を求めるとすれば、是を記念として朝に、晩に、眺めて居た代々の住民といふことになるのではあるまいか」（柳田國男著「豆の葉と太陽」から）

いま眼に觸れたものから少し抜書した。これは必要のためにした植林が、村に美しい風景として殘つたことを書いてゐる。

諸君が故鄕を想はれるとき、それは人間であるか、山川草木の故鄕の自然であらう。しかしその村に殘つた自然は、自然だけが勝手に生きてきたのではなく、村人との深い連りのもとに、自然と人間とが一つに融けこんで、數百年來傳承されてきたものである。諸君が產湯を使つた井戸は、同時に父も祖父も產湯を使つた井戸であり、一家を始め村人の崇敬する、鄕土を生んだ產土の神が鎭守する村、それは村の精神的な中心である。兄も妹も學んだ村の學校、長い村の歷史の間に血の連りの出來た村の家々、例へ血緣はなくても、祖父母の代からの交際、さういつた溫い親身なものがあつて、諸君の鄕土愛は强まり、故鄕への思慕といふものも湧き出ずる根據をもつのである。

近頃言はれてゐることに、國土の再認識といふ言葉がある。國土とは、一つ一つの鄕土が集まつて出來てゐるものである。鄕土といふものを、地理、歷史、經濟、習俗といつた總ゆる方面から正しく認識し、そこに故鄕感をもつことによつて、鄕土愛といふものが湧き起り、そこに始めて日本精神が培はれ、國土觀念が生み出されてくるのである。

今度の大戰でドイツがあれだけの成功を收めた原因の一つとして、國民の祖國ドイツに

對する正しい認識といふものが大きな力となつてゐた。その祖國に對する正しい認識といふものは、地方それぞれの正しい認識から發足してゐるのである。

ところで一體滿洲の漢民族である農民に鄉土觀念があるか、どうかといふことを少し述べてみたい。

滿洲の農民は、鄉土意識、例へば自分の村に對する愛着といふものは乏しい。勿論土に對する愛着といふよりは執着は强い、彼らは移動性が激しいために、鄉土意識を産み出すところまで至らないのである。

そしてまた彼らにとつては、今まで滿洲は彼らの故鄉である山東、河北といふやうな支那本土からの、移民地にしかすぎなかつたのである。日本人にとつて滿洲が移住地であるやうに、彼ら漢人種にとつても、今日までさうであつた。

その上彼らは移動性が激しい。例へば彼らの一人を摑まへて話しかけてみるといい。出身地は山東であり、出生地は營口、前住地は奉天、それから綏化といつた風に轉々としたもの〻多いことが直々解るであらう。彼らの中には、出生地を忘れてしまつた者さへある。例へ出生地を覺へてゐたとしたところで、その土地にどれだけ溫かいなつかしい思ひ出を持つてゐようか。

さらに、父は山海關で生れ、兄は奉天で生れ、自分は營口、弟は綏化で生れたといつたやうに、一家の一人一人が出生地を異にしてゐるのでは、決して出生地に對する故鄉といつたなつかしい思ひ出は生れてくる筈がない。祖父の出身地が山東にあり、そこに昔ながらの舊山河があつたとしても、一　を擧げて移住してきた彼らは、簡單に歸るといふことも出來ない。また渡滿以來何代かの中には、全く出身地とは連絡の絶へたものもある。だから假に祖先を敬ひ、鄉土を愛するといつた美しい氣持が、假に彼らに在つたとしても、それはそれの據るべき根據を失つてしまつてゐる。

それでは現在の屯の生活、これを基にして一體、新しい鄉土意識は生れてくるであらうか。

屯に農業生活を共にし、風、水、旱魃、蟲害と戰ひ、匪の襲擊を防ぐとか、子弟の敎育のためとかには、屯中心の共同連帶といつた自治は行はれてゐる。またそれは嘗て支那本土にあつたときも、國家の政治といふものは、決していい仕事を村落のためにしてはくれなかつたから彼らは彼ら自身で守る村落の自治性といふものに慣れてきてゐるし、大概の村民同志の爭ひもお役所の手數はかけず、村で解決してきてゐた。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled × 31 lines

しかしそれは愛郷心からではなかつた。村で生活するには、さうした方が便利であり、自分らでやらなければ今までは誰もやつてくれなかつたからである。

彼らはだから少しでも多く利益を齎すものを他の土地に發見すれば、未練もなく昨日までの屯を捨てて行つてしまふ。雇農は賃銀のより高い所へ、小作人は小作料の安い土地へ、その土地主でさへ安い土地がもつと多く手に入るなら、惜しげもなく自分の土地を賣つて移つてゆく。そして割合に地主とか、自作農が比較的在住年限が長いのは土地に連る自然の情であらう。滿洲の農村で老樹が茂り立ち、家に落着きのあるのは、比較的住みついた古い家である。そしてそこには、山河はなくとも、ある滿洲的風景美も發見出來やう。

農民の移動性が激しければ土地は愛されないから、まづ土地が瘠せる。村の樹木が亂伐される。道路が崩れる。人情が稀薄になる。共同生活が破れる。人心が荒廢する。

我々は滿洲の農村が、日本の農村のやうに、神社を中心に精神的な結びつきをもち、植林が施されて村が美しくなり、人情が厚く、村の秩序が整然とし、村の鄕土意識が集積し國家觀念の昂揚となる—さういふ日のくることを激しく夢みる。そしてそのためにはまだ、まだ解決されなければならない多くの問題があることも事實である。

（十六年六月）

控へ帳

一年刻々

ラジオに聽き耳を立て、新聞を息つまらせて讀み、昭和十七年はまたたく間に暮れやうとしてゐる。大人となり、十を頭に四人の子供たちの父親となり、私は年毎に一年が短かくなつてゆく想ひを味つてきてゐる。しかし昭和十七年、この一年間ほど一年といふものの短かさを感じた年はなかつた。

[1]宣戰の大詔を拜し、東方に向つて仰ぎ伏した日、吐け口のなかつた鬱憤を拭ふやうにカツ飛ばした日、行き會ふ同胞の一人一人と手をとつて誓ひ合ひたい氣持に驅られた。

あの日、私たちはそれから引續く戰捷の知らせに、どんなに胸晴れる想ひを味はつたことだらう。

この一年、私たちの心は常に戰況の進展に集中されてゐた。その故にこそ、この一年は

短かつたのでもあらう。

私は一體にお正月休みの、なんとなく間の抜けた淋しさより、年の暮の慌しい活氣づいた樣子が好きだ。大晦日の夜、用もないのに冷めたい凍てついた街を彷徨歩き、きまつて除夜の鐘をきいてから家に歸つたものだ。だが今年は好きな本を一二冊買ひ、部屋の中、机の上を整へ、本を讀んで過さうと思ふ。

妻は、このお正月は子供たちの御馳走を少し作るだけにすると言つてゐる。私は贊成である。會社は年末年始を休まぬといふ。これも贊成である。

年末のざわめいた街中を用もなく歩くのが好きな自分ではあるが、このごろは街に出ると徒らに疲勞ばかり感じてしまふ。滿員電車に追ひこめられてやたらに搖られてゐるやうな感じである。行き合ふ女の人の持つてゐる買物袋はやたらに大きく、なんでも呑みこんでしまふ。一體に皆狩りたてられたやうな表情である。私は恐ろしくなる。歩いてゐて、もし鏡があつたら自分の顏を確かめたくなる。

今日鏑木清方氏の隨筆を讀んでゐたら、次の一節が眼についた。

「よけいな見榮に氣の張ることがなく、めいめいが分を守れば、ものみな心やすく、長屋住ひにも鉢植の手入して、暮らしを樂しむ根からの江戸人東京人の、嫌ひなのは、押しの强い、鬧々しい、出しやばり、我利々々、思ひやりのない、凡そかういふ種類の人種はなかま外れとされた氣風は、そのまゝ廣重の江戸みやげとなり、安治の東京風景となつて今更のやうにその頃の生活が偲ばれる」

それからまた、

「四民がその分に安んじて、誰が戒しめなくても奢りや贅澤らしいものの爲でも、いゝことわるいこと、その境界をよく辨へてゐた。食物屋から料理はいふまでもなく、丼物でもたびたび取るやうな生活をする家は、隣近所で、あすこの家は始終店屋物ばかり取つてゐる、あの身上も永持はしまい、と云はれた」

私はこれを讀んでゆくりなくも、自分の生ひ育つた震災前の、下町の簡素な歳末のことどもを想ひ出してゐた。

大晦日の夜、買ひととのへる大神宮樣の注連繩を新たにするだけで新しい年を身も心も洗ひ淨めて迎へるつつましい姿、歳の市で買つてきた座敷箒一つが、きれいに取片づけた室内に靑々と鮮かに、新春を迎へる想ひに浸らせる。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

私は今それを美しく思ひ出す。

四、五日前、私は北の涯ての旅から歸つてきた。北の涯ての町には、心を溫めるやうなものは何一つとして見當らなかつた。さういふところで、私たちを守るために、そして東亜諸民族の守りのために、默々と萬全の態勢をととのへ、嚴寒と闘ひつつあるつわものの姿を見てきた。私はふかく自分の生活について反省しなければならないものをつくづくと感じた。

そこから歸りの汽車の中のこと。人のことをいふので氣がさすが、車中で氣づくと金の指輪や、プラチナを光らせてゐる人たちを何人か眺めた。氣をつけてみると、意外に目につくのである。いま内地にはさういふ人は一人もゐない。滿洲だから、海外だから、まださういふ取締がないからといつて、果して澄ましてゐられるものだらうか。私は哀しい殘念な想ひに衝たれた。

やはり田舍の町で、會合の開かれるのを待ち合してゐる席上で、二人の人が話し合つてゐた。

「お正月が近くなつたね」

「うん、でも僕は滿洲のお正月は大嫌ひだな。ふだんの滿洲の方がずつといいよ」

私は笑つてこれを聞いてゐた。

「ふだんの滿洲の方がずつといい」…滿洲の正月が今までのやうなお正月なら、本當にふだんの滿洲の方がよつぽどいい。

訪問、來客…酒に疲れた後の、何ともいへぬあの空しい白々しい思ひ。私はこの人の率直な言葉に、ふかく同感を感じた。

私は大東亞戰爭開戰一周年のこの十二月八日に、日本人の一人々々が何か自分の樂しみの一つを捨て、神掛けてこの大戰完遂に邁進したら、と思つた。自分では毎日のやうにやつてゐた用もない喫茶店出入りと、禁烟を實行しようとした。意志が弱く、煙草の方は一日十本ほどの節煙にしか止まつてゐないが、喫茶店の方は今のところ實行出來てゐる。煙草を吹かし、濛々とした煙の中で、不平を鳴らし、無意味なお喋りをし、キンキンした潮戸物のぶつかり合ふ音をきゝ神經をさゝくれさす喫茶店の雰圍氣から脱け出すことの出來たこと一つをせめてもの慰めとしてゐる。

私が今ここで、とりとめもないことを喋つてゐる間にも、乾坤一擲の策戰は縱横無盡に

練られ、身命を投げうつて、私たちのため、東亞各民族のため、忠勇無比な皇軍は、北に南に、そして海に、陸に、闘つてゐるのである。

全く戰爭には、年の暮も、お正月もありはしない。戰へば勝つたこの昭和十七年を、いま送り去らうとし、新しい年を迎へようとしてゐる。來るべき昭和十八年を、必ず輝かしい戰勝の年とするためには、銃後に在る私たちの一人一人が、この一年間に於て果して戰ふ國の國民として立派で在り得たか、反省すべき絶好の機會である。

いかなる困苦にぶつからうと、この一戰の貫徹のためにはたじろぐことなく、「おう！」と應へて起ち上る一大勇猛心を備へるために、私は靜かに身邊を省み激しい決意に炎えやう。

（十七年十二月）

收穫と婦人たち

一、

奉天の町並には、町の彩りとなる並木のないところもあるし、まだ木が若くて、ふとした突風に他愛もなく倒されてしまふ若木もある。さうした跡には、竹竿にも似た枝もない苗木が植ゑつかれる。私は朝夕の通勤の途次、それらの健かに育ちゆくことを祈るやうに眺めてゆくときが多い。

しかしそれらの木の植ゑられてゐる鋪道と車道の堺ひの土道は、往還の人に固くふみしめられ、一月も雨ふりがないと、樹木が喘いでゐるやうにさへ感じられてくるものである。

ある風の強い日だつた。鋪道を歩いてゐると、ある家の前に植ゑられた、枝の張りもない幼樹—それでも突端はいくつかに分かれ綠を萌え上らせてゐたが—、その家の夫人らしい五十年輩の人と、その娘らしい二十ほどの人とが、支柱を添はせ、その支柱の背丈だけ繩を、めぐらしてゐるのを見た。その家の前のもう一つの並木は、もはや手入れも終り、根元の周圍がうすく圓く掘られ、水がたゝへられてあつた。

それは日頃、私が見たいと思ひ、一種渴望してゐたところの風景であつた。ゆかしい心添へをしてゐるこの家はなにをしてゐる家かと見ると、土木請負業××組と書いてあつた。商賣柄、資材があるから出來るのだといつてしまへばそれまでであるが、中々資材があつ

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled × 31 lines

ても、自分のものでもない、たゞ自分の家の前に有るといふ偶然にすぎない並木に、そこまでの心づかひのできる人は、私の知つてゐる限り決して多くはない。

まして資材も要らない、並木の根元を穿ち水を注いでやるだけのことにしても、人はなかなかやらないものである。

言はれても、賴まれても、自分の利益にならないことはえてして人はしたがらない。この二人の親娘のやうに賴まれもせぬのに並木へのやさしい心づかひをする心情を、私は尊くうつくしいと思ふ。

この家の前の二本の並木は、外の並木が吹き倒されるやうな強風に遭つても、倒れることはないだらう。旱天が幾ケ月つづかうと、枯れることもあるまい。そして二人の婦人のやさしい心づかひにむくゆる樣に、新綠を沸々と吐き、明春も萠えたつ鮮綠を以てすることであらう。

そしてそれは、往還の人々の眼をなぐさめ、夏はこの家に烈しい西陽をさへぎり、涼しい木蔭をつくるだらう。これが收穫の姿である。

良い收穫を得るには、まづ對象へのいつくしみの心がなかつたら、收穫もまた期せられないものである。

二、

私たちに與へられた社宅にも、二十坪ほどの庭があり、毎年この二十坪の畑からの收穫が、春は青い葉のもの、夏はトマト、胡瓜、なすび、豆類、秋は大根、白菜などを以て臺所を賑はし、その漬物類が一冬のさゝへともなつてゐた。

ことしは、一層土地の冗をなくし、次から次へと間作を行ひ、ときには畑のないアパート住ゐの人への贈り物にも當ててゐるところであるが、今冬の備へに、いまの倍ぐらゐの畑を欲しいと思つてゐた。同じ想ひの會社の同僚と話合つてゐると、ふとあるとき、會社へ出入りの商人が、私たちの社宅街から三丁ほど渾河寄りのところに四百坪ほどの土地をもつてゐることが解つた。

最初工場を建てるつもりで買つたものらしく、近傍が住宅街になつたために工場の建設は許されず、住宅を建てるには資材がないところから空閑地になつてゐるとのことで、私たちは、そこを貸してもらふことに一決した。同僚と一緒に、古い地圖と、捲き尺をもつ

て會社の歸りによつてみた。

そこは住宅の盡きた、渾河邊りの滿農の畑に連つた空閑地の一部で、その邊りの廣い道路も人通りの乏しいところから近隣の人々の畑に仕立てられてゐたが、さすがにこの廣い曠野には素人百姓はどこから手をつけてよいやら、それに土地の所有者もわからぬためにその憚かりもあつてか、草の生ひ茂るまゝになつてをり、私たちの行つたときは、一人の紺服の滿人がしきりにあかざを採つてゐた。

私たちは捲き尺を原つぱに延ばした。南の方の一木もさへぎるものもない曠野から風が吹きつけ、捲き尺はたわんだ。目印に石を積みあげて、とも角所有者のわかつた四百坪を確定した。

翌日會社が退けてから、私たちは鍬をもつていつて、その四百坪の中に、必要な土地を區切つた。私は二十坪ほどを劃定した。

すると、どこから私たちの作業を眺めてゐたのであらう、幾人も鍬をもつた人たちが現はれてき、私たちの四百坪の外を耕しはじめた。

「地主に怒られたら、止めたらいいでせうね」

私たちに、さう言ひわけして、安心を得ようとしてゐた。

今までの原野は、かくして至るところ耕しはじめられた。私たちの四百坪は、知り合ひに頒たれていつた。夕方になると、若い夫婦、子供連れの男が、鍬を振ふ姿が活氣づいてみられるやうになつた。私は近所の川内さんにも、知らせて、土地を分けた。最初の開拓者ともいふべき、私や私の同僚よりも、川内さんの手ぎはは鮮かで、甘藷、葱、馬鈴薯などが整然と根をおろしていつた。

ある夕方、畑へ出てゆくと、大ぜいの畑作りに混つて見知らぬ奥さんが、赤ん坊を背に負つてしきりに鍬をふるつて開墾してゐた。

「えらいですね……」

川内さんに話しかけた。川内さんも鍬の手を休めて眺めいつた。

「私のところの奴も、出てくるといいんですが、駄目です」

川内さんは、ぽつりと言つた。それはなにか慰めやうのない言ひ方であつた。

顔を合はせると、いつも何かの不足の話が出た。それは聞かされる側が、一種つらい思ひでさへあり、ときには工夫の足りなさを言ひかへしたいこともあるのだつた。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

お菜にするものがなく、三度三度味噌汁だけだといふ話も出た。かういふ話をきくと、全く工夫の足りなさを、責めたい氣がしてくる。肉や魚がなくとも、野菜のシチウが出來るし、その野菜が乏しくとも、ケチヤツプでいため御飯もできるといふものである。

一つにはものを生かして使ふ工夫といふもの、ものの生態をつかむこと、ひいては物への愛、感謝の不足がかういふ結果になるのではなからうか。

三、

物への感謝の心、いつくしみの心は、物の生産にふれることからはじまる。

私は滿洲生れの娘さんへの、世の非難の一つは、日本人の滿洲生活が殆ど生産につながつてゐないところからも發してゐるのではないかと考へる。

日本では都會に住んでゐても、鄕里の農村との連絡や、さういふ結び付きはなくとも郊外に出て、旅行をして、友達の話に、讀むもの聞くものに於て、農家の苦勞といふものが親身に理解される。

しかし滿洲では、農村との間に一枚の垣が隔てとなつてゐる。即ち民族のちがひである。百姓の勞苦といふものが、例へ理窟の上で理解されても、感情的の盛り上りが決して十分ではないといつたところがある。

もし自身にその勞苦の體驗があれば、假に民族がちがつても百姓への關心はもつとふかいものが生まれてくる、昨日偶然私のところへ遊びにきた兵隊さんは、四個月ほど敎育のために、北滿から奉天郊外の部隊に出てきた人で、北滿の滿農の畑作りしか見てゐなかつたこの人は、奉天郊外で鮮農が稻作をやつてゐるのを、暇々に垣間みて「朝鮮の人は、うまいこと水田をやるもんですね」

としみじみ感心してゐた。何氣ないこの言葉は、ふかく私を喜ばせた。故鄕に在つては稻作をやつてゐたこの人が、異民族の同じ作業をみての感慨がこめられてゐたからである。これがまた一つの他民族への理解ともなる道程である。

いまでは佛壇に花を捧げ、花を活け、花を切ることも、全く何の感激もなく習慣的に行はれるやうになつた。

勿論花をみて、美しいと感じ、高い廉いを言ふことはあつても、花屋に行けば花がある、或ひはないといふだけのことで、花の咲かせられる過程への思ひやりといふものはなく

なつてしまつた。一木一草といへど心なしにはあり得ないといふ想ひにかへることが今日ほど切實なことはないのにもかかはらず。

四、

私は今日たま〳〵吉田松陰先生の書簡集を讀みはじめて、次のやうなところに衝たれた。

「節儉之事御國彌以相固まり候事と奉存候。中谷翁などは御著府已來旬朝粥を給申候。料理等も殊の外省略に御座候。矩方（松陰）も固屋かへ已來飯耳隣固屋にて炊かせ、料理は金山寺、梅實類に限り、式日は鰹魚と制度を定め、且外出仕り少々刻限食時に後れ候ても飯は未だ外にては給不申候。兎角國を出候ては御國にての儉約氣は早晩となく捨たり候ものと相見候得共、御國元金錢を御國にて遣ひ潰し候よりは江戸之濱えまき候儀は一入奉恐入候事にて、苟も御國恩を考へ候人は其心得あるべき事と奉存候」

松陰二十二歳、江戸遊學中、家郷へ宛てた手紙の一節である。お菜は金山寺味噌と梅干だけを食べ、式日だけ魚を食ふ。外出して食事どきがきても外では物を食はない。當時は封建時代で各藩貨幣を發行してゐたところで、自分の國の金を外のところへ行つて自由に使ふことは、國の恩を考へぬ仕業だといふのである。

喫茶店などで、女の人が大きな顔で飲み食ひしてゐるのを見かけるやうになつたのは、ごく昨今の話である。最初特殊婦人たちがさういふ風に慣れ、それが今日一般人に及ぶやうになつたのである。しかし今でも愼しみぶかい人は、女同士でさういふところに出入りするといふことはしないものである。

「尊大人六月二日之御書翰謹奉拜讀候。樹々亭田畠立派に守護相成候由、欣想之至に奉存候。田圃之事は武士たるもの一日も忘れ間敷事と奉存候。其說長ければ略置候。」

同じ年、江戸より家郷の長兄へ當てた手紙の一節である。

「田圃之事は武士たるもの一日も忘れ間敷事と奉存候」とある如き、二十二歳の青年の言葉として立派さに頭が下るばかりである。見識ある辭で、その理由は書かれてはゐないが、武士は武を以て立つのが武士ではある、しかし乍ら武士はその食するものはすべて百姓のお蔭に仰いでゐる。百姓なくしてなんの武士ぞや、といふところにあるとみてよいの

であらう。今日の私たちの最も痛いところを二十二歳の松陰が衝いてゐる。

今日私たちは、空閑地利用の聲に些少なりとも鍬ふるはぬものはあるまい。しかしもしそれを以て、農について一ぱしの思ひ上つた考へをもつとしたならば農を冒瀆するものといふべきである。それは僅かに勞苦をしのぶ眞似事にすぎないからである。

（十八年九月）

食と藝文と

近ごろ諸君がもし假に都會に出てこられたとしたならば、三度の食事のその量の少さに耐へることができないであらう。さうしてきつと、やはり訓練所の方がいい、農村の方がいいと思はれるにちがひない。

また都會から、諸君の訓練所なり、開拓團なりを訪れた人は、必ず「農村」に頭を下げ、なにか都會が農村に敗けてしまつた、かなはない、といつた言葉をもらしたり、或ひは卑しい樣子をしてみせることであらう。いやさういふ私自身それを畏れてゐる始末である。

私は或る所で、白い御飯をいくらでも出されたことがあつた。そこでは白い御飯を「腹一杯」喰べることに滿足してゐる風であつた。けれど面白いことには、混合食に慣れてしまつた私には、三度の白い飯は、なにか餅米を食べてゐるやうに、腹にもたれてかなはない感じであつた。

この春一ケ月ほど軍隊生活を學ばせてもらつたとき、私はできるだけ盛られた飯は殘さず食べてしまふやうに努めた、するとをかしなことには、腹の張るのと比例して、頭はものを考へることを、もの憂くしてゆくのであつた。

これらの經驗から、物の豐かさ、貧しさにかゝはらず、傳へられてきてゐる「腹八分」といふ言葉のふかい眞實にふれることができたおもひであつた。

都會人が、今さらに農村に頭を下げるのは常日頃の心がけの惡さを示すばかりであるし、農民がさういふ都會人の輕さにもし假にも心傲るところありとしたならば、また天地の惠みを忘れた沙汰といはねばならぬ。

先日の新聞に「拓地藝文」と題して、本誌十月號の編輯後記の、「文章や詩歌の作者が

現地にあつていづれもまじめな模範隊員であることを知つたよろこび」が紹介され「物を書くといふ行爲のなかに封じこめられた反省の美しさ」が擧げられてゐた。しかしながら「反省」からのみでは藝文は生まれない、むしろ反省のみではともすれば現狀批判となり不滿となる怖れさへはらんでゐる。

日本國民としての心情の美しさ、その上に起つ建設にたづさはる者の夢と理想が、正しい開拓地藝文の花をひらかしめるものであらう。

閑文字を弄することは今日は遠慮されなければならない。いまはさういふ時代である。いまは祖國存亡の重大時である。私たちが密林と猛獸との神秘の國としか敎へられなかつたニューギニアに、私たちの同胞は戰つてゐる。おもへば私たちは祖國二千六百餘年にも嘗て見なかつた大いなる日に、生を得たものである。この幸福をしづかに味ふと、すべての困難はまるで塵埃のやうにしか見えない。聖戰第四新春はおごそかに明けた。

（十九年一月）

河について

一、

奉天の秋林洋行に勤めてゐるロシア人たちは、毎年夏になると交互に公休をもらつて哈爾濱に出かける。それは買物や舊知の訪問のためにではなく哈爾濱に沿ふて悠々と流れてゐる松花江に水浴にゆくためである。私はこの例年の慣習を大變興味ぶかく思つてゐる。

といふのは、滿洲に住みついたロシア人には、嘗てロシア人にとつて滿洲の最初の足場であつた哈爾濱と、その哈爾濱で行はれる松花江の河水浴といふものが、もはや生活に沁みついたものとなつてゐることを意味してゐるからである。

それ〴〵の環境に從ひ、その土地が齎すところのものを最大限に、不可能と思はれるものさへ可能にして、自分たちの生活にとり入れるといふことは、一に生活力の旺盛さを示

してゐる。こゝに私たちへの教訓があらう。

また例へば一月の嚴寒、零下三十餘度の哈爾濱で、しかも松花江上の氷をくり抜いて行はれる氷上洗禮祭にしてもさうである。私は誰が一體これを考へ出したものか知らない。恐らくは信仰の深く厚い者によつて始められたものにちがひないであらうが、一面に於て彼等は松花江を敬し、しかもこれを畏れずよく征服したものとみるべきであらう。勿論萬象もの皆凍つた中で、氷上の水槽に入るといふことは、理窟からいへば甚だしい苦痛ではないわけであるが、氷上洗禮祭といふものを嚴寒の候に創始し、これを彼等の年中行事の一つとした如きは、全く彼等の生活力の熾烈さを示したものといふべきであらう。

ロシア人は、黑龍江を征服し、それから松花江に侵入してはじめて滿洲に入つてきた。ロシア人と滿洲の河は斷ちがたい因由の下に置かれてゐたといふことが出來よう。

一方漢民族は遼河流域の肥沃した大平原を慕つて滿洲に入つてきたともいへる。かつて遼河流域の大平原は、東北の民ツングース族、蒙古よりの蒙系民族、關内より移民してきた漢民族の爭覇するところとなつてゐたのであるが、農耕に優れ、また生活力の强固であつた漢民族が漸次遼河を遡つて北上し、沿岸に部落をつくり、その集團の偉力をもつて開拓していつた。今日遼河沿岸に多くの古い街が遺つてゐる所以である。

これに對して日本人はどうであつたらうか。元の滿鐵社長山本條太郎氏の如く、未だ日本人が滿洲大豆に思ひ及ばなかつた日露戰役前、上海から營口に再三出張し、遼河流域より民船によつて營口に集中する大豆に着眼し、これを日本向けに輸出するといつたやうな例外はあつたが、主として日露戰役以後日本の權益となつた長春―大連、安東間の鐵道によつて滿洲を認識するやうになつた。また地圖をみても解るやうに、日本から見て、滿洲への緒口となるやうな河川はなく、從つて日本人にとつて、滿洲の河川といふものは、一般的には今日に於ても、十分な認識はないといつてもいゝくらゐのものである。從つて私もその例に洩れるものではなく、或ひは松花江岸の一部を遡航するとか、遼河々畔に立つてその汪洋たる大河の風貌を想定するとか、もしくは車中より鐵橋の音響に氣づいて、樣々の河を眺望するとかによつて、河の存在を偲ぶのみでそれ以上のことは知らないのである。

二、

しかし假に大河のみを擧げてみても、北に松花江あり、それを呑吐して儼として滿ソ國

境を形成してゐる大アムール黑龍江あり、東に朝鮮との國境をなす鴨綠江あり、南に遼河があり、滿洲の大平原を悠々と流れる、これらの大河に合流する多くの支流、その他の河川と考へてくると、一萬粁を突破した鐵道と併せて、自ら獨自な交通網をなし、また水田灌漑に、漁撈に、多大の天惠を與へてゐる。その網の目の如く自在に貫流した河川は、緩かに流れ、雨期また雪解け期至るや、水量豐富となり、河幅廣く、國內開發上の一動脈をなしてゐるともいへる。しかし一度怒ると、農民の血と汗の結晶たる耕野に氾濫し、民家を流失し、或ひは鐵橋を破壞し、木材その他の貨物を流失せしめるなど被害もまた甚だしい。

私が美しいと思つた河の流れは、鐵嶺龍首山上からみた柴河である。山と山の間を、疏々として流れる柴河は、冬近いことゝて河幅細り、白い砂礫を兩岸に露出して帶のやうに流れてゐた。折から二頭立ての大車が、流れを横切つてゐたが、そのとき馭者の振上げてゐた鞭の動きさへ眼に泛ぶやうに遺つてゐる。この柴河の上流が、遠く興安嶺に發して西喇木倫河となつてゐることを想起すると、一種幻想的な、しかも生きた動きをなしたものであるだけに感慨ぶかいものであつた。

遼河は、營口で一箇月ほど暮したとき、よく河畔を訪れた。眼の前の流れの對岸は、畑である。その畑の中を戎克の白い帆だけが流れと反對の方向に徐々に動いてゆく。やがて一時すると、その船が川上に姿を現はしてくるのだ。緩漫なる流れが、低地を求めて蛇行してゐるからである。私はこの白帆の動きを眺めてゐて、いつも利根川の水郷地に在るやうな想ひに驅られるのだつた。あのいろ〳〵な俠客たちの華やかな舞臺となつた利根川。朝鮮側の南陽と圖們との間を流れてゐる圖們江は清冽な流れである。その上流が、野火で燒かれた山野を走り、砂礫の多い山畑の間を走り、急湍となり、ゆるやかなせゝらぎとなり、次第に大河の風貌を備へてゆく姿を、私たちは圖佳線によつて車窓からつぶさに眺めてゆくことが出來る。

また大河とはいへないが、承德から古北口に出る疊々たる熱河の山岳の透き間を縫ふやうにして走つてゐる灤河の流れも忘れがたい。車窓から眺めてゐると、絕壁の眞下に白い河面がかい間見え、あるひは車窓近く潺々たる水音さへひゞかせて迫るときもある。

哈爾濱から佳木斯まで松花江を下つたのも、はや四年前の夏の思ひ出となつた。松花江の水は褐色ににごりをおびてゐるが、手にすくつてみると、なめらかな感觸である。ソー

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

ダ分か何かをふくんでゐるのでこの水で洗濯をするには、石鹸はいらないとの話である。

ところ〴〵の河岸に近く、白いペンキ塗りで建てられた十字架風の航路標識だけが、妙に新風をはらんでゐるが、河の流れも、それから河岸の自然な浸蝕によつてなつてゐる地層をむき出しにしたまゝの自らな堤防も、淺瀬に生えた蘆荻も、それから兩岸にみはるかす畑も、河岸の低地に浸水した濕地帶の草の茂りも、自然そのまゝか或ひは自然に全く同化してしまつた姿としか考へられない。

二・三時間おきに現はれてくる船著場にしても、別にこれといつて新らしい設備があるわけではなく、夜は點されたランプの明りが、郷愁の涯てともいふべき追憶の世界に私たちを引ずつてゆく氣配である。船著場のあるところには、泥土の家並が大概二・三十戸河岸に沿ふて連り、その前後には、いかめしい望樓や、砲臺、土壁などが見られる。

船が近づくと、どこから現はれるともなく多くの人たちが河岸に出てき、立つたまゝ、しやがみこんだ姿、思ひ思ひの姿態で、ぼんやりと船の方を眺めてゐる。背後を廣大な山野につゝまれた、この船著場の小さい部落にとつてはときたま現はれるこの船との間になにか呼吸を交はしてゐるやうな思ひさへ湧いてくるのだ。

夜は、提燈やカンテラを點した人たちの姿が、いや人の姿は見えず、小さい明りだけが河岸のくらやみを行き來し動いて見えるのである。そして船著場をはなれると、小さい明りは一つ消へ、暫時ののちに振りかへつてみると、全く散り消へてしまひ、たゞ一つ船著場であることを知らせるランプの燈だけが、心をひきつけるやうに一つまたゝいてゐる。

思ひがけなく、船著場でもないところに、一軒、二軒泥土の家を發見することがあつた。あざやかな紺服の娘がその泥土の家をバックにして眼に沁みるやうに、立ちつくしてゐる姿が眺められたりした。

さうかと思ふと、滿洲國の軍艦が、青灰色の色を、褐色の河水の上に現はし、音もなく全く音もなく、スル〳〵と滑べるやうに、異常なスピードで横ぎつていつたりした。

ことに忘れられないのは、夕色のせまつた河岸の景色である。日が沈むと、靄がしづかに下りてきて、とほい曠野の涯ての山に紫煙のやうにたゞよひ、ふと氣づくと、河岸の蘆荻の邊りにもふかい暗さがかぶさつてきてゐる。天も沃野もふかい沈默に陷り河水も眠りにおちたやうに闇につゝまれ、たゞこの一箇の船だけが唯一の生き物であるかのやうな錯覺におちいる。私はいつか機會を得てもつと多くの河旅を試みたいと考へてゐる。だが、

眞の河の美しさは、私はもつと別のところにあるやうに思ふ。例へば吉林の松花江岸の、あの清爽なドライブウエー、實は護岸工事のお蔭なのだが。

それから鴨綠江、松花江のダム工事、最近完成した滿洲の暴れ河柳河の堰堤、あるひは計畫されつゝあるといふ、嫩江の鄭家屯までの運河など、私はそこに本當のこれからの河の美が創造されるであらうことを確信し、またかういふ仕事は舊政權時代にはなされなかつたところで、わが國の如き、百年の計畫を以て國土建設に當るものにして、始めてなしうる巨萬の富を呑む大事業であると思ひ、かういふ仕事が著々としてなされることをふかく祝福するものである。

（十八年二月）

このごろのこと

銅　羅

先日、所用があつて旅順へ行つた。

所用をすますと、もはや十二時をすぎてゐたので、食事をするところを探して歩いた。慌ただしく探し周つたわけではなく、ぶら〳〵と町中を歩いてみた。

晝下りの陽ざしが額にあつく、兩側の町並がひつそりとしてなにか月光のある深夜のそれのやうな錯覺をおこさせた。家々は兩側につづいてゐるが、人通りが激しくないからだ。ときどき水色のバスが狹い通りをよぎつてゆくが、町は再び沈潛してしまふ。バスが折々眠けをさましてゆくかのやうに。

私はぼんやり四辻に立ちつくした。すると小路から、小孩が盲人の手をひいて出てきた。思ひだしたやうにボーンと銅羅をならす。盲人の顏は秋深い枯野原のやうに荒凉とし、小孩の顏は子供らしい純眞さがなく、なにごとも諦めつくした年輩の人のやうだ。

私は先日洮南の町で、丁度正午ごろ、私の乘つてゐる馬車の前を小路へよぎつてゆく盲人をみた。その手を牽いてゐたのは青服の少女だつた。

近ごろの人の世界にふれてゐると、私はつひあのひそやかな、すゝんで强くはなにも求めようとはしない盲人に氣をひかれる。私が馬車の上で小錢をさぐつてゐるうちに、もう小路に消へてしまつてゐた。その後で馬車夫に「いま何時ごろか？」と時間をきくと、天

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

心に高いギラギラと輝いた日射しを仰いで答へてくれたのも忘れることができない。

旅順の町の四辻で、私は小孩の手に十錢玉をにぎらした。小孩は手にすると、表情を動かしもせず、全く何ごともなかつたやうにそのまゝすぎて行つた。

少し他氣なくはあつたが、それはまたあの進んで求めようとはしない彼らにふさはしくもあつた。

銅羅を鳴らす盲人の描寫では、パール・バックの「母」だかに、印象的なものがあつた。農婦がやつと金を手にして町の藥屋に少女の眼藥を買ひにゆくと、藥を買ふよりは銅羅を買つた方がいいと言はれる。銅羅を鳴らしながらくらい夜道を村へ歸つてゆく母と娘の一節である。バックのものは「大地」にしても通俗的であるが、この一節はいまでも忘れずにゐる。

洋燈

竹内正一氏と、ある義勇隊開拓團へ泊めてもらつた。

夜、團長の宅で風呂によばれ、夕飯をお世話になつた。

團長、そのお母さん、夫人、夫人の弟さん、村に來たばかりの團員の妹さん二人、それに竹内氏と私で食膳を圍んだ。

御馳走には牡丹餅と、野菜の揚げ物とであつた。

「お母さん、牡丹餅と油で揚げたものでは取合はせがわるくないですか」

團長さんは、私たちのためにさう氣をつかつてくれるのだつた。

その實油をきらしてゐたり、甘いものを長いことロにしない私たちには、近ごろ珍しい御馳走なので、お上手のいへない私たちは妙に困つた感じさへしてくるのであつた。

食事がすむと、洋燈の下で、團長さんと私たちはとりとめもなく話合つた。私たちはあまり團の經營上のことや、營農のことを進んで質問しようとはしない。開拓地の人に接しとりとめもない雜談の中に、自然に團の性格や特徴はうかんでくる。

食事のときあつた二つの洋燈の、小さい方は臺所の方にもつてゆかれたので、隣室にゐる夫人の弟さんは、窓近い殘光で雜誌をよんでゐた。

私たちが燈を獨占してゐることがはばかられ、隣室の弟さんに、

「こちらへいらつしやいませんか」

なん度となく聲をかけたが、遠慮されてゐる。そのうち、農事や、警備の指導員の方た

ちも見える。

「お晩でございます」

農事指導員の方は、さう丁重に改めて挨拶される。

洋燈をかこんでまた雑談がはじまる。

「田舎ではお茶が出ると、きまつて漬物がでますね。それをかうやつて受けてとるんですが」

一人が、右手の掌を少し窪まして前に出す。

「そしてここにかう燭がきつてあつて……」

團長が言はれる。

それはたゞに郷愁ではない。朔漠たる曠野を開拓する人々が、實は心を洗ふ一瞬である。外の周圍の北滿のふかい闇、いまここからこの家の内部を、信州の山中の田舎家に移したら、そつくりそのまゝピツタリする人たちだ。

その中、臺所もひつそりする。私たちのところに土瓶のお茶が入れ換へられたとき、臺所の引き手がひらかれた。すると臺所の内部に明りがさし、上敷一枚をしいたところに、暗につゝまれた姿で二人の娘さんが、もんぺを履いたままつゝましく坐つてゐた。

子供

これは先夜、妻が話してゐたことである。めづらしく豆腐屋が荷を挽いてきたとき、妻は長男に、五十錢札一枚と鍋を渡して買つてくるやうにと言つた。夕方食事の支度にかゝつてゐたころのことである。

やがてしばらくして、歸つてきた長男は、

「二つしかお豆腐うつてくれなかつた」

さういつてなんとなく澁いいやな顔をしてゐたさうである。

あとで近所のお婆さんの話によると、

豆腐屋は大豆と引かへでなくては、豆腐は賣らないと言つたのださうである。

しかしそれが長男には、わからなかつた、金を持つてきたのに、自分だけには賣つてくれないので、くやしさがこみあげてき、その邊に落ちてゐた小石をつかむと、それを豆腐屋に投げるやうに身構へ、そして豆腐屋の梶棒をつかんではなさなかつたといふ。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

そこで豆腐屋は仕方なく、この子供に、二つだけ豆腐を賣つてくれたらしいのである。うちでも一番弱蟲、泣蟲で通つてゐる長男には珍らしい武勇傳で、私にはなんとなくもう一度長男を見直したいやうな氣のする話だつた。

開拓地と本

先日、町原幸二君が北安省の開拓團に行つた。そこには勤勞奉仕隊が奉仕作業に入つてゐるので、狀況をみにいつたのである。

歸つてきて、本好きの彼は、本のことを團員にきいたらしい。

「本なんて讀む暇ありませんや」

さういはれてギヤフンとしてしまつた。

この話も事實であるが、この話から、開拓地では本を讀む暇はない、本はいらない、といふ風に引きだしたら、これもまちがひである。

本は讀みたいがいまは暇がないといふこと、本は讀みたいが讀みたいやうな本が手に入らないといふこと、子供はどうかといふこと、それぞれ事情がことなる。

殊に開拓團でも、義勇團開拓團では、二十前後の青年の集團であるから、知識慾はつよい、竹内氏と訪ねた開拓團では、すでに二千冊近い本が集まつてをり、團長は將來、二、三萬冊の村の圖書館にしたいと言つてゐた。そのとき、竹内氏は、勤め先で廢棄處分にする本が大分あるからとりに來ないかと勸めてゐた。

後で竹内氏にきくと、指導員の一人が、とりに哈爾濱まで出てきたといふ。

村を出るとき、指導員の一人が、「これから哈爾濱に本を買ひに行つてくるよ」と言つたら、そこに集まつてゐた若い團員たちは、ドツと歡聲をあげたときいた。

私は胸をつまらせてこの話をきいた。

洋車

日本人は、百圓札はいつでも百圓札と思つて眺めるし、十錢玉は十錢玉と思つてみる。ところが滿人は習慣的に、いま百圓札で何がどの位買へる。十錢玉では、餅子にしたらどの位の量かといふ風にみるやうに習慣づけられてゐる。

さういふところにも民族的な思考の方法のくひちがひが横たはつてゐるやうである。

街頭所見で、一番見苦しいのは、下りた洋車夫から、手を伸ばされ、文句をいはれてゐる日本人の姿をみることだ。

そしてまた腹のたしにもならないコーヒーをのんだりすることには氣前よく金を出しても、乘り物、殊に洋車、馬車には吝々とした量見をもつものも多いやうだ。洋車に十錢安く乘るのが在滿邦人としての通であるかの如く考へてゐる人にぶつつかることさへある。

しかし、十錢の差で、汚く罵られて家の中に逃げこんだりしてゐる婦人を見かけると、どんな美人もハカナク、興ざめて見える。そして口汚く罵しられてゐても、これを侮辱と感じず、出さずにすんだ十錢玉をかあいがる神經は、私にはどうしても解せない。

十錢安く洋車に乘つてきても、決して見榮にはなりはしない、むしろそんなに十錢が惜しいなら歩くにこしたことはないのである。

私は原則として、大抵の場合、歩く主義をとつてゐる。火急の場合か、身體の工合の惡いとき、荷物のあるときには洋車にのることもあるが、大抵の場合丁度十分か、少し多いぐらゐ出す。だから殆ど文句を言はれた記憶はない。その位出しても滅多に乘らないのだから、當り前だと思つてゐる。

しかしときには、文句をつけようとする洋車夫もある。さういふときは自分で反省してみて、惡くないと思つたら徹底的に相手をやつゝけることにしてゐる。

舊僚友

一年ぶりで大連にでた夕方、磐城町の通りで、もとの勤務先の友達にひよつくり會つた。友だちは北京に轉勤した筈であつたので一層私には意外であつた。

旅先で私は人に會つてもその人の都合を考へ、大がい一寸立ち話をして別れるのが常であつた。しかしこのとき友だちは、なつかしんでくれ、私を放さうとしなかつた。その好意は、私の胸にあたゝかく傳はり、よろこんで近くの喫茶店に同行した。

「本當にひさしぶりですな……」

さういつて友だちはニコニコして煙草をすふばかりであつたが、私もそれで滿足であつた。

「もう上の坊ちやんは中學出たんでせう？」

私はきいた。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31 lines

「さう去年、國の中學を出たけれど、上の學校をすべつて大連へきてたんだけど、私が北京に行つてる留守、私の寫眞機を母親に内緒でもち出してうつたり、どうにも始末にせうがなくて……」

「それでいまはどうして……」

「えゝ、今は勤めてゐるんですが、長男は困つたやつで……。二男も來年出るんだけど、これはしつかりしてゐてね、こないだも、どうしても學校出たら飛行機に乘るつていふんですよ、そんなら爆擊機かツてきいたら、うゝん一人でのるんだつていふ、えらいもんですよ、いまの子供は。敵にぶち當つて死ぬ覺悟をしてゐるんですからね、私は自分の子供だけど、覺悟をきいて涙をこぼしました。よし、やれといつたんだけど子供は一人で乘るとはいつたけど、敵にぶち衝るとは言はない、けれどその覺悟がはつきり感じられるのでね……」

きいてゐて、私の眼に熱いものがにじんできてならなかつた。

子供の聲

交通訓練週間に、少年が街頭に立つて、

「人道をお通り下さい、人道をお通り下さい！」

背筋に汗がにじむ、けだるい暑さ、少年は熱心に高い聲をしぼつてゐる。

大人たちの中には、その聲をふみにじるやうにしてゆくものも決してないことはない。

うぶ毛の生えた頬をまつ赤にして、額に汗の玉をにじませ、少年は叫ぶ。

大人の世界の少年の聲を省みないさまが、私の胸をきりさいなむ。

街路樹

ひんぴんと街路樹が折られ、枯れる。代りに植ゑられる幼木が植ゑつけられると二、三日、あるとき誰にともなくへし折られてゐる。國内を綠化し、美化しようとする情熱に、誰かゞ嘲笑を加へてゐるかのやうに。

先日、竹竿ほどの幼木が、その前に住む人の手で、根元の周圍が掘られ、水が與へられてゐるのを見た。このとき私は沙漠の中でオアシスをみつけた旅人のやうに、うるほひのある心を感じとることができたことを、よろこんだ。

一美々しい言葉もいらない、悲壮がつた思ひ入れ身ぶりの多い講演もいらない。古へをとき、先人を說き、自らを省みない人の文章も、全く不要である。

私たちが忘れてはならないのは、あの十二月八日朝の、日本人お互ひ同志の同胞感だけで、いかなる弄態も戰ひ拔くことが、出來るはづである。あの日の心情を、決意を忘れないことのみが、大切なのである。

（十八年七月）

長生きに就いて

私はいま出來るだけ長生きしたいと考へてゐる。二十歳前後しきりに死に憧憬し、人間として生まれたことを哀しむ想ひ濃い一時代もあつたが、いま考へてみると寔に不思議でならない。

いま考へてゐて不思議であるといふ過去を追想しての感慨、この一點からみても、私が三十四歳までに至り、四人の子供をもつところまで生きられたから得られた述懐である。しかしここで私が長生きしたいと云ふのは何も自己や、家庭のことのみ省みて云ふのではない。わが國の二十年後、三十年後、四十年後、五十年後を想ひ、樂しんでの長生の願望なのである。

五十年後の滿洲、即ち私の七十四歳のときのことである、そのとき私より一つ年長の李成裕君は、七十五歳に達し、林宗潘さん、宛全英さんは、八十歳近くなつてゐるにちがひないのである。

幸ひこの諸兄が長生されるならば、確實にさういふ老齢の日がやつてくることは間違ひなく、むしろ最も疑問符をうたれるのは、私が七十四歳までの壽命を保ちうるかどうかといふ一點にあるらしいやうに思はれるのは、たいへん殘念である。

先日、李成裕君は、私に云つたのである。

「お互ひ年を老つたなら、一つ南方共榮圏彌次喜多旅行をやりますかね」

と言ふのである。

李成裕君は、滿映の映畫よりも、日本物の、特に時代劇の愛好者で彌次喜多、水戸黄門、阪本龍馬については私よりも詳しいのである。

私は、五十周年を迎へた我が國を考へる。心の底から樂しいのである。日系も、滿系、も鮮・露・蒙系も血こそちがへ、全く滿洲國民としての典型を示すにちがひないからである。

建國十周年は、長い長い建國工作の一つの里程標であると私は考へる。そしてこの里程標は、極めて鮮かに成功にちかい歩みを歩んだ。世界情勢の激變による多くの困難が伴つたのにも拘はらず、國を興す基礎的な仕事が、着々として進行した。例へば吉林の大豐滿ダムである。このやうに多くの物資を喰ふ仕事が、困難のさなかに美事に完成の一歩手前に近づいた。

もしこれが單なる搾取的政權のほしいまゝにするところであつたなら、このやうな事業は殆んど省みられなかつたにちがひないのである

私は滿洲建國十周年に際會し、むしろ私は建國の大業に何らつくすところのなかつた自分を反省し、まことに肩身のせまい思ひに耐へられないのである。

今私個人の覺悟として、まづ自ら滿洲國民としての模範民に、一歩でも近い自分を築いて行かうといふことを深く決意してゐるのである。

そして建國二十周年、三十周年、四十周年、五十周年にまで生き延びるべく、出來るだけ一方に於て生身の養生につとめたいと考へてゐる。

私はひたすら五十周年の祝典の日を夢みる。私は七十四歳の老人となり、七十五歳の老人である李成裕君と共に、そのときこそ手を取り合ひ、盃を重ね、お祝ひ申上げたいと願つてゐるのである。

（十八年六月）

奉吉線にて

吉林から朝早い列車に乘つた。龍井までの往復に携へた書物は讀んでしまつたし、昨夜おそくついた吉林では雜誌も買へなかつた。私はぼんやり車窓にうつる風景を眺めてゐた。

「妾はもう、乘物にのつたら何もいただけないんですのよ、胸がつまつてしまひまして、內地へ歸りますときも、ほんの水氣のものだけで通すんですの」

さう喋べつてゐた奧さんも、話相手の婦人が降りてしまつてから、ふと私が見たとき、

大きなお握りを口にしてゐた。

その話相手になつてゐた子供連れの婦人は、行李をもつて、明義といふ驛でおりていつた。鷄の餌を買ひにゆくと話してゐたが―。

その明城では、粟畑の向ふを、日滿兩國旗を先頭にした、村人たちの長い行列が眺められた。後尾に近く銅鑼が鳴らされ列車が停まつてゐる一瞬の靜けさの中で、うるさいやかましい笛の銅鑼の音は、その音だけが曠い畑を通してひびいてくると、かへつて一種の寂寥たるものを傳へてゐた。

「雨乞ひ！」

しかし空は一片の白雲もとどめず、人事の憂愁を尻り目に炎々と陽は燃えたつてゐた。

或る小驛にとまつたとき、鐵路の堤の下に、二、三の平家が見え、露天に眞瓜を並べてゐた。

すると先刻の婦人の子供が、

「母さん、買つてくる」

「氣をつけていつてらつしやいよ」

婦人は札を渡してゐた。私はかへつてその國民學校四年ぐらゐの子供に、ハラハラしたものを感じた。停まつてからもう既に一分は經つてゐたからである。

―が、やがて少年の姿は眞瓜賣りの前に見え、賣り手は天秤にかけてゐた。列車が發車したときには、車内のドアーから眞瓜をかかへた少年が現はれてゐた。

清原で、私の前の席に背廣で開襟シャツの人が乘つた。

坐ると直ぐ、せはしさうに手提げ鞄から鉛筆をとり出して、窓際においた。私はいま清原の町でとつてきた仕事の見積りでも書きはじめるのかと思ひ、つづいて一件書類が取出されることだらうと見てゐると、一冊の雜誌が膝にとり出されただけだつた。それは創刊された「俳句滿洲」だつた。

この數日、文學的な雰圍氣から全く離れた環境にくらしてきたこととて、私はひとごとながら、心を洗はれたやうな和らぎを覺へ、しきりに文學への思慕をなつかしんだ。

しばらくは、その人は雜誌を繰つてゐたが、一度も鉛筆をとりあげることなく、やがて横になつて眠つてしまつた。

大きなお握りを口にしてゐた。

その話相手になつてゐた子供連れの婦人は、行李をもつて、明城といふ驛でおりていつた。鷄の餌を買ひにゆくと話してゐたが―。

その明城では、粟畑の向ふを、日滿兩國旗を先頭にした、村人たちの長い行列が眺められた。後尾に近く銅鑼が鳴らされ列車が停まつてゐる一瞬の靜けさの中で、うるさいやかましい笛の銅鑼の音は、その音だけが曠い畑を通してひびいてくると、かへつて一種の寂寥たるものを傳へてゐた。

「雨乞ひ！」

しかし空は一片の白雲もとどめず、人事の憂愁を尻り目に炎々と陽は燃えたつてゐた。

或る小驛にとまつたとき、鐵路の堤の下に、二、三の平家が見え、露天に眞瓜を並べてゐた。

すると先刻の婦人の子供が、

「母さん、買つてくる」

「氣をつけていつてらつしやいよ」

婦人は札を渡してゐた。私はかへつてその國民學校四年ぐらゐの子供に、ハラハラしたものを感じた。停まつてからもう既に一分は經つてゐたからである。

―が、やがて少年の姿は眞瓜賣りの前に見え、賣り手は天秤にかけてゐた。列車が發車したときには、車内のドアーから眞瓜をかかへた少年が現はれてゐた。

清原で、私の前の席に背廣で開襟シャツの人が乘つた。

坐ると直ぐ、せはしさうに手提げ鞄から鉛筆をとり出して、窓際においた。私はいま清原の町でとつてきた仕事の見積りでも書きはじめるのかと思ひ、つづいて一件書類が取出されることだらうと見てゐると、一冊の雜誌が膝にとり出されただけだつた。それは創刊された「俳句滿洲」だつた。

この數日、文學的な雰圍氣から全く離れた環境にくらしてきたこととて、私はひとごとながら、心を洗はれたやうな和らぎを覺へ、しきりに文學への思慕をなつかしんだ。

しばらくは、その人は雜誌を繰つてゐたが、一度も鉛筆をとりあげることなく、やがて横になつて眠つてしまつた。

清原をすぎると、それまで車窓から遠かつた山々が次第に車窓に近く迫つてきた。山の上まで耕された、粟畑は粟末までも枯れてしまつてゐた。

「この月のはじめまでの豫想では上々だつたんですがね……」

昨日も話し合つたのを思ひ出した。

或る驛で下りの列車を待ち合せて長い停車をしたとき、ホームに降りてみた。つい傍の草叢で、ギスがしきりに啼いてゐた。沁みつくやうに暑い日射しの中できく、ギスの聲は睡りをさそはれた。人の怠惰に拍車をかけるやうな感じであつた。

列車は迫まつた山間を縫つていつた。谷川のせせらぎがきこえさうな河原も、白く乾ききつた砂礫の連なりにすぎなかつた。

小驛で、ドヤドヤと入つてきた一家族があつた。夫婦は生活の勞苦に染まつた感じで、子供たちは小さく背中にも一人背負つてゐた。引越しと見えて台所用らしい包みが多く、それの整理に追はれて、子供たちはドアーのところに立ちつくしてゐた。

私の座席の前の人も起き上つて眺めてゐたが、鞄を除け子供を掛けさせようとはしなかつた。

「そこ、お一人だつたですね」

男はうなづいた。

「坊や、そこへ掛けさせておもらひ」

私は餘計な口を出した。

子供の一人は借り物のやうに、ちよこなんと行儀よく掛けた。

「おや××ちやんはどこへ行つたい」

他の子供たちを、それぞれ座席へ割りこませてゐた母親が、自分も席におちついて、ハンケチで額の汗を拭ふと、頓狂に叫んだ。

すると、それに答へるやうに、車内のドアー近くでギスが啼き出した。鋭いその啼き聲は、車内できくと凉しさをさそつた。つづいてもう一疋が啼く。いまの人たちの荷物の上にのせた、稈穀を網んだ小さな籠がその根據地だつた。

前の男の人も、ちつと耳を澄まして籠の方を見てゐた。

よくこんなとき、どうです、一句できませんか……といはれるところだなどと思ひながら、私は相變らずムツツリとしてゐた。

（十八年十月）

清原をすぎると、それまで車窓から遠かつた山々が次第に車窓に近く迫つてきた。山の上まで耕された、粟畑は裏末までも枯れてしまつてゐた。

「この月のはじめまでの豫想では上々だつたんですがね……」

昨日も話し合つたのを思ひ出した。

或る驛で下りの列車を待ち合せて長い停車をしたとき、ホームに降りてみた。つい傍の草叢で、ギスがしきりに啼いてゐた。沁みつくやうに暑い日射しの中できく、ギスの聲は、睡りをさそはれた。人の怠惰に拍車をかけるやうな感じであつた。

列車は迫まつた山間を縫つていつた。谷川のせせらぎがきこえさうな河原も、白く乾ききつた砂礫の連なりにすぎなかつた。

小驛で、ドヤドヤと入つてきた一家族があつた。夫婦は生活の勞苦に染まつた感じで、子供たちは小さく背中にも一人背負つてゐた。引越しと見えて台所用らしい包みが多く、それの整理に追はれて、子供たちはドアーのところに立ちつくしてゐた。

私の座席の前の人も起き上つて眺めてゐたが、鞄を除け子供を掛けさせようとはしなかつた。

「そこ、お一人だつたですね」

男はうなづいた。

「坊や、そこへ掛けさせておもらひ」

私は餘計な口を出した。

子供の一人は借り物のやうに、ちよこなんと行儀よく掛けた。

「おや××ちやんはどこへ行つたい」

他の子供たちを、それぞれ座席へ割りこませてゐた母親が、自分も席におちついて、ハンケチで額の汗を拭ふと、頓狂に叫んだ。

すると、それに答へるやうに、車内のドアー近くでギスが啼き出した。鋭いその啼き聲は、車内できくと涼しさをさそつた。つづいてもう一疋が啼く。いまの人たちの荷物の上にのせた、稈籠を網んだ小さな籠がその根據地だつた。

前の男の人も、ちつと耳を澄まして籠の方を見てゐた。

よくこんなとき、どうです、一句できませんか……といはれるところだなどと思ひながら、私は相變らずムツツリとしてゐた。

（十八年十月）

奉吉線にて

營口にて

本線から離れて客車三輛がガタクリ〳〵遼河江岸の古い開港地、營口に入つてゆく。

營口は八年前の夏、一ケ月餘り滯在したことのあるなつかしい町である。丁度雨季で、晴れ上りさうに見える、ほの明るみのさした空は蜘蛛の糸のやうな雨脚をにぶらせてゆき、ア、晴れるなと思つてゐると、さういふかすかな願ひを、ふつつり斷ちきるやうに雨脚はまた繁くなつてゆく。檐低く燕がとびかひ、その小さな啼き聲も耳に沁みるやうな明け暮であつた。

―このたびの旅では、少し趣きが異り、昨日今日と奉天以南遼陽を中心に、旱魃のさまを眺めてきたのである。

高粱、玉蜀黍は根元から黄いばんだ枯色を這ひ上らせ水分の乏しい葉は、南からの熱風にぐつたりとしてゐた。粟は葉の伸びを止め、農家の近くの葱畑では掻き井戸から頻りに灌水してゐた。鐵路から一時間近くトラックで入つたところの部落は、小高い丘陵に屯子をくみ、舟を備へつけてゐた。三年に一度は出水に遇ふといふ低地で、去年は殊に四十年の大洪水であつた。さういふ條件の悪い土地に根强く住みつく民族、出水の後は土地が肥へ、豐作だとはいへ、壯んな營みには私たちの常識では圖りがたいものがありはしないだらうか。

本線の短い區間を乘合はした列車は滿員で、私は乘降の階段に坐りこんで、キラキラした白い炎熱の下、雨を招んでゐる畑の連りを眺めてゐた。

「どこへ行く」

國民學校の生徒らしい小孩が訊ねた。

「遼陽」

すると小孩は動いてゆく畑を指さし、

「死了、頂好沒有」

ぽつりと、言つた。私はうなずき乍ら、答へる術をしらなかつた。

「去年は洪水でせう、今年こそは、と思つてゐたらこれですからな。でも今年は除草はよくやりました、見てごらんなさい」

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled X 31 lines

縣公署の人も言つた。整然とした畝間は、細かく碎土された土が現はに見えるだけで、一草もとどめてはゐない。增産の督勵に應じて、農民は起つた、そして人力の限りは盡されたのだ。

―さういふ昨日、今日の印象が、營口行の車窓にもたれた私の胸を重くふさいでゐたのである。

夜に入つて營口に著いたそのころ「雨だ！」といふ聲が、車中に一瞬の間に傳はつた。くらい車窓をすかしてみても、しき降りの氣配はなく、僅かに硝子戸に露のやうに宿つた水滴が二、三ほの見えるのみだつた。

改札口を出ると、それでも黑いタール鋪裝の廣場は黑い濡れいろを泛べてゐた。潮來橋の下も水は濁れてむかし靑々として茂つてゐた芦もとぼしらであつた。

しづかな清林館の二階の奧まつた部屋に落著くと、屋根に當る沛然とした雨の音である。網戸をすかして見ると、隣家との間の木立の茂みが靑々と濡れてゐる。

私はなにか昨日から緊めつけられた胸を、俄かにゆるめられたやうな、心のやすらぎを覺へていつた。

「これや、何百萬圓何千萬圓の雨ですよ」

私の同行者は顏をほころばして言ふ。彼にも、降雨によつて障害をうける、私たちの明日の行程もさして問題ではないらしい口ぶりで、同じ思ひの私をよろこばした。

「や、降りました。降りました」

晴れやかな顏で、市公署の總務課長が入つてきた。

「苦勞しました。ズウツト毎早朝市長をはじめ神社參拜をやつてました。とに角降るまではやらうといふわけで……」

初對面の挨拶もそこ〳〵で、同じおもひ、同じ喜びは、直ぐ一つ雰圍氣にわけなく融けこました。

「明日は、市公署は午後から休みますよ、どうしても半休です」

「どうです、ついでに白酒の特配ときては、よろこびますよ」

「さう、澤山ありさへすればね」

「せめて、村長、屯長に特配するんですね苦勞してますからね」

「うん、ぜひやりますよ、しかしこの雨の音をきいては、これやどうしてもまづ祝杯を

上げなきや」

その頃屋根をうつ雨の音は、すつかり耳に慣れたひびきとなつてゐた。

まつくらな畑の中、葉波が洗はれ、根はヂクヂクと水を吸ひこんでゆく樣がしのばれた。

「一夜のうちに、二、三寸は伸びますよ」

「降りすぎると、これやまた洪水で……」

そんな杞憂も却つて座を賑はせた。

その夜、白いシイツの上に、近ごろになく幸福なおもひの眠りについた。

（十八年十月）

思ひ出など

僕が初めて大連へ渡つたのは昭和五年十二月だつた。

埠頭から馬車に乘つて、兩側に赤煉瓦の平家の並んだ、アカシアがきれいに裸になつてならんでゐる並木のある、良く鋪裝された人通のない道を馬車の蹄の音を聽き乍ら行くと、ふと僕は嘗てかういふ道を通つたことのあるやうな氣がしてきた。

それは一體どういふわけでそんな思ひにふれてきたのか知れないが、たしかに通つたことのあるやうな感じがしてくるのだつた。いまでもそれがどういふ錯覺からしてさういふ氣持になつたものか解らないでゐるが、僕の育つた東京の下町にはかういふ町の雰圍氣はなかつたし、通つたことのある氣のするのが自分でも不思議でならなかつた。或ひは僕がそれ以前滿鐵の東京支社に勤めてゐて何かにつけて、滿洲のことを聞いたり、寫眞を見たりしてゐたために、自然に頭の中に培養されていつたものかとも考へるが、それにしても、赤煉瓦の家並の並んだ、冬の日射しの當つてゐる通り道だけが、まるで昔通ひ慣れた道のやうに鄕愁を籠めて思ひ出されたといふのは、理窟に合はない。

最初に住んだのは、蘇摩町の關東の三階だつた。僕は部屋に落ちつくと、直ぐ新しい勤先である大連圖書館に挨拶に行かねばならなかつた。そこには知人は一人もなく、ただ未知の柿沼館長が頼りだつた。

「さア行つてきよう」

二十三の僕は、自分に氣合をかけるやうにして、新しい戰場に打入るやうな思ひで出か

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

けたのであつた。

鏡ケ池、南山麓附近を朝に晩に散歩をした。門を閉ざした石塀の邸から洩れてくるピアノの音を俄じいやうな想ひできいたりした。自分はまだ感傷的な氣分の濃い青年であつた、關東館時代に、結婚をし、長女を得た。

近江町の滿鐵社宅に移つてから、長男が生れた。ここからは中央公園が近かつたので、會社から歸ると長女を連れてよく散歩にいつた。

秀月台に移つてから二男二女と、生れ、僕は自分で判つきり自覺しない中に四人の子供の父親となり、今さら責任と負担の大いさに驚き、人間を決して野放圖にはしておかないところの天の摂理の偉大さに頭を下げないわけにはいかなかつた。

大連生活十年、自分は今年の四月奉天に轉勤になつたが、家族は相變らず秀月台に住んでゐる。戸別割も納めてゐるから自分もまだ半ばは大連の住民であるわけだ。

僕がまだ大連にゐる時分、大連から奥地に轉勤した人が大連へ出てくると、一應大連はいいなとはいふが、もう大連に對しては他人の顔をしてゐる。それが心に觸れてさびしかつたが、さて自分も大連を離れてみると、家族がまだ遺つてゐるのにも拘はらず、大連の貌は、他人の感じである。

大連は日本の大陸據點の一つであり、ここから奥へ奥へと開拓してゆくのであるから一面には大連自身の都市的性格が、直ぐあつさりと他人の貌になり得るのであり、それが反射して大連を一度離れた人々は、大連に對して他人の貌をせざるを得ないのであらうとも考へる。

しかし十年生活を過した土地といふものは、裏街から裏街までが、自分のポケツトの中のやうに解つてゐて、忘れがたいものである。けれど僕も奉天に家が見當り次第、家族をこちらに引取り、それこそ大連とは判つきり他人の貌になつてしまふわけである。

さうして大連はその都市的性格から、いつでも他人になり得る都市である。これは奥地より物價が廉いとか、氣候がいいとかいつた問題とはまた別の話である。

かういふ風に直ぐに他人になれるといふことは、移つてきた街で、血緣のものが勘いといふことも影響してゐよう。心を分けた友達が少いといふことからも原因してゐよう。

しかしやはり人間にはさびしいのである。

僕にとつて滿洲のどこへ行つても、かうであるに違ひないと思ふ。大連は移動する住民

に常に慣れてゐるから特に早く他人になれやすいといふこともあるが、滿洲のどこへ行き、どこを去るにしても、早晩他人の貌になることに違ひはない。決りきつたことだがそれがやはりさびしい。

それには、殊に僕には日本内地にも歸るべき家がないといふことが、精神的に強く影響してゐるのではないかと考へる。凡らくそれはさうであるのだらう。

このごろ僕は、自分の家といふものを少し考へるやうになつた。もとより餘裕はないし、在つたところで今日の資材難でさう直ぐ建つとは思へない。しかし自分の家が欲しいと思ふ。出來るならその家も大連に建てたいものである。

そこで僕は考へるのだが、大連にここからもう動かないといふ住民と、その家が次第に殖へていつたら、大連の都市的性格は漸次變貌してゆくのではないだらうかといふことである。

つまり死ぬまでそこに住みつく人々が大連市民の大部分をなすやうになつたら、お互ひ住民の心理的親近性といふものが濃厚になり、街にある落着きといふものが出てくることであらう。

さういふ風に人が住み安んじた街といふものは、日本の城下町などでみられるやうな、一種の消極性を孕んでくる怖れもあるが、今の僕にはそれ以上に、住み安んじた落着きといふものが、人間の精神におとす陰影や、住みついた人のもつ顔の、表情に現はれた落着きを愛したいのである。

もう一つの大連の特殊性をなす港灣都市、呑吐港としての性格は、いつまでも變貌を來たさないであらう、それに伴ふ商業都市、工業都市としての大連も凋落することはないであらう。

それと共に、住みついた表情をもつ人々が、別に言葉や態度には現はさずとも、お互ひにもつ親近性をもち合つて、市民生活をおくつてゆくといふことは、畢竟僕だけの夢にすぎないことであらうか。

（十五年十二月）

ふるさと東京

自分には語るべき故郷がない。故郷とは、例へ大陸に渡つてきても、過去に地縁、血縁

の繋りがあり、今日でも歸省すれば迎へられるといつたところに初めて故郷感が生まれてくるわけであらう。

自分にも出生地はある。しかしその出生に地縁も、血縁もなく、まして歸るべき家がないとあつては、到底故郷感など湧いてきようがない。

東京の下町、上野、淺草、吉原の三角地帶が自分の出生地であつた。これといつた系譜もない、下町の職人の子供として生まれたのであつた、そして自分がもの心ついてから生ひ育つた二軒建ての二階屋も、關東大震災のときに、倒潰した上で燒失してしまひ、今日ではすつかり區劃改正されたので、一番なつかしい筈の家は、その位置さへ判つきりとはしなくなつてしまつたのである。

家が鍛冶職で、父がどうやら町内の顔利きにもなつてゐたので、神社の祭禮が近づくと半月位前から稼業を休んで祭りを迎へる支度にかゝり、いざ濟むとまた何やかやといつて數日は休む。自分も子供のときは、大のお祭り好きで、外の神社のお祭りにまで御輿を擔ぎに出かけたものである。外の氏子に成りすまし吉原に御輿を擔いで入つたのを今でも判つきり覺へてゐる。

だから一葉のたけくらべなどを讀むと、時代こそ違へ、出てくる子供たちには、僕らの友達の中にぴつたり合つた者さへ發見出來る。

同じ淺草を中心とした下町を書いても、久保田萬太郎の世界となると少し違ふ。萬太郎の作品では、江戸時代からの傳統をもつた下町の人間社會であり、一葉のになると地方から流れてきたものも抱擁した東京の下町である。現に一葉自身がさうであつた。だから萬太郎の世界よりは一葉の世界の方が擴がりを持つてゐたといふことがいへると思ふ。

家の裏には小萬といふ藝職が住んでゐて、彌太といふ乾分がゐた。小萬は梯子乘りもうまかつたし、木遣り唄もいい節廻しで、夏の夜は多くの藝職が習ひにきてゐて、毎晩木遣りが流れてきこえた。小萬は年中文無しでパットの短かいのを口をつぼめて吸つてゐた。

家の筋向ひには「キミヨナオル丸」といふ梅毒の藥を製造販賣してゐる家があつて、よく太つたお内儀さんが、近所では珍しくいつもハイカラに髮を結つてゐた。

上野の山には兵隊ごつこをしにいつたり、十二階下の銘酒屋街には探偵ごつこをしに遠征した。そして日曜日といふと淺草に入り浸つてゐた。

僕は嘶し家にならうとしたり、新派の俳優のところへ書生に行かうとしたり、ある歌舞

伎俳優の所へ弟子入りしようと考へたりしたが、もつて生まれた一種の生眞面目さが、結局冒險を許さなかつたやうである。

それと一つには、所謂江戸ッ子といふものが嫌惡されてきたのだ。無知で、文無しで妙に義理がたく、ハデ好みで實質がなく……しかし山の手人種も蟲が好かない。そこで僕は次第に偏屈に傾いていつたやうである。今の僕には江戸ッ子風なものはなくなつたと思ふ、一つには環境がさうさせたし、一つには意識的にさう志してきたわけである。そして僕には、今でも直ぐ東京の人間だなと解る物言ひや、樣子の見える人を、何となく敬遠するやうな氣持がのこつてゐる。

俗にお酉樣とよばれる大鷲神社の酉の日などは、僕らの小學校は休みになるし、同級生の中には熊手を買つたり、菱餅や笹の葉にさした八ッ頭を買る父兄をもつたものも多かつた。一日中、それこそ朝から晩まで、お酉樣の人混みの中にもまれてゐるのが好きだつた。そしてお酉樣だけは、今になつても懷しく思ひ出される、

同級生の中には、お酉樣のお賽錢を拾つて、活動をみて、鮨を喰つて、先生に解つて叱られた二人がゐたし、捻ぢ鉢卷の景氣をつけて熊手を買つてゐた者もゐた。

僕は吉原公園の池の傍の、掛け小舍で娘劍舞を見たりして、この娘たちの姿をなんとはない思慕の想ひで眺めたり、同級の女生徒を人混みの中でみつけて、胸をときめかしたりしてゐたのであるから、いづれにしても下町風に早熟だつたにはちがひない。

僕は東京には少しもなつかしい感情をもたない。いつしか幼時の思ひ出を、懷しみと厭惡とをまぜへて書いてみようとするときがあるかもしれないが、今はさういふものを書きたくない。現在一種の浮浪生活をしてゐて、自分の子供たちが大きくなつたときに、何處かに心の慰めとなるところを定めておいてやりたいと思ふことは切實であるが、果してどうなることであらうか。

（十七年一月）

映畫について

僕が映畫に就いて云々するといふのは少しをかしい。人もさう思ふやうに、僕もさう思ふ。けれど映畫隨筆なのだから、それを觀ると頭が痛んできてかなわんとか、まだトウキ

イといふものを觀たことがないと書いたところで許してもらへるのだらうと、氣を强くして隨筆を引受けた。

ハツピイ・エンドといふ言葉がある。めでたし、めでたしで幕になる類ゐのもの。これは大正、昭和初期の映畫で、主としてアメリカ物にそれに該當するものが多いといつて一部のファンから批難されたやうである。

けれど僕は概してハツピイ・エンドのものが後味が濕くて好きであつた。つまりはそこに行くまでの道程に、無理がなく人生解釋上の甘さがなかつたら、畫面の男も女も、老ひも若きも幸福に終つた方が餘り樂しい人生を味つてゐない自分には人事ながら氣がラクである。

滿洲の映畫館では、割引といふのが、淺草などとは違つて早朝きたものに施される。東京の電車みたいなものである。

僕のとこの老人なども、往復の電車賃が出るといふのでこれを用ひる。その上まだ人氣の少い館内の空氣がタバコ臭くなくて健康的でいいといふ。

僕は淺草の隣りの町で生れ、そこで育つたので、アサクサといふと直ぐあの六區の映畫館の竝んだ、色彩々のドキツイ旗々のひるがへつた光景が頭に浮んで來、グツと胸に應へるものがある。それは懐しいとか、想ひ出ふかいといふものとは違つた、もつと現實的なそこの大衆、あまり知識的でない、ラクな生活をしてゐない、その人たちの姿が哀しくひびいてくる。

滿洲映畫協會に、近藤伊與吉氏の名前を見つけて、なつかしい。樺太の越境で問題を起してゐる岡田嘉子との、「街の手品師」といふ當時評判だつた映畫が思ひ出されるからである。丁度近頃新劇の連中が大半映畫に出るやうに、あの頃は舞臺協會の人たちが映畫製作をし、岡田嘉子の「ドクロの舞」など雪の信州へのロケーションで、雪國の風物など昨日みたもののやうに胸に疼くやうに浮んでくる。なんと言つてもかういふ古いことしか書けないのは大へん殘念である。

近頃は、月に一度觀にゆく位である。それも大半再上映を觀にゆく。人も知る貧乏で高い入場料を出して入れない。僕の友だちは「文藝」や「新潮」といふ雜誌をいつも月遲れを夜店で買つて讀んでゐる。十五錢で二册買へるといふ。それと同じやうな譯で僕は再上映の中から、友だちが見てゐていいと勸めるのを觀る。

だから友だちは高い入場料を拂つて、いいのもみるだらうが、がつかりするのも見て、その中から推薦してくれるのだから、僕には大へん便宜である。

でも皆んながみんな僕のやうな再上映見物をするやうになつても困ると、今書きながら一寸心配してみたのだがそこはうまくしたもので、現在新しいものを次ぎ次ぎみてゐるものには、再上映は觀たものばかりで、丁度讀んでしまつた雜誌をもう一度買ふことになるから、結局新しいのを觀るより仕方のないことになる。だから僕は今後も、時間とふところ工合の都合で再上映をみるから、友だちはどん〳〵前進して新しい映畫を見續けて欲しい映畫館の新聞廣告やプログラムにはどうしてあんなにうまい文句が使へるのだらう。それはいいとして、プログラムといふやつを讀むと、いつも來週こそは期待出來る面白いものでありさうなのはどうであらう。それもいい、金さへあれは、來週こそはで、キリストの降臨を待つやうに映畫館に週參し、キリストの降臨は望めなくとも、面白く、或ひはつまらなく、退窟せず、もしくは退窟しながらも、現實の手きびしさから今宵ひとときを忘却出來るのだから。

だが、プログラムは、今少しく今週に對しても親切であつてよからう。たゞストリーの大略を載せるだけでなく、今週の映畫を一層たのしんで、または意味深く、觀賞眼の貧しいものは啓發されるやうに、廣告文句に苦心する十分の一の時間を宣傳部の人たちは今週の映畫にも分けてもらへぬものであらうか。

滿洲映畫協會の設立によつて、北滿の農民たち、年收百圓、一人當りの年生活費二十圓といつた人たちも遠からず映畫の慈光にも接し得ることであらう。さういふ人たちが、心から笑つて映畫の見られる日、その日こそ待望してやまぬ「來週」である。

（十三年三月）

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

農村報告

聖焔旗飜るところ

勤奉隊現地報告

私たち奉天省勤奉弘報隊の一行は、省公署弘報のNさんを先頭に張台子驛に下りた。驛前には戸數十戸ほどの檜低い泥の家がちらばつてゐる。

廣場で出迎への復縣副縣長をはじめ縣の方に挨拶してから、五噸積載の小型トラツクに便乘する。畑の間の道をゆく。驟が道に立ちふさがつてゐるのを、農民が慌てて引つぱりに走る。

「雨が足りないですな」

丈餘に伸びた高粱、玉蜀黍は、根本から枯色を這ひ上らせてゐる。國民學校の建物が見えはじめると、トラツクの響きで生徒が集まつてくる。

「敬禮！」

生徒の一人が聲高く叫ぶ。車上の者たちも禮をかへす。列車の踏切を越へ、路傍の楊柳の枝に觸れながら、尙一走りすると三十分ほどで、復縣第二大隊本部のある部落、西螞蜂台に著く。部落の一軒が本部に當てられて、門に聖焔旗がかゝげられてある。

本部内に入つてから、縣司令付の方からまづ概況を聞く。

ここは哈大間の自動車道路の建設に當つてゐるので、復縣から勤奉隊員〇〇〇名が出動してゐる。全體が二箇大隊、六箇中隊に編成されてゐて、擔當延長距離九粁餘に及んでゐる。

作業の予定日數は百二十日であるが、五月十日前後本隊が入つて早くも七月末には擔當全工程修了の見込みとなつてゐる。

六月中は隊員の作業能率は一日一人六・五立方米土量搬出といつた好成績であつたが、七月に入つては暑氣と雨のないために能率は減退してきてゐる。

說明が終つてから再びトラツクに乘つて現場に向ふ。二十分ばかり畑中の道を進むと行く手に赤土色の築堤が、道路をふさいでゐる。これが建設中の自動車道路である。堤に上

つて南北に蜿蜒と伸びたひろい大道路上に起つと、綠一色の畑中に伸びた赤土の大道路は、大河のやうな錯覺を起させる。

はるか一粁ほど南方では、ドランズを擔いで土を搬び上げる隊員、道路の下でシヤベルを振つてゐる隊員の姿が營々と眺められる。トラツクの停つた邊りは土地が高みになつてゐるために、道路の高さも一米餘であるが、いま盛土をしてゐる邊りは、數米の高い堤みになつてゐる。その土の一片でもが、勤勞奉公隊員の、シヤベルで掘りドランズで擔がれて積み上げられたものである。

畑中を南北にまつ直ぐに走る新京大同大街のやうな大道路のまん中に立ち、私は自然に刃向ふ人間の營みの烈々たる偉大さに衝たれ、驚きはかへつて一種悲壯な思ひにさへ誘はれてゆく。

現地に着くと、道路の中央が僅かに埋め殘され、土を搬びあげてゐる數ケ所の通路も、次第に盛り土されふさげられていつてゐた。

隊員は一樣にカーキ色の陣羽織風の作業衣と同じ色の短いパンツをまとつてゐる。作業は小隊を區分して分隊單位（二〇名）でやつてゐるところもあり、六人組を造り、その中の二人がシヤベル、四人がドランズを擔ぐといつたところもある。

「日中は暑いので十二時から三時まで休みます。その代り、朝は三時から、夜は九時ごろまで働きます。小隊毎に競爭意識でやつてゐるので中には月明を利用し夜間作業に勵むといつた小隊もあります」

この邊りは昨年の水害地區でそのため部落自體も燃料に不自由してゐるため、〇〇〇名の炊事燃料にはかなり苦しんでゐる樣子であつた。また主食物增產のため野菜の作付が少く、現地で調辦することが出來ず、自分の縣から搬んで來てゐるとのことだつた。

ドランズに土が積まれたところを、私は行つて擔がせてもらつた。天秤棒を肩に當て、柳條で編んだドランズの上にまるくついた弦に手をあててゆくと、重さが肩だけでなく手にも割りあてられるので、私のやうな貧弱な體のものにもひどく苦しくはなかつた。尤もそれはたつた一回の經驗でしかなかつたが——。堤を擔いで上り、ドランズの中の土をふり落すのに、一寸したコツがあつて私には輕くできなかつた。

やがて正午になると、中隊毎に點呼をとり、宿舍のある部落へ引揚げていつた。

高粱畑の間の道を、シヤベルを擔ぎ整列して、勤奉の歌をうたひながら行く姿は、この

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled x 31 lines

國に生まれた新しい制度の成功を物語つてゐるかのやうな、今まで田舍道に見られなかつた、何か古い農村を震駭せしめてゆくやうな感じを與へた。

近くの部落といつても一粁以上はある。途中には不毛の濕地帶があり、土が乾割れてゐる。部落は高台に列つて立つてゐる。三年に一度は洪水に見舞はれるといふ地帶で、部落には舟が備付けられてあつた。

部落の一軒の家の院子に、長い丸木舟のやうな舟が裏返しに置かれてあり、それが飯台である。井に山盛りの高粱飯に、豆油を入れた湯がかけられるだけの晝食であつた。

飯台に列をつくつて並んでゆき、食前には勤奉訓が齊唱された。

勤勞乃人生修業之道場　誓必敬神忠誠捨身奉公　勤勞乃一切創造之根源
誓必歡喜力行邁進建設　勤勞乃興國安民之要道　誓必協和團結鞏固國基

――食事は勞働量と較べて良いとはいへない。しかし指導者にも惱みがあつた。さつき言つた現地で朝食物になるものを買上げられないことである。

私たちは再び本部に引揚げ晝食を招ばれた。

副縣長は、滿系の大隊長に言つてゐた。

「歸つたら隊員に傳へてくれ、豚五頭、馬鈴薯五噸、胡瓜五噸、茄子、韮などをもう縣の方から送り出してゐるからといつてね」

食後、座談會が開かれる。

この邊は昨年の水害地區のため傳染病があるだらうと思ひ、現地調査のとき健康診斷をしたところ、果して天然痘、發疹チブスなどがあり、一部々落を消毒すると共に、隊員に予防注射をしたのであるが、病氣を隱匿したものがあつたらしく、十數名の患者を出した。そのうち死亡二名、平癒三名の現況である。犧牲者のためには全隊員が弔慰金を出し合ふといふ美しい行爲も起つた。

隊員中に挺身隊を編成、困難な作業地區に後援させたり、部落に何かあつた場合、協力させて部落との融和を圖るといつた方法も講じてゐる。

工事が自動車道路であるため、民間からの慰問はなく、部落ではどちらかといへば、道路建設のため農耕地が少くなり、今までの村道が遮られたりするといつた有樣なので、勤奉隊に對して必ずしも好意的ではない。その上昨年の大水害で村がひどくいためつけられてゐるといつた事情もある。

作業は晝間三時間の休養時間があるとはいへ、朝三時から夜九時では、その前後の起きてから寢るまで、のことを考へると睡眠時間は、青年にとつて適當であるかどうか、少し無理があるやうに考へられた。

もとより工事の進捗の速かなることは喜ばしいにちがひないが、勤奉制度の本旨からみるに、將來の中堅國民の錬成であり、勤勞精神を把握せしめるためのものであり、兵役に服さぬ者への義務制度でありますからには、今後の服務者への影響に鑑みても、勤勞の過重に陷ることは反省されなくてはならないであらう。

また大隊長の言にもあつた如く、隊員は勤奉の趣旨を弁らず逃亡する者が出る。逃亡しても直ぐ處罰されないことが服務中の隊員に父兄から知らされる、すると隊員は處罰されないのならと、眞似をするものが出てくる。勤奉制度がよく知られてゐない證據であり事情によつては處罰に價ひしない者もあらうが、ここに參考にされていいものが含まれてゐやう。

翌日は、遼陽郊外東方六粁の地點に、都市防水工事勤奉總隊本部を訪ねた。

日露戰役で有名な首山方面からは、遼陽地區は窪地になつてゐる。從つて雨季に入ると遼陽市街に注いでゐる城濠河が氾濫し、ときには鐵道不通といつた事故が生まれる。そこで遼陽郊外に於て城濠河を堰止め太子河に合流せしめる。いまこの事業が三ケ年計畫で六月より着手されてゐるのだ。

參加勤奉隊は、新京、四平、長嶺、西豐、西安、東豐、海龍、雙遼、遼陽の九市縣から送出されたもので、各省に跨つてゐるため、總隊は勤奉局が直轄で當り、交通部からは工事監督に出張してきてゐる。

築堤を築きその外壁に城濠河を太子河まで導くのであるが、高地になつてゐる一部は切下げ作業を營んでゐる。

雨が少いため井戸が涸れ、多くの隊員の使ふ水とここでも野菜に苦しんでゐる。しかし、宿營部落の村有荒地を借上げ野菜の自給とか、隊で小豚を飼ひ淺飯にて飼育し、解散時に供するといつたことが計劃されてゐる。これは大へん面白い計劃で、來年からは一層組織だつて、先遣隊がまづ野菜を栽培し、徹底的に自給を圖り、井戸施設なども、部落民に迷惑をかける前に、新規開鑿、或ひは井戸換へなどを行ふといつたことが考へられていいだらう。

一日一人土量運搬が、五立方米、六立方米が最高で、粘土質の土性のところでは忽ち一立方米位に下つてしまふ。ここでは起床四時、それから作業開始、朝食七時、正午から三時間休養して再び就勞、實働時間十時間乃至十一時間であるといふ。

やがて現場へ案内して貰ふ。本部から畑の中に入る入口に茄子畑がある。隊の自給用のものである。いまさかんに開花してゐるところである。高粱畑がつきると、目の前に、見上げるやうな赤土の堤防が現れ、隊員が頻りなしに働いてゐる。

築堤の新土を踏んで堤に昇る。四方がはるか彼方まで遠望される高さである。

陽に焦げた隊員の逞しい體の色はカーキ色の作業衣の下に盛り上つてゐる。シャベルは順次鱗型に土を削りとり、土を細分せず塊りのまゝ積むのが要領ださうである。ここのドランズには籠に手をあてる弦がなく肩だけで重量を支へると筆者には重さが捌きかねた。シャベルで六杯土を入れ、前後で四十五キロの重量だといふ。

全長九粁二〇〇、各市縣の割當一粁、どうしても農村の縣の方が能率はいい。また青年訓練所出身者の多い隊ほど、規律、作業ともに優秀であるといはれる。そしてまた青訓出のものが、小隊の中核となつて働いてゐる。指揮者の技能の相違が作業にひびくことは言ふまでもないが、食糧と病人の關係も見逃すことが出來ない。食事が少し惡くなると病人が續出するといはれる。

それに大隊長、中隊長に當る幹部の身分を保證してやることが、士氣と指揮に大きく影響する、これはぜひ解決しなくてはならない問題である。

築堤の上で、作業をみながら、穴澤事務官から話をきいてゐるといつの間にか、向ふの方に、白い上衣、黑のモンペの女學生の一團が近づいてきてゐる。

「あゝ今日は、遼陽の女子高等國民學校の生徒が慰問にくるんですよ」

大隊長は、各中隊に集合を命じる。隊員達は、シャベル、ドランズを一定の場所に揃へて、築堤の下の切取地に整列し、點呼をとつてゐる。

ここの工事は直接遼陽市民の平安にひびく工事であるために、市民からの慰問も多い。國民學校生徒、理髮組合奉仕隊、國防婦人會被服修理奉仕、市公署素人演藝團等がきてをり、工程處からも、映畫班がきた。映畫を初めてみるもの約八〇パーセントであつた。畫面よりも映寫機の方を眺めて、ザワツイテしまつたといふ。張台子の道路建設にしろ、翌日見學の海城農地造成にしろ、近傍居住民に直接關聯のない作業のため、かうした慰問は

全くみられないところであつた、大きく國家的の大事業に從つてゐるのであるから、協和會なり市縣なりが中心になつて慰問に心掛けるべきであらうと思つた。それによつて、勤奉が名譽ある應召であるといふことが隊員の心にもひびき、作業に及ぼすところは大であらう。

聖火旗を前に、整列した一大隊の隊員と、學生慰問團は向ひ合つた。まづ學校側の代表者が感謝慰問、激勵の辭を述べ、まだ慰問方法を考へてゐるが、本日は皆さんの作業をみせていたゞき、衣服のボタンの取れたの、破れを繕はせて貰ひにきました、と言つた。

各中隊長がボタンの取れたものはないかといふと、一聲に「沒有」と答へる。

「ハハア、皆んな羞かしがつてゐるな」

穴澤事務官は笑ふ。

「洗濯もしてくれると申出られたけれど、水と石鹸がないんですよ」

先生は、生徒に「傍にいつて見て上げなさい」とふれて歩くが、生徒たちもためらつてゐる。

このとき隊員たちの顔にはじめて微笑が泛んだ。

「沒有」と答へたのにも拘はらず、やがてあちらでもこちらでも、ボタンの取り付作業服の繕ひがはじまる。日系の女の先生が「ボタンを引つぱつてみて、ゆるいのはつけ直しなさい」さう言ひ乍ら、教室のやうに、見て廻る。

ここには農大の學生勤奉特技隊が二十二日間參加し、宿舍設營、炊の高さ、民家借上げ時の場合の施設、作業量などを調査し、次後のための資料を作製したといふ。又近く、衛生技術廠から白井博士の一行が參加、營養、醫療、睡眠休養、能率などについて研究するといふ。これによつて、國家的な勤奉作業が、改善向上され、進んで服役するやうになる日も待たれるわけである。

いままでの病人は、一部にマラリヤ、天然痘が發生したが、大部分は胃腸疾患であるといふ。

父兄からの安否を氣づかひ、また激勵の手紙も日に百通ぐらゐはくるが、田舍の人ののんびりしたことには、縣名も書いて來ないものが多く、屆けるのに一苦勞である。

作業場には、大隊毎に掲示板があつて、週間の作業、行事豫定、勤奉新聞が張付られてある。勤奉新聞は本部で發行してゐる謄寫版印刷の日刊で、全滿勤奉隊の動向、作業能率、

表、逃亡者の虚實（實例）、總隊訓、新聞紙からの摘抄、隊員の感想、漫文漫畫、配給品、人事往來、時局記事、識字運動（一日一字）などが掲載され、小隊に一部宛配付されてゐる。かうした仕事も、他の現場に於ても試みられてゆくべきものであらう。また内務指導週間、衛生週間、慰問週間などが設けられて、重點的向上が圖られてゐる。

最後に穴澤事務官は語つた。

「いま勤奉運動に一切を集中していいと思ひますね。これによつて滿洲國民は心身に大きな鍛錬を受け、勤勞に全生命を捧げる國民がつくられ、一方勤奉作業は、國土を效率的に引緊め、兩者相俟つて數年後の、あらゆる分野の滿洲での生産力增强は期して俟つべきものがあると信じてゐます」

「だから、第一年の今年は幹部の錬成です。今年參加したものは、明年の編成には皆中核となり幹部となつて、勤奉自體も來年はさらに目ざましい大建設を遂行するでせう……。とに角今年は、飯の食ひ方、ボタンのつけ方、シヤベル、ドランズの扱ひ方からはじめそれこそ今では、「集合」の一言で立派に整列し、簡單な號令は皆通じるやうになつたものの、集まつた當時は、全く烏合の衆だつたのですから……」

自系の指導者は、日曜日も、休養もない献身的な働きをしてゐる。西安縣司令付の柞淵氏は愛兒が死亡しても歸らず、總隊本部の安藤技師も、母死すの電報にも戻らず、双遼縣司令付の井出氏は、隊員に發生した發疹チブスを看護中自らも亦犧牲となつて倒れた。

奉天省下のみならず、全滿重要工場に、鐵山に、或ひは道路建設、護岸工事、農地造成に、聖烟旗飜るところ、國土永遠の礎を築く聖業に、親邦日本の戰力增强の資源開發に、自ら汗し心身を錬成し、勤勞の喜び、完成、創造、增産の喜びを味はんとしてゐる。しかも初年度といふ指導、厚生、休養、醫療などにいくた檢討を要する點あるにもかゝはらず默々と「行」に參じてゐるのである。筆者もまたそれらの點について私感はあるも、本制度が、青年錬成には最も意義あり、成功しつつあるものなることを確信するものである。

（十八年十月）

臨安の一夜

先日、濱洲線安達まで行つたので、私は初めて開拓團を訪ねた。これまでいく度か、そ

の機會はあつたが、營農について少しも知識のない私なぞが、開拓團を訪ねても、たゞお世話をかけ仕事の邪魔をするばかりだらうといふ遠慮からいままで尻ごみしてゐた。ことに臨安は、もと哈川の訓練所から移行した第一次義勇隊開拓團ときいたので、私は一層遠慮したい氣持だつた。といふのは、義勇隊開拓團では入營者が多く人手がたらないできつと弱つてゐるにちがひないと思つてゐたからである。

おそらく私は、友人の竹内さんの同行がなかつたら、一人だつたら、きつと中止してゐたにちがひないのだ。竹内さんは前に一度臨安を訪ねてをり、ぜひ行かうと、私をさそつてくれたのだ。

安達驛で下りると、町の入口にある辦事處をまづ訪ねた。けふはもう連絡がないときいて、私たちは馬車をやとつた。珍しい鐵ぶち目金をかけた馬車夫が、鞭をふるつて驛の方に向ふと、辦事處の中から若い團員の人が聲をかけた。やがて俵につめた郵便物を運んできて、座席の下にもちこんだ。

「お願ひします」

私たちは喜んで承知した。

踏切をこえて小さな部落の道に入ると、後ろから裸か馬にのつたさつきの團員が、一寸聲をかけて追ひこしていつた。

「ハハア、これを馬にのせられないので、もて餘してゐたんだね」

私たちは話合つた。栗毛の馬は高い尻をみせ、豐かな尾をふり部落の蔭に消えていつた。やがて、曠野の一本道に出る。私たちののろい馬車の前ぶれのやうに、乘馬の團員は一本道のはてに小さく見えた。竹内さんは後ろをふりかへり、

「あの給水塔や、驛舍も、いまに見えなくなるよ」

まだ畑は冬の眠りから目ざめてゐなかつた。海の中の浮き島のやうに、木にかこまれた屯子が、もの〳〵しい銃眼をのぞかせて彼方に見える。行手の地平のはてに、ひくい木立が見えてきた。

「本部はたしかあのさきの方ですよ」

竹内さんは言つた。

二時間近く、やがて本部のある部落が浮んできた。途中の畑の中の屯子が、小島なら、本部のある部落は、なにか城塞といつた感じだつた。三月の末だといふのに、風が冷めた

く足元がいたんできた。城塞には日章旗が高く、ちぎれさうにはためいてゐた。土壁に圍まれた中に馬車が入つてゆくと、やがて本部の看板のあるバラック式の建物の前についた。さつきの團員が出迎へてくれたので郵便物を渡した。

「先生方は今會議中ですから、御案内しませう」

私たちは、しばらく待たうといつたが、「いいえ、いいんです」

さういつて、本部の裏の農事指導員の宅につれていつてくれた。

六疊ほどの室内では、團長を中心に、三人の指導員の方たちが、今年の經營について、相談中だつた。私たちは邪魔にならないやうに、謄寫刷の書類をみせてもらつてゐた。

ここは正確には、浙江省肇州縣昇平村とよばれる。地區の總面積は一萬一千陌で、耕地六千五百陌、原野三千陌、濕地一千五百陌に分けられる。地區内には原住民が四百戸あるといふ。

「自然の恩惠は有がたいもんですな。林がなくて燃料に困るかと思ふと、濕地が豐富な葭を供給してくれるんですからね」

指導員の方がしみ〴〵といつた。

けれどもここでは葭にたよるばかりでなく五十町歩のドロ、ニレの植林が著々すゝめられてゐる。

今年の營農計畫は

燕麥	六一・〇 陌	馬鈴薯	二六・四 陌
包米	五三・五	粟	二七・五
高粱	六四・五	大麥	二八・一
小麥	四六・四	大豆	一九・八
ルーサン	二五・〇	クロバー	一一・〇
蔬菜	一八・九		

となつてゐた。

昨年の收穫では、高粱・包米・粟は現住民には及ばなかつたといふ。一つは早播きしすぎての失敗であつた。早播きがしきりに奬勵されるが、それはあくまでも適期間中での早播きでなくてはならない。

昨年の營農面積は二五二町歩、今年は四三八町歩である。

今年は正團員六八名あり、近く除隊者を四名迎へるといふ。すでに第一次義勇隊開拓團では、たくましく鍛へられた除隊者を迎へてゐるのだ。團員は次のやうな陣容からなつてゐる。

	九年十二月	十年三月	十一年三月（予定）
團員			一一五
團員妻	七三	六八	六七
共働大人	二一	四七	一九
子供	五	一七	五三
計	二	二五	二五四
	一〇一	一五七	

現在の戸數は六八戸で、一戸當りのことしの營農面積は、六・四四陌である。

やがて會議は終り、雜談になつた。

アルカリ性土壤にちかい鹽分の多い土地のこととて、一昨年先遣隊が入つたころは、悲觀的に考へるものが多かつたが、昨年の收穫をみて、團員たちは落着き、今年は張りきつてゐるところだ。いま一番頭を惱まされるのは、組編成のことだといふ。四戸組單位で營農をやつてゐるが。氣の合はない者が出てくると幹部の人たちは惱まされる。中には、二十日間も三十八度臺の熱がつづき肋膜らしいといふことがわかつて、休むやうにすゝめられてもいや自分が入院してしまつたら折角氣合のかゝつてゐる組がくづれるといつて頑張つてゐる團員もあるといふ。

夜、團長さんの宅で食事によばれ、ランプの下で話してゐると、指導員の方たちがくつろいだ和服でやつて來られて圓座をつくつた。

「内地ぢや、お茶が出ると、きまつて漬物が出ますね、ズルトかうやつて手でうけて食べるんですが」

さういひながら、窪めた手の平を出してみせた人があつた。私はなにか美しいものを見てゐる感じにうたれた。

「先日、安達の町の人に、芝居をみせて慰問しました。まア一つには開拓團の紹介をかねたつもりですが」

團長さんが言つた。脚本は團長がつくり、團員が出演し背景、小道具一切手づくりでやつたといふ。開拓團が慰問を受けるといふのが普通なのだが、慰問したといふ話は初めて

である。

「團員はよく本を讀みますよ、ぜひ二萬冊ぐらゐの文庫を作らうと思つてゐます」

詩や、短歌、俳句をつくる團員の誰彼の上に話がはづんだ。また入植當時の話も出た。

昨年三月二十五日先遣隊が入つたときは吹雪で、一面の白い曠野で、入植地の見當がつかず、はるかに行きすぎた所まで行つてしまつたといふ。五十人で八十町歩作付たけれど農耕期がすぎても、農具、馬が入らず、そんな有樣で收穫は、昨年の四人組一組にも及ばなかつたといはれる。

あくる朝、食前にコップに滿ちた濃い牛乳をいただいた。四人一組毋にいま乳牛一頭が飼はれてゐる。

窓の外には、濕地から刈つてきた葭の山が朝の陽を受けて、なにか豐かな感じに眺められた、安達の市價で一萬圓はするといふ。今年は、集會所を建設するので、その煉瓦に入れるものだ。最初本部で買ひ上げるからといつたとき、二人の團員が自分の家の燃料を後廻しにして、せつせと大車で本部の前に積みだした。すると、他の者たちも自分の家の分を後にして、まづ本部の分を刈り出した。この作業が十二月から二月までつづいた。

この地方は、三十年前開墾されたもので、土囊をやつたのと、やらないのとでは、判つきり、收穫に差がついてゐる。そこでいまは團員の家屋も原住民の四間房子を改造してそのまゝ使ひ、家の建築にかける金でどしどし家畜を入れてゐる。

「家は十年のちに、開拓家屋として實驗しつくされた完全な立派なものをつくりますよ」

私はこの言葉から必ず成功する開拓村の手本を感じた。

本部のある部落で、一番立派な建物は、倉庫と日用品の販賣所を兼ねた一棟の建物であつた。次ぎに本格的なのが廐舍であつた。本部事務所や、幹部宿舍はその次ぎのものだつた。ここにも臨安の、自信にみちたしつかりした行き方がみられた。

育雛所では、一人の團員が石油ランプの火で溫水を通し、孵卵器を見守つてゐた。あさつては雛がかへるといふ。その團員は名古屋に派遣され雌雄鑑別の免狀を貰つてきた人だ。乳牛、馬、羊、豚、雞、家鴨、臨安の開拓團は家畜のにぎやかな彩りにみたされてゐる。

羊といへば、三年前哈川の訓練所時代、滿鐵からもらつた三十頭のメリノ種が、いまで

は百頭に達してゐる。そしていまも七頭がはらんでゐる。

「ここでは何もお客さんをもてなすものはありませんが、いまに團員の各戸に、お客用の羊毛の蒲團は備へつけますよ」

部落を見せてもらふ。馬鈴薯貯藏庫の屋根が落ちて部落員總がかりで掘りおこしてゐた。大車で土糞を運び出す團員、春を迎へ部落には活氣がみなぎつてゐた。

河もなく、起伏もないこの團では土地の分割も少しも問題なく行はれた。一戸當り十五陌、耕作地は十二陌になつてゐる。

家の建築は十年さきのたのしみとし、その十年間に家畜をできるだけふやし、土糞をつくつて、土地からとつた營養は土地にかへし、食肉、牛乳、毛糸、玉子……を團員の活動力にそなへる。慰問を求めやうとせずこれをむしろ行ふ。二萬冊の文庫をつくるといふ。

「謄寫刷の雜誌も出してゐたんですよ、入營中の團員がとてもよろこんで待てゐるんですが、中々手がまわらなくて……」

私は義勇隊開拓團が、著々と生長してゆく姿を、臨安でみた。私は義勇隊開拓團の行方に、大きな光明のさしてゐることを、この目でたしかめた。そして私は臨安の指導員の方たちの、一致協力した謙遜にあふれた飾りのない態度にふかい敬愛を感じた。

（十八年七月）

綏化への旅

五年前、私は大連から、會社を休んで綏化の合作社に未知の陳さんを訪ねていつたことがあつた。當時は開拓問題こそ大いに俎上にのぼつてゐたが、在來の滿洲農村は殆ど一般の關心の外にあつた風で、私にはそれが心外でならなかつた。鐵道で結ばれた都市と都市、街と街を除いては、大半農村であり、しかもそれは滿人ばかりの社會である。都會に住む日系とは、血緣も、地緣も直接には經濟的な交渉さへない始末だつたから、一般的に關心がもたれないといふのも、無理のない話だつたかもしれない。私には書物を通して知る滿洲の農村が一つの魅力だつた。都會育ちで、農業とは全く緣のない仕事に携つてきた私に、まだ多くの知られざるものを含んだ農村がたゞ魅力であつた。

書物で私は北滿の綏化に一點の燈のやうに燃え上つた農村協同組合運動を知り、またそ

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

の主眼が勤勞農民の幸福に置かれてゐたことに、なにか私のひそかに理想としてゐたものが形象されたやうなふかい悦びを感じ、いくつかの合作社運動に取材した小説も書いてきた。

しかしこの五年間に、合作社運動自體も大きな方向の轉換を見、さらに一方では、全國的たものに擴大されてきてゐる。農事合作社と金融合作社が統合され、全國的な農民の組織化、自興精神の昂揚、農村金融、農村生活必需品の配給といつた面、特に大東亞戰爭勃發を契機として、食糧資源基地としての滿洲が大きく泛びあがり、直接農村が國家意志と結びつくものとなつてきた。先に公布された戰時緊急農産物增産方策により、滿洲農村に負托された責任は一層重くなり、農村との關門の役割をもつ興農合作社の使命は忽せにできないものを帶びてきてゐる。

十二時すぎであつたが合作社のドアーを開けるとまだ多くの職員の人が机上に向つてをりカウンターの仕切のこちらがはには、田舍から出てきたらしいお百姓たちがざはめいてゐた。

剌を通じてK理事にお目にかゝる。

「中央會の丁さんから電報をいただいてまして、お待ちしてゐました。」

先きに立つて。まづ檢査所を案内してくれる。ここには、電氣裝置の品質檢査器が備へられてゐるが、通常は熟練した檢査員が大豆などは舌のさきで、嚙みくだいた豆の水分含有量などを勘で撰り分けてゐる。檢査員の舌は、檢査器と比較してみても實際において大差ないといはれる。

やがて目下日本に歸省してゐられる理事長さんのお宅の應接室に案内され、今春までの出荷狀況や、今年度の增産見透しについてくわしいお話を伺へた。

綏化縣では、割當の九四パーセントを出荷することが出來たといふ。一方には出水などといふ惡條件がありながら、これまで確保することの出來たのには、合作社職員のなみなみならぬ勞苦と、時局を思ふ農民の涙ぐましい犧牲的な出荷にもとづいてゐるのだ。

私は實はハルビンを朝出て、沿線の畠を眺めてきて、いつもならば、壯んに土糞が畠に盛りあげられてゐるのが、いかにもことしの收穫を期した農民のいきごみとして眺められるはづなのに今年は全く土糞の山が見られず、畠は冬眠のまゝにあることが、どうにも奇異に思はれてならなかつた。

Kさんにきいてみると、いつも暗が明けると、上糞の切り出しが馬車で行はれるのであるが、今年は出荷をまづ確保するために、農民は出荷以外の目的には、一切馬車の使用を禁じてまづ出荷につとめたのだといふ。私はこの農民のいきごみに胸を熱くしないわけにいかなかつた。私たちの食べる一粒の大豆、一粒の米にもこの大きな犠牲があるのだといふことをふかく認識しなければならない。自分たちの食べる食糧まですゝんで出荷してしまつた農民は決して一部分ではないのである。

私は今はこの合作社の重鎮になつてゐる陳さんに訊いた。

「さうしたお百姓たちは出來秋までの食べ物をどうするでせう」

陳さんは、やさしく微笑んで、

「まアいまはどうにか部落内で融通がつきませう。その中に春播き白菜が出來ます。それを食べてゐるうちに、包米がなりますからね……」

やうやく私はかすかに胸を晴らすことが出來た。

由來滿洲の農法は掠奪農法だといはれてゐる。しかし日系、滿系を問はず、誰が自已の耕す土地を愛さぬものがあらうか。土地を愛し得なかつたのは、今年耕してゐるこの土地が、來年も果して耕し得るか、小作の大半が短期契約で小作權の確立がなかつたからである。從つて今年耕してゐる土地へ肥料の還元など望まれやうもなかつたわけである。

ところがこの頃は、地主が小作の長期化を望むやうになり、小作人がこれを歓迎しなくなつてきたといふKさんの話であつた。

それはいくつかの小農家の營農上の不利な條件に基因してゐる。營農の面積が大きいほど、役畜は有效に使用し得るにかゝはらず五晌（一晌は七反二畝）から十晌程度の營農では役畜のムダが出てくる割合がつよい。しかも大農家ほど優秀な役畜を所有し、零細になるほどそれの困難に直面してゐるといふ事情にある。滿洲營農上の適性規模といふものがいかに深刻な問題であるかといふことがこの一事からも窺り知ることが出來る。

綏化の合作社では、農民の主食として馬鈴薯を奬勵してゐる。即ち國家の要請に十分に答へるためには、農民は自らの食べるものをいままでの高粱、粟、包米からきりかへる必要に迫られてゐる。さうしなくては十分に國に酬ひることが出來ない。

馬鈴薯は、同じ一晌から他の作物に比すと十倍の收量がある。そして馬鈴薯を、細かく切つて乾燥させ、その上で皮も一緒に磨りこんで搾り上げると、搾り汁は澱粉となり、後

は包米のやうな粉末になる。これをこねて一種の燒餅が出來るので、これを農民の主食に當てやうといふ運動を起してゐる。

合作社では今年度の一割增產に酬ひるためには、さらに、種子の完全消毒、土糞の奬勵、農產物の共進會、除草作業の徹底などを期してゐた。

今春は殆ど自家の種子用穀物さへ出荷した農民も少くない。一に國家の要請に答へた農民の赤誠の逆りであつた。

このためには合作社は種子の心配をしてやらなくてはならないが、今年度は各部落の興農會(合作社の末端組織)單位に共同採種圃をつくり、種子だけは優良なものを確保しようとしてゐる。

さらに近く春耕金融に乘り出すために着々その準備がすゝめられてゐる。合作社の滿洲職員たちは、この舊正でさへ僅かに二日しか休まず、農民の赤誠に應じて、國家要請に至誠を披瀝してゐる。農民の涙ぐましい出荷と、合作社職員の斷じて國家の至上要請に答へむとする食糧基地滿洲としての役割に日夜精勵の姿を實際に見てきて、私たちの日常生活に大いに反省しなければならないものを審さに味はつてきた。（十八年八月）

實驗農場の一夜

綏化の合作社の事務室の丁度中心にあたるところに在る應接室で、少しもどかしい、そして何かつかみやうのない一種途方にくれた想ひにかられてゐた。

畫前に着いて、合作社のK理事さんから、四時間近くまで私は、綏化縣の出荷の狀況、それにまつはる種々な農民の悲喜劇、それから本年度の一割增產といふ目標についての見透しと、合作社の諸對策、農民の動向……さういつた事項に涉つて、折柄內地歸省中の理事長さんのお宅の應接室をお借りして、くはしく話していただき、大略は私の頭にきざみつけることが出來たのである。

けれど私は、興農合作社中央會の好意で、今までの出荷督勵工作が增產奬勵工作に切換へられて農村工作が行はれてゐる筈だから、その狀況を見てくるやうに……との話で、これは私の希望とぴつたり一致してゐるので、實は私は長期滯在を目論んで、藥品なども用意して、少し勢こんで出てきたのであつた。

もはや一時間もすれば日没は近い、正午ごろは、事務室のカウンターの向ふ側には、田舍から出てきた農民が屯ろしてゐたが、いまは人影もなく、事務室も退社の前の整理ぐらゐでひつそりとしてしまつてゐた。

K理事のお話の、いまは先きに出荷して一部綿布の引渡しの未了だつたものを交付してゐること、近く奉耕貸款がはじまるので、その準備についてゐることなどといふことから、增産奬勵工作といふものが、どこかへ吹きとんでしまひ、つまりは私の身の處置がつかなくなつてしまつたわけ。

「今夜はお泊りですか……」

K理事がさう言はれるのにも、どうにも形のつかなくなつた、そして泊つたところでもはや何も私の思ふやうな期待がひらかれさうもない樣子だ。

「さうですね……」

煮えきらない返事が出てしまつた。とに角私は、滿系の職員、陳さんに會ひたいと思つた。

K理事が出てゆかれると、暫くして陳さんは茫漠とした大きな顏を、やさしく笑ませて近づいてきた。

五年前、一度文通しただけの陳さんを賴つて大連から綏化に出てきたことがあつた。

「あれは、康德六年でしたね」

うなづいて陳さんは、大きな顏をくしやくしやとやさしい微笑をたゝへてゐた。

「いまKさんから種々お話をうかがひました」

綏化でも農民の多くは、國の要請に應へて、いさぎよく收穫物を出荷してゐたのである。一部には自家消費の分は勿論、今年の濃厚馬糧、種子用の分まで、一應出してしまつたといふ、私たちが襟を正して聞かなければならない、涙ぐましいやうな農民の姿も決して少くはなかつた。私の質問に、

「マアいまのところは、なんとか持つてゐるものから糧穀を融通しまずし、それに馬鈴薯の殘りで喰ひつなげますし、春先きは白菜の收穫がすぐですからそれを喰べ、六月になれば馬鈴薯が出來、直きに包米も熟りますから……」

私はこの言葉にすがるやうにし、胸をひらけさすことが出來た。

たゞ優良種子の配布といふことが、むづかしい問題のやうであつた。普通農家では包米

なども穂についたまゝのものを保管して種子用に當ててゐる。これを脱穀して出荷してしまつてからのものでは發芽率が悪いし、また小麥でも穂についたまゝ保管したものの方が發芽してから病害が少いといはれる。いづれにしても出荷されて、合作社で各農家のものが混合してしまつてから種子用として配布したのでは品質の低下は明らかである。

來年度はかういふことのないやうに、合作社では各屯子の興農會毎に、共同採種圃をつくらせ、種子用の分は確保させるやうにするといふ。

陳さんはいま信用部の主事をつとめてゐる。さつきK理事の話の中でも我々が貸款に出て、二十圓借用を申込む農民に十圓で我慢させるのには、口を酸つぱくして話してやつても、尚不滿顔である。ところが陳さんだと二十圓の申込みに五圓しか貸してやらなくても農民はニコニコしてかへつて行くと、一つの比喩を語られたのが思ひ出される。

ふと陳さんは、

「いま實際農場のNさんが見えてますがお會ひになりませんか……」

私はぜひに、と望んだ。

ひびくやうに元氣にNさんは入つて來られた。黑い滿服の綿襖を着た、五十前後の年配である。名刺には「濱江省安達縣正亞街副街長」といふ肩書があり、それがペンで消されて、「綏化興農合作社實驗農場」と書きこまれてあつた。

「去年一年やらしてもらひましたが、どうも一年の成績では、成果として云へるものはありませんよ、在來農法を一通り見るだけでも一年はかゝりますから、どうして一年間のことで何とか、かとか、云へるものですか、……」

語られる言葉は、聲から出るのではなく、腹からのやうに、よく透つた。

「それだのに昨日は引つぱり出されて、たうとうお喋べりしてしまひましたが……」

昨日綏化合作社の興農會長會議がありその席上でのことだつた。

「どうです、お急ぎでなかつたら、農場に來られませんか、ゆつくり今夜お話しませう、またいろ〳〵聞かせてもいただきたいと思ひますが……」

私の望むところだつた。やがて陳さんは立つて、札束を持つてきた。

「農場の今年の經營基金ですよ」

Nさんは、短い坊主刈りの禿げ上つた額を下げて、それをふところにした。

「一寸一里ほどありますが、貴方歩く方はどうですか……」

歩くのは私の望みだつた、スーツ、ケースには捲き脚絆も用意してゐた。けれど陳さんの手配で、合作社の馬車が貸してもらへた。

「日本馬の一頭立てで、夕風を切つて進むと冷めたさが外套を通して泌みてきた。

私は農は、天惠、地の利、これに人力とこの三つのものから出來てゐるもんだと信じてゐます。增産といふことは決して今日始まつたことではなく、百姓をやる以上、增産を願はないものはないでせう。それがさうならないといふのは、どこかに無理があるからだと信じてゐます。滿洲の農業は天災が多いと言はれてゐますが、私はこの天災には必ず意味があると思ふのです。天災に道理のないことはないと信じてゐます。」

車上に襲ひかゝる寒氣に齒向ふやうに氏は叫びつづけた。

「もし滿洲で五年豐作が續いたら、地力は全く減耗してしまふ。天災は地の利に目ざめない農民に對する警告だと信じます。地の利を得てゐながら、これにお返しすることを知らない農民の掠奪に對して、天は、天災を以て訓へてゐるのだといふ風に私は固く信じてゐます。そして今こそ滿農が、天災について目ざめるときだと思ひます。これにはどうしても興農の基礎が確立されなくてはならない。かういふ風に私は考へてをります。」

馬車は城内に入り、街を横斷して進む。眞向ひの風に、私はうすい外套の襟をたててゐたが、身内の冷えに震へを感じた。

街を横斷しきつて、また城門を出ると、ひろい一望の畠である。出たすぐは一面に白菜の畑の跡がひろがつてゐる。

「この邊は、さかんに街の連中に盜まれます。ひどいもんですよ」

馬車は二つに別れた道の左に入つてゆく。

Xさんの屯子にも二軒、盜み專門みたいなものがあるといふ。

「阿片癮者だけはダメです。良心を失つてゐるから、これは犬猫にも劣ります。私も隨分苦い目に合はされましたが、これだけは救ひやうがないです」

行手に木立の下に屯子が近づいてきた。

「私のところでは、娘二人とも滿系の國民優級學校を卒へさせ、息子は優級を出て、高等國民學校の鮮系部へ行つてます。私は大して滿語が出來ませんが、お蔭で娘が通譯です。よく人から日本精神がどうの、かうの言はれますが、日本精神といふものは、そんなことで簡單に消えるものではないと思つてます。この血の傳統といふものはもつと強いも

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

のです。」

私は、このチョボ髭をつけ、眼鏡をかけ、額の禿げ上つた五十前後の小柄の人が、滿洲でも日本人として極めて異つた環境に在り、しかもそれが自らすゝんで入つていつた世界であるだけに、ふかい興味を覺えていつた。

「しかしいつか、新京に農場の報告に行つたとき子供たちも皆んな連れていつたのですが、家の娘たちには着物一枚作つてないので、若い女の人を見ると、一心に振返るので、親として何か責められるやうなものも感じましたが……」

私は無躾な質問が出來なかつた。

「上の娘ももう二十ですし、そろそろ結婚が惱みです」

馬車は部落に入つた。

「コレが屯子での一番大地主です」

黑い木塀に圍まれた家だつた。その隣りが國民學校の一棟。

やがて農場の白木の門の前で、馬車は停まつた。そこで麥稈の山に手をかけてゐた男が、Nさんに聲をかけた。

直ぐ引かへす馬車の馭者に、Nさんは愛想よく禮をいつて、先に立つて木戸を入つた。中は院子になつてゐて、樣々な乾莖の山が左側に積まれてあつた。右側に平行して、四軒房子ほどの平家が一戸建つてゐた。中央のドアを入ると、直ぐ左がさゝやかな事務室風になつて、机、椅子、本立などが置かれてあり、壁ペチカを隔ててその奥が四疊半ほどの床の間のある客間、通路を隔てて右へ入ると左側が臺所、風呂場、便所となつてをり、それに添つて眞ン中から壁を隔てて、細長い八疊ほどの居間に當てられてあつた。つまり事務室、居間が院子に向つた南窓に在り、客間、臺所、風呂場、便所の一聯が、北窓に接してゐた。

疊の敷かれた客間には一物も置かれてなく、周圍が滿人の屯子だけに、くきやかに閑寂な雰圍氣をたゝへてゐた。

「さア、どうぞこちらへ……」

居間の空氣は、ポツと暖かつた。細長い部屋の隅で床に就いて居られた奥さんも起きられた。十六歳の坊ちやんは、訓練服で滿語の辭書のやうなものを備へて勉强してゐた。

そこへ姿を見せた上のお孃さんに、

「さア、これが今年の經營費、これがお前の月給……」

無造作に札束を出してゐた。上のお孃さんは農場の日々の會計を集錄してゐる。

「どうもむづかしいんですよ、個人別の主食の量まで出せといはれてゐるんですから」

火鉢を圍んで坐つてからNさんはいつた。

窓の外は、うすい青い夕闇がたゞよひはじめてゐた。屯子の中のたつた一軒の日系の家、そしていかに誘はれたからとはいへ、ヅウヅウしく押しかけてきた私自身、緣といふもののふしぎさに、しづかな夕闇に包まれた家の中で、私はともすると言葉を見失ひがちであつた。やがて夕飯の御馳走に預つた。御飯はお膳の中央に洗面器に盛られておかれた。食事がすむとNさんと私は火鉢に向ひ合づた。

部屋にはランプが明るく燃えてゐた。

「向ふの壁ペーチカを焚きつけるやうにして、それからもう一つのランプのホヤを×のところから借りてきておくれ」

Nさんに言はれると、上のお孃さんは暗い外へ、滿人の家へホヤを借りにいつた。

やがて、俄かにNさんは、居ずまひを直された。家族の方たちも坐り方を正してこちら向きになられた。ふと私とNさんと向ひ合ひ、Nさんが横にされてゐた、恐らくこの部屋で一番大きな調度と思はれる洋服簞笥やうのものを、眞中から開かれると、それは立派な佛壇で、開かれたと思ふと、いくつもの、お燈明が灯され、Nさんの口から朗々と誦經が稱へられた。それは般若心經ではなかつたかと思ふ。

その朗々たる誦經をきいてゐると、汚辱に滿ちた、陋習の根ぶかいこの滿人屯子の中で、Nさんたちが、朝夕淨められてゐるものがわかり、この淨めが、この家より發し、いつか屯子を覆ひ、村、縣と及ぼしてゆくであらうことが豫見されるものさへ感じられてくるものであつた。

八時ごろであつたか、私は客間に招じられ、Nさんと火鉢を間にして胡座した。室内は冷え冷えとしてをり、まだ壁ペーチカは暖んできてゐなかつた。

床の間には左の一軸が掛かつてゐた。

農清規　笹原仁太郎書

一、農は即ち生活それ自身なり

一、農生活とは人が他のいきとしいける大自然を愛する事也

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31lines

一、農の生産に依存して國は興るに非ず農の存する處即ち國存する也

Nさんの話はまづ便所から始まつた。

滿人の野糞は上からみてこれほど汚ないものはない。ところで日本人の便所は下から見たらまた汚ないものだ。私のところでは、小便所も大便所も各々一箇の石油罐を備へておき、日々のものを毎日運び出して土糞をつくつてゐる。だから毎朝便所はきれいになつてゐる。農をやる以上地力の確保といふことが第一條件だ。（現に康德七年に於て綏化縣では開墾當時から約三〇％地力減耗してゐるといふ。「興農」第一卷第一號）

少くとも人間の喰べ殼、排出したものは地に返すべきだ。大體農家では生産の三分の一が自家消費で三分の二が出荷して地に戻つてこない。國民運動として喰べたものは土地に返すことを主張したい。そこでまづそれを自ら實行してゐるわけだ。――農業生活はムリをしないといふことが原則であるべきだ。

毎年舊正前小作契約がきまるのに、今年ははかばかしくいつてない。これには七、八年の雹、寒害、九年の旱害も影響してゐようが、それがといふのがさつき馬車の上で話したやうに、天が天災を以て農民に地に返すべきものを蔑してゐるとみるべきだと思ふ。

――Nさんが煙草に火を點ける言葉の途ぎれに、居間の方で家族の方たちの談笑がきこえた。靜寂の中でそれだけがひびいてきた。

またNさんは語りつぐ。

賣るものが安く、買ふものは高い近ごろ、他から勞働力を仰ぐと、一晌當り、三〇圓から七〇圓の損になるといふ例もある。賃面積を經營するほど負擔が多いといふことになり、小作を歡迎しなくなり、小作人は出來るだけ自家勞力で經營出來る程度にしたがる。地主はまた熟練した手の多い小作人ほど歡迎し、一方糧食の豐富な地主のところに小作人は搬家してゆく。以前小作人の望んでも得られなかつた小作契約の長期化は、今日では地主の擁護となり、地主側の望むところとなつてきた。

この實驗農場の創立といふものは、元來關東軍の御計畫で、滿洲の標準農法を確立しなくてはいけないといふところから、幸ひ合作社には農事共勵といふ業務があるので、合作社に經營が任されることになつた。

まづ農民を指導する實力をつけるといふことが第一で、そのためには在來農法を一通りわきまへ、そのいいところ、悪いところを知るの上で將來の農法をいかにすべきかと

いふ問題の解決をつけるやうにしてゆく。

從つて第一の目標は、優良農具の普及、いま當農上最も大きな惱みになつてゐる勞賃問題を、機械化によつて、解決しなくてはならない。

第二には、今までの掠奪農法を、愛國農法に轉換させる。そのためには、五年輪作とし、今までの三年輪作、大豆、高粱、粟に小麥、スイートクローバーを加へて、地力を維持させる。

そこで第一のためには機械を完全にこなす人が必要である。しかも對滿農指導であるからには、滿人の技術の體得者を掴む方が、普及力は強く速い。そのために農場には昨年黑河省瑷琿からロシヤ式農法に慣れた農民を、ここに三戸、拜泉の實驗農場に三戸迎へた。

ところでそれだけのことで完全に目標が完遂されるかといふと、第一にいかに優れた機械農法であつても、立派な「人」、立派な農民であることが大切だ。昨年の私（N氏）の仕事は、瑷琿から迎へた三戸の農民を養育することで終つたといふことになる。――では立派な農民とは何か、これはいろ〳〵說はあらうが、私は「農とは何か」これを完全に認識したものといふことになると思ふ。私は農とは――

「道理に素直で、ムリせず、すべてを育成すること」

これを完全に實踐したものが眞の農民だと思ふ。

「アアなにが、瑷琿の農民に缺けてゐたかと云ふのですね。」――まづ人間的な缺點をいふと、止むを得ざれば働くが、出來れば他人を働かして自らは働きたくないといふ根性です。ことにここにくるのを指導員として迎へられるのだと省の方から言はれてきたせいもあり、自ら苦力の先達になる、これを嫌ふ。指導者だから苦力の眞似をしないといふ腹です。そこで私がまづ先きに起つ、そのためこの屯子に入つた當時屯のものは、私を半島人だといつてきかない。しかし私が先きに起つと、例の指導者たちも親方がやるなら、沒法子でついてきた。いふまでもなく勤勞を尊ぶ、これが立派な農民でせう。

技術の方からいふと、地力維持といふ觀念が全くない。瑷琿邊りでは、馬糞は江に捨てゐた。だから土糞だとか、緣肥栽培といふことが、彼らの頭にピンと來ない。

また北滿では春の短い間に播種するので、どうしても耕起を無視する。除草と中耕でその補ひをつけてゐる。その點播種の速かなこと、除草培土を良くすることは、或ひは世界一かもしれない。ところが收穫の方は世界で一番惡いかもしれない。黑河省では、小麥、

燕麥が主作で、撒播してゐたから、除草、中耕、培土の觀念が彼らにない。これで困つた。まア昨年は、完全に雜草に敗けた。私も一時は、よつぽど除草人夫を傭ほふかとまで考へた。けれど除草觀念のない彼らの前で、苦力を入れたら、永久に彼らに除草について目覺めさすことが出來ない。そのため完全に雜草に敗け、收穫はみじめだつたが、つひに彼らに除草の重大性に目覺めさすことが出來た。彼らが自分から、來年こそは除草をしつかりやらうと言ひ出したのです。

除草觀念のない彼らの前で私は、天氣の日は鋤頭を使ひ、雨の日は手で草をかきむしつた。家のものたちはアミーバ赤痢にかゝる、さういふ中で、雨の日ふんどしまで濡らして除草した。天氣の日は二千米の畝を三回歩くと六千米、そのころは目が眩んできた。その中私もアミーバ赤痢になる。畠と便所の間を行つたり來たりするといつたみじめさでした。お蔭で三人の指導者たちも今では私を中心にし、何でも言ふ通りになるといふところへこぎつける事が出來た。

「この屯子は、林家園子といひますが、えゝまだ部落工作といへるほどのことはやつてゐませんが……」

私はまづ農場を良くし、自然に周圍の者が目をつけ、眞似をしてくるといふ道をとつてゐます。大體八〇戸在る中で、勤勉な農家は、僅かに一三戸位のものだ。去年入屯した當時は部落の空氣は排斥的だつた。私はまづ、

「私の出來ることなら何でもしてやるから、言ひつけてくれ」と言つた。するといろ〳〵利用しやうとしてくる。それを一切批判抜きでやつてやつた。もし批判的に受入れると、決して後はうちとけて來ない。――縣公署へ行つて阿片臺帳を貰つて來て欲しい、病院で病人を診てもらつてくれ、皆んなきいてやる。いかに利用するか……で寄りついてくる。これに仕へる氣持でやつてやつた。何でもして貰へると彼らが感じるところに、私への信頼が生まれてくる。

よく人は、溫情主義はいいが、利用される怖れがあると言ふ。いよ〳〵といふ一點で儼然たる態度をもつてさへゐたら、利用されることを怖れることはない。これを怖れてゐては、決して指導者にはなれつこない。最後に誠だけは決して利用されぬ。むしろ寄りついてくるのはお客樣で、來ない風の者は困るといふことになつてくる。

私はこの農場を中心に、日滿一體の農を中心とした理想鄕、樂天地がつくりたい。この

屯子では去年の十一月中旬に、契約出荷は一〇〇％完了し、その後一〇五％まで達してゐる。

ここに來て驚いたのは、農家の負債だ。そして負債整理といふことが速急の問題と思つた。十年前三〇晌の畑をもつてゐた家が、現在は、九晌しかなく、それが一千八百圓の借金の擔保に入つてゐる。そして家は五百三十圓の擔保になつてゐる。その借金の生まれた基は僅かの小作料が天災で不足したとき、證文を書いた。利子は年三割六分だから、證文き換へてゐる中に、一千八百圓といふ途方もない金額になつてしまつた。それが三人兄弟で一人は區長をしてゐるといふ家だ。勿論證文を書いたのは文盲の親の代だ。

面白いのは、二軒房子で、その一間を借りてゐる方が、いつの間にか、その家の持ち主になり、元の大家を追ひ立てる。これを調停してやつた。―まア滿農の誰でも描く夢は、金が出來たら、町に住んで遊んでくらすといつたところだ。（康德七年、綏化縣の負債經營農の一戸當りの負債額三百圓强、不在地主の所有土地、縣下總面積の約五〇％强。「興農」第一卷第一號）

Nさんの話は、次第に情熱をはらんでくる。もはや御家族の居間も寂靜まれたらしく、ひつそりとしてゐた。四邊寂とした中でNさんの語がひびける。

「農場の今年の經營ですか、さうです今年が第二年度ですが……」

まづ自己、自家の都合を主にした經營體から、國家本位の經營體にうつすといふことが前提だ。そこで在來農法のみに賴つてゐたのでは、國家の要請にも副はないし、自家消費としても不安定といふことになる。そこで、國の要請を十分に果たし、尙自家の安定をも達しうるといつた營農方法の實驗をやるといふことが必要になつてくる。そしてその成果を四隣に普及せしめる。

昨日の興農會長會議の席上で、柄にもなく、また僅か一年の實驗でをこがましいことでもあつたが、ぜひともとのことでお喋りした。

まづ私は、今滿農が四つの惱みといふか、不安といふか、さういふものがあるはずだ……と冒頭し、

（一）今年は一割增產が要請されてゐる。特に北安省としては二割增產が望まれてゐる。しかし適切な增產手段が十分講ぜられない場合、果して增產し得やうかといふ惱み

（二）昨年綏化縣として九四％の出荷を、旱害、洪水といふ惡條件の中から果たし、殘

つたもので、果たして出來秋まで喰へるか、馬糧、種子も確保されてゐるかといふ點

（三）一晌五十圓内外の營農損失を見る昨今、資金不足の憂ひ

（四）將來に對する漠然たる精神的不安

どうか、これらのことに惱んでゐるかゐないかと云つたら、滿場のお百姓が「是々」といつて拍手した。

そこで私はこの四つの不安について解決しうる示唆を與へようとした。

第一の增産は、大體農産は、

作業×(天力＋地力＋人力＋畜力)＝生産

されるものであるから、增産のためには、

天力＝天意に從ひ天災をのがれる、

地力＝地力を增して沃土となす、

人力＝農生活を安定せしめて精農力を增す、

畜力＝役畜を愛して畜力を增す、

これによつて初めて增産が可能となる。

從つてそのためには、まづ深耕（プラウ）によつて地力を還元せしめ雜草を根絶せしむ。

土糞を殖やし、優良種子を確保する。このためには興農會單位に共同採種圃を經營する。適期適播を實行する。適期中で出來るかぎり早く播く。中耕、培土を念入りにやる。さらに收穫を適期にし、地こぼれを少くする。大體收穫がおくれ勝ちで、二割近い地こぼれを見てゐるのが現狀だ。また割當作付の範圍で、出來るだけ一晌當りの收穫の多いものをつくる。

今年の天候は斷然いい、これはその週期がきてもゐる。豐作まちがひなしだ。綏化縣收穫物出荷は康德五年十二萬トン、同八年六萬九千トン、同九年九萬二千トン。

今年は必ず康德五年の豐作が再來してくる。大體出荷督勵に骨を折るといふのがへんなことだ。農家は自家で消費して餘るものは賣るより處分がないのだから、出荷督勵よりまづ增産だ。その增産のためには、興農だ。つまり出荷、增産よりも、根本問題は「興農」のいかがにある。

二、第二の民食、馬糧、種子。

國から要認の出荷を確保するためには、今までと同じものを喰べてゆくつもりでは駄目だ。それには民食の確保として作付の許すかぎり、一晌から十倍の收量のある、馬鈴薯をつくる。普通作物は平均一トンの收穫だが、馬鈴薯は十トンとれる。今までの作物では、一晌で三人しか喰へないが、馬鈴薯にきりかへると、十五人喰へる。そこで馬鈴薯民食のための、使用法の研究が必要となる。一つの方法として、まづ馬鈴薯を細く切つて乾燥させて磨りつぶす、さらにこれをしぼると汁は澱粉となり、アトはこれを練つて、今までの、燒餅にひとしいものがつくられる。

馬糧は、大體今まで一頭のため二晌分の粟殼と、一晌の高粱、豆粕が要つた。（克山縣の調査によれば、一部落に於て飼料作物の作付面積は、部落の全耕地の二五％に及んでゐる。近藤康男氏「滿洲農業經濟論」）價格にして三百五十圓から四百圓程度に達した。斤數にして一萬斤、これをデントコーン（包米の一種）にきりかへる。すると、一晌の作付で馬三頭分の飼料となる。價格にして七十圓程度、斤數にして三萬斤から五萬斤におよぶ。これを青刈してサイロにより、貯藏設備さへつければいい。

種子は、この農場で、全滿を漁り、必ず適地適種を探し出すつもりだ。これによつて二割增産の種子を撰種する確信をもつてゐる。

第三は營農資金の問題だ。大體農家經濟は三五％の馬糧、三五％の雇傭勞賃、一二％の食糧、一二％の燃料、雜六％から成立してゐる。まづ前述によつて馬糧が三分の一ですむことになり、優良農具によつて雇傭賃銀の大部分が解消し、馬鈴薯を大きく民食に當てることによつて、食糧問題が解決され、從つて營農が樂になり、資金は專ら優良農具の入手に振りむけられやう。

少くとも小麥は秋耕、撒播で立派に收穫が上る。但し昨年の經驗では、粟のプラウ耕起は、失敗だつた。耕起のアト播種に間があつたため水分を發散さしてしまつたからである。

優良農具としては、カルチベーターは一頭で二晌、リーバー（刈取機）は十八倍の偉力を放つた。スレツシャー（脫穀機）も五倍の力があつた。リーバーは早速附近の農民が羨しがり、ぜひ欲しいと言ひだした。

即ち資金關係に於ても、農產物を高く賣つて收入を增すといふことは不可能だから、支出を減らすといふ點に力をそそぐ。

第四の、將來への不安、これは畑作への熱意を缺いてくるから恐ろしい問題である。この問題を解決するには、今までの自家本位から、愛國農業に轉換する。そこで最初にかへつて、立派な農民をつくるといふことが大切なこととなつてくる。

何度も繰返すが、今までの農法は、親（農民）が金持になり、子（地）は裸といつたやり方だ。まづ土地を大切にし、天災を逃れる工夫が考へられねばならぬ。

土糞で堆肥をつくり、綠肥栽培もとり入れる。出來たら國營の肥料會社が欲しい。農民に綿布を配給するなら、まづ土地へ返すものを返さなくてはいけない。三十年前高粱は九石、十石の收穫があつたのに、今では良くて七石、去年當りは平均四石だ。——土地はものを言はない。だから農民はこれに大きな負債をしてゐるのに感じてゐないから、この有樣となつたのだ。土地はそこで天災を加へて、反省を促してゐる。天災のあるとき、人は地力にムリがないか、反省すべきだ。

——筆者はたまに質問しては、たゞ話をきいてゐるばかりだ。しかしまづN氏の熱にうたれた。うつむいて、要點を覺え書してゐるうち、眠けがさしてきて、ふら〳〵とする。もう十二時近い、この邊から、お互ひに煙草を手にして雜談に入つた。

「指導原理といふものは完全に勝つことですね」

しかし負けたことは謝まる。若し指導者にして教へられるものがあるなら、心から教はる。科學的なもの、また在來のものでも良いものは素直に取入れる。それからNさんは俄かに微笑んで、

「私は、近所の滿農に盜まれてゆくやうな種子をつくつてみたいと思つてますが……」

滿農から受け身でゐる。むしろ先方から攻勢に出てくる日を待つといつた方法によつてゐる。

「このごろ馬も力沒有ですよ、普通八百斤を車にのせて挽くのですが、昨年澄りせいぜい六百斤ですもの」

家畜も愛に出發するのが原理で、これを近頃は金儲けの對象にする傾向が強い、以ての外である。可愛がることに出發したものが初めて立派に育て得るのだ。

實際のところ、百姓になりきつた人が、縣にゐ、省にゐ、中央にゐてくれたら、政策の空廻りといふことはないだらうが……。農民は畑にしか關心がない。それに向つて世界大地圖を擴げて、喋べつてゐることが多い。農民は眼玉を白黑さしてゐる……。

この邊まできいてゐる中に、十二時をすぎた。Nさんは居間に引揚げた。私は壁へーエカに添つて延べられた蒲團の中にもぐり、ランプの火を消しとめた。

（十八年六月）

北の旅から

この度は、興農合作社中央會の御好意で、綏化、安達の合作社を訪ねていろいろ農村事情についてお話をうかがふことが出來、その上、綏化の合作社が擔當してゐる郊外三杆の實驗農場に泊めてもらひ、農場主さんの農村更生についての力强いいくたの抱負をきかしていただいたり、安達では相當の距離のある第一次義勇隊臨安開拓團に泊めてもらひここでも希望に溢れた團の實情をみせていただいた。

懷へば五年前、當時大連にゐた私は、會社を休んで自費でもつて、綏化の農事合作社を訪ねていつたことがあつた。そのとき無名の私は、さういふ特志をもつてわざ〳〵押しかけていつたのにもかかはらず、合作社では大して滿足の出來るやうなこともきかして貰へなかつた記憶がある。このたびの合作社中央會の好意と想ひ較べて、まづ私は今昔の感にたへないものがあつた。—それとともに、なにかふるひたつ想ひに、胸をふさがれる一瞬があつた。

私は滿洲農村の實際にふれさせてもらふといふことよりは、農村工作についてゐる合農社職員の姿に强い魅力をもつてゐた。といふのは、いかに私がふるひたつて、滿農の社會だけを中心にして作品を書かうとしても、そこに一枚下された幕が、一層私をもどかしいいらだたしい想ひに驅りたてるだけであつたからである。いへば血と傳統との、いかんともしがたい相異であつた。

だから私は、はつきりと國家意志を體した合作社職員の、農村工作を通じて、その立場から、滿農の姿をのぞいた作品を、このたびの旅行の收穫としたいと期してゐた。

綏化の合作社では、出荷は一通り終了し、まだ引換へてゐなかつた綿布を、田舍から出てきた農民に配給してゐた。一方近く農村に向つて貸出する金融の下準備に奔走の人たちは追はれてゐた。

五年前訪ねたときも會つた滿系の陳さんは、いまでは信用部の主事をつとめてゐた。作

村へ出て工作するには、やはりどうしても滿系の職員がいちばんですよとK理事は、さう前置きして話してくれた。

例へば百姓にですね、二十圓貸してくれるといふのを我々の場合だと十圓でもつて我慢させようとすると、口を酸つぱく話しこんで、やつと十圓にとめる、すると百姓はまだ不滿氣でいつまでも、なんだかんだと訴へてゐる。ところが之を陳さんがやると、二十圓といふ希望に對して陳さんは、五圓しか貸してやらない。それでもつて相手の百姓はニコニコ顏なんですからね、面白いもんですよ。

このK理事の言葉は、ふくみ多くいくたの教訓を傳へてゐた。

農民といふものは、手元に糧穀を淺すと、高が多ければ多いだけ喰ひつぶしてしまふといはれる。然し今年は、滿農も土壇場まできりつめて出荷し、自らの食糧は勿論、今年作付ける種子まで出荷してしまつたものも少くないといはれる。至上要請である國家の要望に應じた滿農のこの赤誠を我々は忘れてはならないであらう。

種子まで出荷した農民たちは、やがてそれの交付されるのを待つてゐる。しかし一度合作社の倉庫に收められた糧穀は、いろんな農家のものが混合して保管されてゐる。だから

それが種子用として配布されると、自家で種子用として殘すものよりは、品質からみて下つてゐることはいふまでもない。

これに對して綏化の合作社では今年は各部落ごとに結成されてゐる興農會を單位にして、共同採種圃を經營させ、明年に備へる種子を確保させやうとしてゐる。これはぜひとも全滿的に實施されて欲しいものである。

完全除草をすれば一割の增收はうたがひないといはれる。しかしこの數年來のやうに夏季除草期における勞賃の昂騰では却々完全な除草といふことも覺束ないことで、さういふ高い勞働力を雇傭して、除草につとめると、從つて營農費が嵩んできて、一晌（七反二畝）當り、三十圓から、七十圓程度の損失となつてくるといふ。今のところ農產物の價格がおさへられてゐるからである。

一方で學生、生徒を動員して、除草勤勞奉仕といふこともいはれてゐる。これに附隨して問題となるのは勤勞奉仕者の食糧をどうするかといふ點であり、また除草作業は一種技術を要するものであり除草しつつ間引もせねばならず、素人では根をたち切るといふ怖れもあるから、習熟が一つの條件となつてくる。これらの點の解決がつけば、勤勞奉仕は歡

迎さるべきものであらう。

公農式除草機の使用も、昨年來興農部をはじめ關係機關から奬勵されてゐる。

しかしこれは「除草機は人間勞働を大いに節約するけれども除草作業が完全でなく、收量を減じ、收量を維持するには三回の除草のうち、一回を在來農法によるか、各回除草機使用後鋤頭を用ひて除草機の缺點を補はねばならない。之を收支計算に於て見れば、勞賃、家畜飼養費、機械の費用、收穫物の價格によつて左右されるが、三回の除草中、一回だけ在來農法によるものが、勞賃を節約すること多き割合に收量の減少が多くなく、有利とされ、機械專用が最も不利である。除草機のみによつては完全な作業ができないことを意味する」（近藤康男氏「滿洲農業經濟論」）と指摘されてゐる。

滿洲の農業とは、雜草との戰ひであるといふ。除草の如何が收量を左右する。單に完全除草を號令するのみでなく、この問題に解決を與へてやり、これを契機として農民の營農面にふれてのみ、はじめて我々は出荷についても、聲を大にし得るわけであらう。營農指導に際して、出荷のみを强調することは、農民の思想に決してよい影響を及ぼす事が出來ない。

除草の問題は、安達の合作社で理事長のお話をうかがつて一層鮮らかに浮びあがつてきた。

安達縣では、割當の八五パーセントしか出荷成績は上らなかつた。一方に旱魃といつた天候の惡條件があつたが、それのみではなくこの地方ではアルカリ性の野草地帶が多く、除草期に入つて農民は、畑の除草を十分にせず、むしろ現金收入の多い、馬糧としての野草刈りに、沒頭して、畑の除草不十分といふところから減產をみてゐる率がかなり高いといはれる。尤も馬糧になる野乾草は、安達、肇東の二縣で全滿の三割を占めてゐるといふのだから、從つてこの方面での要求も決して無視さるべきではない。

四月八日の新聞では、馬政局が全滿農村に呼びかけ野乾草の增收運動を展開することになつたといふことが傳へられてゐる。

「馬匹が大豆や燕麥等主要糧穀を飼料として使用、その量も相當のものとなつてゐるのでこの無駄を無盡藏にある野乾草の增收によつて解決しよう」「全滿を三區乃至四地區に分けてここに野乾草增收運動本部を設置」「今夏七、八月頃の野乾草の最も優良な時期に全滿農家に呼かけ刈入れを行ふ」即ち增產のための完全除草の要求される同じ時期に、ま

た一つ負擔が農家にかぶさつてくるわけである。

愚考するところでは、いくたの難點のある學生、生徒の除草勤勞奉仕を野菅草の刈入れに振向けるとか、或は野草の特に多い地帶には特に優先的に除草機を配給するとか、考慮される必要があるのではないだらうか。

T理事長はきはめて屈託のない氣輕な感じて、協和服ズボンの膝にはミシンの繼ぎ跡を微塵に當ててをられる。

「滿人の百姓といふものは、一ぺんいつたことは骨の髓まで沁みこませて忘れない。出荷工作のときある百姓に、もう十瓲くらゐ出せるだらうとなんの氣なしいつた。それは輕い冗談のつもりで喋つた私も忘れてしまつてゐたほどである。ところがその夜宿に泊つてゐると、誰か訪ねてきて、會ふと晝間の百姓だ。實はどうしても私のところではもう出せないのだが、どうしたらいいでせう、といふ。考へてみるとこの男の家から、その宿まで三里はある、一寸いつた冗談のために男は三里の道を馳けつけてきた、實際うつかりしたことはいへないですよ」

「この邊の部落は古老にきいてみると、一番古くて三十七、八年前に開拓したものらしい。曠野に點々と屯子がつくられていつた。開拓者は五十晌から百晌、中には二百晌といふ地主になつたものがゐる。丁度親分、子分の關係みたいで、地主だからといつて、小作人をさうひどいことをするわけではない。小作は六割くらゐに當るかもしれないが、小作人が十晌くらゐ分けて貰ひそれが辛苦して二十晌くらゐの地主になつてゆくといつた者も多いんですよ」

T理事長は語りつがれる。

「さういふ小作人から上つた男が興農會長に推されてゐると、奇めさせてくれとさかんにいつてくる、字が讀めないので誤魔化されるからいやだといふ。そこでもう一度選擧し直すとまた成つてゐる。今度は全くの沒法子だ。かういふ人たちは安達から一歩も出たことがない、ラジオも知らない。

出荷がなぜ地主にこたへるかといふと、撈青に喰はせて廉い賃銀で働かす、ところがこれを金で拂ふと高賃銀になり、從つて高い農產物になつてしまふ。このごろでは食糧をもつた地主は強いですよ、ほんの煙草錢で零細農が傭はれてゆく傾向があるので」

安達の合作社では、八年の春から、模範興農會の育成に着手してゐる。採種圃、種子の

消毒、土糞の造成、造林、養豚、養雞、品評會などを重點的にやつてゐる。在來農法であつたが、今年からは一部にプラウも入れる。

自興村運動もいいが、村を單位にすると、區域が廣すぎて徹底しない憾みがある。一村一千戸位もあるから、どうしても義務的行事に陷りやすく、自興心が喚起されない感じが濃い。之を屯子を中心に自分のところはやるのだから、徹底させやすい。

增產のために、あれもやれ、これもやれといふ號令ばかり多いやうだ。確實にいいことなら農民は必ずやる。誰が增產を願はぬ農民があるだらうか。ところが增產のパンフレットがくる。文盲の多い農民には何もならない。一つの計劃性のある實行力をもつた方法によれば、滿洲の增產問題ほど興味を以てやれる仕事はない。現に安達の鐵道自警村は小麥を始め、殆ど皆滿農の倍の收獲を擧げてゐるといふ。

例へば種子の消毒といふ問題でもこれが徹底的に行はれたら、一割の增產は確實である。合作社で行へるのは、人、資材の關係などで、僅かに全縣の二割程度にしか當らないといはれる。

T理事長は「一體私は蒐荷といふのはどうかと思ふな。納稅にしたところで蒐稅とはいはない、これはどこまでも自發心に待つ出荷でなければいけないと思ふ」

いろいろ話を交してゐる間にも電話は鳴り、訪客がある。

ここでは早くも、七百二十噸からの種子を配布し（申込みの約四割）職員は皆貸款に部落に出てをり、もうそれも八分通り濟んでしまつてゐるといふ。ここでも私は職員の部落工作の實際についてみる機會を逸してしまつたわけである。

合作社の購買事業は統制品ばかりで、査定はこれを合作社で行ひ、村別、興農會別、個人別に割當てられ、豆油、白麵、鹽、豆粕は職員立會の上で配給し、種子は興農會長に任せて配給してゐる。

八、九年前から匪情が惡く廢耕地になつてゐるところも、七、八千噸あり、之の復活資金も考慮されてゐる。縣下に十五萬噸からの水泡子濕地などもあり、思ふにこの地帶ほど酪農農業に惠まれた地方も少いであらう。合作社が農事共勵といふ、眞に農村指導の方向に十分に腕を振へる日が一日も早く來る日を、農民は自家消費以外の農產物は賣るより方法がないのだといふ鐵則に鑑みて、出荷は結果としての現象だといふ狀態に立戻らす日を齎さねばならぬ。

（十八年五月）

鐵道自警村・點描

五　家

汽車を下りて、居合せた驛員に、

「自警村在那兒」

「いま村長が驛長室に來てゐますよ」

私は急いで行つてみたが、そこに日本人らしい人はゐなかつた。

驛頭の自警村の標識柱の矢は、黄いろ一色に彩られた畑の中、東の方の黝んだ林が丘陵のやうに泛んでゐる——方向を指してゐる。あの木立ちの一廓にちがひない、一人うなづいて大豆畑の中についてゐる小道を入つてゆく。一キロ半ほど行くと木立ちが近づいて、村の神社が見えてくる。部落から出てきて、神社を遙拜した人が近づいてきたので、深堀村長を訊ねると、いまの汽車で哈爾濱へ出たといふ。

「そこを入ると清水さんの家ですから、清水さんを訪ねて下さい」

若い人は、さう敎へてくれた。

その家の院子では、馬鈴薯の山をめぐつて、大ぜいの姑娘や小孩がしきりに、麻袋、カマスに詰めてゐる。計量器のところには滿人の男たちが二、三人働いてゐたが、日本人は見えない。暫く立ちどまつて眺めてゐて、秤りの向ふ側にうづくまるやうにして目盛りをにらみ、計量のすんだ麻袋を搬んでゐる人が清水さんだとわかる。

「今年は作柄は申分ありませんでした。大豆が奉先一寸不調だつただけで——」

麻袋、カマスには、哈爾濱機關區何某といつた具合に、一枚づゝ名札がついてゐる。

「出來るだけ鐵道には出したいといふのが、我々の氣持ですよ」清水さんは手を休めようとするので、話は後でゆつくり伺ふことにして仕事をつゞけて貰ふ。

「このごろは、うつかり人も傭へませんよ、一日食はせて九圓、十圓といふんですからね、双城堡では、三日食事付、四十圓といふのがあつた」

清水さんは秤りをにらんで、「コーラ」「ブコウ」と、均量の正確を期してゐる。穴の開いてゐる麻袋を繕ふのも清水さんだ。

今年の作付割合は、全耕地二百陌のところ、普通作三、蔬菜一の割の由。

普通作の出荷割當は今年は八〇トン。

「去年も雙城縣の出荷は全滿で一位だけど、今年もやりますよ。殊に自警村は、開墾の滿農に範を示すためにも、早期出荷を斷行するつもりです」

全村十四戸、群馬出身の人で固められた五家自警村は、一致して御奉公を期してゐる。

「けれどどうせ農民は出來たものはどこかに出荷するのですが、近頃のやうに鐵道が自給農場とかいつて種々食糧獲得に努めてゐるのをきくと、もつと自警村を活用してもらひたいと思ふですね」

部落内を一人で歩いてみる。部落の背後に、五メートルほどの道路を中心にして自警村の畑が擴がつてゐる。畑の頂點に部落があるわけだ。

部落内はひつそりと靜まりかへつてゐる。ある小舍では驢馬が包米を挽き、年老いた滿人が世話をしてゐた。ロシア種といふ白い豚が仔を生み、鷄は二千七百羽ほどになつてゐる。

「まア今は何にも注文は出せないときですが、乳牛が欲しいですな」

さういつた村の人もあつた。

「群馬といふところは餘り外へ出たがらない所のやうに思ふんですが、奥さん、よく出てこられたですね」

清水さんの奥さんは、

「えゝ、もう身内親戚中の反對で、隨分迷つたんですが、うちでどうしても行くといつてきかなかつたものですから……でも今では來て良かつたと思つてゐます。」

舒蘭

こゝはもと四家房といつたところだが、縣公署が移つてきてから舒蘭と呼ばれることになつた。拉濱線の水田地帶である。

町は新開地らしい喧騒さで、主として半島人、それに滿系、日系が目立つ。驛前の道の二つ目を左りに眞直ぐ行き町並みの盡きた、丘陵に土壁に圍まれた部落が自警村である。

村長の熊谷さんの家を訪ねると、丁度新舊驛長の歡迎會へ出かけるところだつたが、暫く話しこむ。

ここの水田も今年は上出來であるといふ。

「去年は大方米を賣つた後で、晩くなつて出荷割當がきたので慌てましたが、今年はもうそんなことはありませんよ」

「鮮農が籾一粒、種子用まで全部出荷することを思へば、私たちの方は割當てだけですから……」

宿泊は順番になつてゐるさうで、やがて村員の家へ案内される。

この村からは、四名の出征軍人が出てゐる。陸軍には、留守宅、遠藤つねよさん子供三人、金野梅さん子供なし、海軍には佐藤政代さん子供二人、伊藤秋代さん子供二人。

「留守中は小作にでも出してゐるのですか」

「いやどうして、皆んな自分でやつてます、下手な男など顔負けですよ。まア播種や收獲のときは皆手傳つてゐますが」

「こゝでは、この町を相手になんでもハケます。その代り町から入つたものは、町へとられてしまひますから、かういふ所で百姓するのは、考へものですね」

夜、村長、副村長、庶務の方など前後して見える。

南瓜一段歩で三、四百圓の收益が上るのに、水田は一町歩で五、六百圓にしかならないといつた話なども出る。

こゝは、總面積六百町歩、山林三百町歩、既耕地百二十町歩、水田は六十二、三町歩で、一戸三町歩、の割になつてゐる。鶏は二千百羽ほどゐる。五家では今年の雛がもう玉子を生んでゐたといふと、驚いてゐた。

—朝雨が降つてをり、庭先きのコスモスの花が濡れてゐた。昨夜誰かが、前にも耕作地を變へたけれど今年はもう一度變へなくては……といつてゐたのが胸にのこつてゐる。今日は吉林鐵道の開通で具合悪くなつた部落道路の協同補修だといつてゐたが、雨でお流れになつたらしい。

黑山頭

驛を出ると、幾棟かの煙草乾燥小舍が建つてゐる。自警村の施設である。近くの屯子の女子供が繩に葉煙草をなひつけてゐる。これを小舍の室に入れ、下から焚く石炭で乾燥させる。火を焚いてゐるのは村員だ。

村長の松井さんも、小舍で作業してゐた。

畦いろしてゐた空が次第に冷えてゆく、作業のすむまでその邊りを歩く。部落は土壁で圍まれ、背後に菜園があり、後ろは柳河が瀨鳴りをひびかせてゐる。見てゐると、次第に部落側の崖を削つてゆく感じである。

村の用地は對岸にも半分ある。暗くなつてから大車で二臺、畑から葉煙草が採收されてくる。室から出された、既に褐色のパリパリした感じに乾燥した葉煙草はそのまゝ露天にさらされ、溫氣をとられる。

全く人の顏も解らない暗さになつてもまだ作業は終らない。部落からは牛の啼き聲が靜けさを破つてくる。

諦めて部落の方へかへりかけると、後ろから松井さんが走つて來られた。

八時近く、家族の方と一緒に夕飯を招ばれる。奥さんや三人の子供さんは、今日山城鎭の學校の運動會を見に行かれ、夕方の汽車で歸られたのだ。

お茶を飲みながら松井さんと向き合ふ。

「煙草はもう來年から止めたいと思つてゐます」

これだけ大規模にやつてゐることだけに、私にはすぐうなづけない。

「この地方で大分煙草をやるやうになりましたが、實はこの村が草分けなのです。それは煙草をやれば現金收入はいゝです。けれど煙草は土地に還元しませんから、土地を悪くするばかりです。企業的な氣分ばかり强くなるのも考へものですし、それに煙草は連作を嫌ふので、近所の滿人と土地を代へたりすると、一層土地を瘠せさせるばかりですから……」

私は今度の旅で、初めて土地を思ふ言葉を耳にしたのである。

「しかし中々一方的にも止められないものでせうね」

「さうです、合作社邊りも專門の人間を入れたり、それに合作社の手數料にも影響しますから、でも百姓は自分たち一代ではなく子孫に傳へるものですから、その土地を瘠地にはしたくないものです。さう思つて二、三年前から乳牛に力を入れて、いまでは少い人でも二、三頭多い人は七頭も飼つてゐますが……さア、もうこれもその中には飽和狀態がくるのぢやないでせうふ。牛の顏さへしてゐれば、何千圓といふんですから」

松井さんの言葉の裏には、眞に土に生きようとする人の、純粹な農への思慕が脈うつて

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled X 31 lines

ゐた。

「この村で八年間に四十三人出生兒がありましたが、死亡したのは三人です。それも流産やなにかでちやんと生まれた者で死んだのはありません。それに梅河口の滿鐵醫院は完備してゐますし、巡回衛生婦が廻つてくれますし……」

「改良農法もできるだけ急速に熟練しなくてはいけないでせう。局から北海道で學ばれた方が指導にきて下さいますが、どうも村員よりは若いせゐか、遠慮されてゐる風で、これぢやいけないと思ひますね。もつと强力に指導していただかなくては」

「どうですか、村をよくするには、村長が村員と殆ど對等であるといふのは……」

「さうですね、醫療にしても金錢關係も驛長が所屬長になつてゐるんですが、どうも驛長との間がむづかしいので」、

「どの驛長もかうした事業に認識があるとはいへないでせうし、殊にここの驛のやうに滿系の驛長さんではね」

「ここでは百二十四日で第一卵を生んでますよ。大體百三十日ですね。それにしても今の玉子の値段はバカ氣てますね、生産者からみると」

話は開拓團、稅金、特約收買人、入植當時と移つたが、話す松井さんも、聽く私もいつか體がしびれるやうに眠氣がさしてきてしまつた。

この春、岩倉政治氏ら文學者一行が自警村を見られて「自警村といつても驛との警備電話もないし、開拓團からみると、惡く都會擦れしてゐる」と言つたことがあつた。

しかし自警村の、治安上の最初の意義は完全に果されたものであり、いまや正しく第二次出發を開始してゐるわけだ。なる程自警村に、營農資金の形では與へられたものはなかつたし、交通便利のところから聞きこみは早く、又商品化に便利であるし、一方沿線だから早くから開墾され、土地も肥沃ではないだらうし、共同施設として大きな加工場其他は望めぬとか、人口の少いため教育方面でも他に依存せねばならぬといつた事情にあり、十町歩程度の限られた土地では、粗放經營では大したことはあり得ないのだ。

改良農法に速急に習熟し、又地の利による商品化經營も、自給自足を効率化した上でならいゝだらう。

と同時に望ましいことは、「滿人には負けない」といつた程度のことではなく、もつと研究慾を昂め、周圍の滿人が學びにくるやうな方向に進むべきではないだらうか。

それに共同作業、施設ももつと考へられていゝ、ブランコ、砂場程度の子供の遊び場や、自警村を墳墓の地とするやうな落着きを孕んだものなど。

「局から來て度々保育所などもすゝめられるのですけど、中々出來ません」

勸める人は、度々くる代りに、一週間位泊りこみで、なぜそれをやつてみせて、根を植ゑつけようとしないのだらう。それに農繁期の共同炊事なども、十五戸、二十戸程度の集團してゐる自警村などでは最もやりやすいことなのではないだらうか。

治安上から鐵道運行確保の必要で生まれた自警村の第一次の使命は果された。しかしもう一つの增産の據點、周圍の部落との協和（自警村自體の警備力は知れたものだ、周圍の部落との協和によつてこれを擴大强力化しうる）それに戰時鐵道運行時における使命については、未だ幾多の課題が自警村には殘されてゐよう。

（十八年十月）

村の聽書

哈爾濱の膨大なる都市計畫に基いて、現在耕作してゐる土地が、割合安い値段で買上げられてゐるやうである。

地價の安い高いは別問題として、眞に哈爾濱市が膨脹してきてどうしても、退つ引きならない事情に立ち至つたのなら、いかに己の血と汗を絞つて耕作した土地であらうと、農民は立退かないわけにはいかないであらう。

しかしながら將來の膨脹を豫想しての都市計畫に基く土地買收なら、相當程度の猶豫をおき、十分な宣傳宣撫を實施し、しかもその代價國內移住地に對しても行屆いた配慮がなされてほしいものである。

現在五百天地の土地が既に買上げられ、美事に耕されてゐた土地は草のほしいまゝに茂つた荒地となり、そこには、試育用の緬羊三千頭が放たれてゐるさうであるが、五百天地の廣大なる土地に僅か三千頭の緬羊では、見渡したところ曠い草原に二、三疋見える位にしか當らない。

所で今また更に二百天地の土地が買收されようとしてゐるとのことであるが、五百天地の土地に三千頭の緬羊が遊んでゐる實例を見てゐる農民は甚だ不滿の樣子であるといふ。

不滿を持つとは怪しからんといつてみても、實際に買上げられた土地が、雜草の繁るが

まゝに任され、放棄されてゐたのでは、そこに生活の根を下ろし、生命を擦り減らして耕作してゐた農民の人情を察したなら、彼らの不滿の聲も一概に聞き捨てにするわけにはいかないと思ふのである。

また北滿のある縣では、農家の二十日分の食料を除いてそれ以外の糧食は全部縣で買上げ、事後の配給は、その實際の家族數に應じて配給するといふ布令が出たといふ。所でさういふ術門の仕事といふものを一體に信用することが出來ないやうに長い間の過去の悪政から習慣づけられてゐる彼ら農民が動搖し出し、流言匪語がとび、中には隱蔽するものが出、しかもそれが縣の産業科などにしれて罰金をとられたりしたといふ者さへが出てきた。

昨年末から今春へかけての出廻り不振が何に由來するかといふことは、もう廣く論じつくされたところであるからここでは觸れぬこととして、兎に角他の地方に糧食の缺乏を來たしてゐる處のある限り、貯藏量豐富とみられる地方に於て强制買上げの方法をとるに到ることも止むを得ぬことであらう。しかしながら、僅かに二十日分の糧食を自分の手元に殘しただけでは、お役所仕事に信用を置いてゐない、或ひは置けないといふ一種の不幸な習性をもつてゐる彼ら農民が、動搖するといふのも無理がないといつた感じがする。それば かりでなく、北滿の驛と驛の間の距離の長い、その中間の奥地の部落などでは、糧食豐富の故を以て買上げられたばかりに、配給の不圓滑から、（圓滑でありうるとは絶對に保證出來ない）反つて糧食難に陷るといふことも想像され得る。

× ×

先日チチハルに近いある村に行つたところ、その村長の話ではこの附近の村は一體に皆んな貧困で困つてゐるといふ話だつた。それはどういふわけなのかと訊ねたら、事變のためだといふ。

事變のためだ、と言はれると、まるで僕にも日本國民としてその一億人分の一位の責任はあるやうに思へて思はずドキリとしたが、よくきいてみると滿洲事變のときの餘波が未だに祟つてゐるとのことだつた。日本軍に急追されて、馬占山軍が退却するときこの近郊の村から、在り金、糧食、家畜の一切を掠奪していつたのである。

そのために、農耕資金の缺乏、家畜勞力の不足による耕地の減退といふ結果になつて現れ、現にその村でも滿洲事變前に二千七百晌耕作してゐたのが、未だに七百晌位の耕作能

力しかもてないらしいのである。それで一方金融合作社からの借金も相當してゐる。

農家に與へたさういふ打擊といふものが、いかに深刻で、容易に脱却しがたいものであるかといふことを、マザ〳〵と見せつけられた感じだつた。

僕は時々思ふことなのだが、滿洲建國以前張軍閥政權時代に於て、政治、經濟的に人民に與へた、物質的・精神的・肉體的な罪惡史を、判つきりと作つておいたらどうかと思ふのである。滿洲建國の意義を說いたパンフレツトなどに於ても、極めて概念的に東北政權時代の惡政が書かれてゐるが、抽象的に過ぎる恨みが濃い。もつと具體性をもつた、例へば前記の村に於ける被害のやうに判つきりと書き遺しておいた方がいいと思ふ。今日滿人に、うつかり東北政權時代の良くなかつたことを說くと、反つていやあの頃の……

……と逆襲されることさへあるのだ。

しかし今日多少の行政上の缺陷がもたらすことの失政があつたとするも、多くは支那事變、歐洲戰爭の影響が齎らしたもので、失政といふも、滿人農村社會に對する十分な認識の不足に因るものが多いとみるべきで、張政權時代とは全く性質を異にするものであることは明白である。

この間の事情も、もつと判つきりと彼らに認識せしむるやうにした方が却つて將來のため好影響をもたらすものではないかと考へる。

農村に對する諸々の機關の宣傳をみても、宣傳が机上で考案され、新聞の上で空轉して終つてしまつてゐるやうな感じが實に强いのだ。宣傳こそまづ確固たる對象の認識、その心理の把握から出發しなければならないものである。

× ×

街村制が布かれて、村公所といふものも過去に於けるものより判つきりと、お役所風にはなつた。村長の質も以前よりはたしかに向上され、相當敎育ある人たちの就任をみるやうになつた。北滿での話によると、村で一流の人物は村長には就任しないといふ。一流の所謂豪農たちは、さういふうるさい仕事を、村で二流の比較的知識ある者に押しつける。所によつては、村の一流の人物たちから、金を貰つて就任するものもあるといふ。

ところで問題になるのは、村長の威嚴が十分村に行き渡らないといふ惱みである。近來村に分擔される奉仕作業が多い。さういふ場合に村長の力が十分でないために、村民をよく公平に動員させることが出來ないといふ狀態が起つてくることがある。

即ち一流の豪農には、村民は經濟的、情實的な樣々な紐帶があるから、否應なく左右されるが、二流出の村長にはさういふ意味からの束縛がない。そこで、村民は良く言ふことをきかないといふことになるのである。

豪農によつて左右されてゐた村なるが故にいつまでも舊農村封建社會を脱し得なかつたのである。知識人の村長と相呼應して、村民の中の青年層が目覺めることによつて、村の中軸は確立する筈である。だがさういふ村の新風が激しく捲き起りつゝあるとは、現在のところいへないのではなからうか。

現にある村の屯長を訪ねたところ、どうも屯長などをやつてゐると、いろ〳〵金は要るし、時間を喰ふことが多く、その上屯のものからは餘り好い顏をされない、實は自分の息子も世話好きで、いろ〳〵立廻つてゐる方だが、もうそんなことは止して、少しは家の仕事をしろといつて、遠く離れた耕作地の管理に出してしまつてゐる、と語つてゐた。

（十五年九月）

綏化行

七月十六日朝、網戸から吹き込む雨で眼が覺めた。時計を見ると七時少し前。

今日は日曜日なので、T氏と一緒に綏化に行く約束になつてゐた。一度文通しただけの綏化縣農事合作社の滿人のCさんには、今日訪ねるといふ電報まで打つてある。

ぼんやり窓から眺めると、重さうに風に搖れながら、楡や泥柳の梢から雨滴を落してゐる。庭には傘もさゝない守衛の露西亞人がゆつたりと歩いてゐるのが見え、垣根の外を紺色の大きな洋傘をさしてゆく滿人も眺められた。

時間が近づいたので、兎に角待ち合せの約束をした哈爾濱驛まで出掛ることにした。レインコートを着て宿舍を出ると、雨は思つたより激しく煙つてゐた。

北鐵倶樂部の附近は、樹木が多く、延びるだけ繁茂した樹々に、雨が強くしぶいてゐる樣子は、幾日も降りつゞいてゐる霖雨のやうな感じであつた。宿舍の前に小型の電車が停つてゐた。繁々と降りしきる雨、その街中に悠々と停つてゐる電車の樣子は、荒い世の波

をやつと支へてゐる小さな盾の感じ、この小さな盾の中に雨の降り込んでこないのが不思議のやうにも感じられて、僕は坐ると車内の人々の顔を眺めた。

中央寺院で降りたが驛に向ふ電車の出場所が解らないので、樹木に包まれたゆるい傾斜の街路の果てに見えてゐる驛まで歩き始めた。一臺二臺電車に追ひ越された。急いだのでぢつとりと汗ばんだ。

驛に着いたがT氏はまだ見えない。僕はまた一頻り激しい降りになつた雨を眺めて、これは遂ひに一人で行くことになるのかなと思ふ。

二等待合室の隅に、カトリツクの神様の祭壇がある。待合室に立つたり掛けたりしてゐる人々は、まるで無關心でゐる。蠟燭の燈がほの〳〵と燃えてゐる。滿人の小孩が祭壇に近くヂツと立ちつくして眺めてゐた。

發車の五分前ぐらゐになつて、レインコートを着たT氏が來る。八時二十分發の汽車は、九時になつてやうやく發車した。

三樺樹から、松花江の鐵橋にかゝる頃になつて、雨は次第に晴れてきた。

間もなく、北滿の沃土地帶に入る。ゆるい傾斜の、稜線の涯まで大豆畑がつゞいてゐる。羊草の繁つた濕地帶らしいところも過ぎる。驛を出ると直ぐ大豆畑といつた小驛でも、ぞろ〳〵と荷物を抱へた滿人が降りる。一體どこに歸つてゆくのだらうと思ふ。この線では最近實施の集團部落も形成されてをらず、楡やドロ柳に圍まれた昔ながらの屯が點在してみえた。

綏化に着いたのは正午過ぎてゐた。驛舍に入つて日本人を探してみたが誰もゐない。構内に沁みついた匂ひは滿洲の匂ひだつた。

驛前は廣場で、左手の方に煉瓦建ての鐵道局宅らしい一廓が見えた。僕らは、馬車に乘つて城内まで行つてみることにした。馬車夫は少年で瞬時の暇もなく二頭の馬に聲をかけてゐた。泥濘の道をひどく傾いて、今にも路上に投げ出されさうになり乍ら走つた。

少年には行先を言つてない。彼は一人合點で馬に頻りに聲を立てゝ走らせる。驛前に眞直ぐに廣い道が貫いてゐて一緒に下りた人々が馬車を走らせてゐるので、それが城内に通じてゐるのだらうといふことは僕らにも解つた。しかし合作社は必ず糧穀の輸送關係から驛の近くに在るに違ひないと思ふのだが、それらしい建物は見えない。

道路が西に向つて大きくカーブする邊りで、左側の大豆畑の先に、丁度驛前から見えた

局宅の煉瓦建て住宅街の盡きたところに褐色のスマートな會館風の建物が見えて、屋上に赤い旗が飜つてゐた。僕たちは、あれは何だらうと言つたが、まさかこの街の映畫館でもあるまいと笑ひ話にしてしまつた。西に向つて折れてから、しばらくすると、城内の北門を入つた。驛から二粁近かつた。

日本人に逢つたら合作社を尋ねてみようと思つても、大概洋車か馬車に乘つた人たちで尋ねる暇もない。僕らは馬車を降りて歩き始めた。

土木關係の出張所の看板が出てゐる前に、ぼんやり立つてゐた、和服の人に尋ねてみたが、さアこの邊にそんな看板を見たことありませんねといつた返事だつた。

一年近く前から、この街の合作社を訪ねてみたいと思つてゐた僕には、この返事は物足りなかつた。

「街の日本人は、合作社なんて知りやせんよ」T氏はあつさりと言つた。

暫く行くと、綏化商工公會といふ看板を始め問事處、物産陳列館といつた看板が十近く掛つた木の門が在つた。入つてゆくと、中央に、廟みたいな御堂があり、左手に讀書館と書いた小さな建物、右手に商工公會の事務所があつた。そこでやつと合作社は、城内と驛の中間位のところに在るといふ事がわかつた。

僕らはまた馬車で引き返した。教へてくれた煉瓦が澤山積んであるといふ目標はどこにも見えなかつた。馬車を下りた。そこは先つきの會館の見えるところだつた。或ひはあの建物が合作社ではあるまいかと思ひ出した。といふのは他にそれらしい建物が見えないからさう思つたので、僕らの概念では、合作社が會館のやうに立派な建物であるとは考へられなかつた。

その建物に向つて、六米幅の道路が大豆畑の間に拓けてゐて、大車の轍の跡が泥濘に波打つてゐたので、或ひはあそこが合作社であるかもしれない。さうでなくてもあの近くに合作社があるのであらうと信じ初めた。僕らはとに角行つてみることにして大豆畑に沿うた畦道を進んだ。……近づくと屋上の旗の模樣は、がつちりと組合された二つの鎌であることが解つてきた。前の廣場に農耕用のトラクターも二臺置かれてあつた。合作社にちがひない。建物の中からは、ピンポンの輕快な爽音がきこへてゐた。

僕らがドアーを開くのと同時にピンポンの音は止んで、近づいてきたのは、色の黑い童顔で、やはい笑顔を浮べた人だつた。

「Cさんぬらつしやいますか」

「私Cですが……」

さういひ乍らCさんはもう僕らを、銀行式にカウンターで隔てられた事務室内の奥まつた應接室に率ねていつた。

壁には「趕快來換好黄豆種籽吧」といふ文字の入つたポスターが掲つてゐた。大豆の品種改良宣傳のためのものであらう。……僕がCさんを知つたのは、Cさんが合作社の仕事で縣下の農村に入つたとき經驗されたことや、見聞された挿話や、それらを雜誌に連續發表されたとき、僕はCさんの書かれたものを、僕の作品の一部に使はしてもらつたことがあつた。そのことをCさん宛て承諾を求める書翰を往復したのだつた。今ここにCさんぬ手紙を寫してみると、

「拜復。お手紙とお大作を有難く拜讀致しました。私書いた樣な拙ないものでも御褒め のお言葉を致しまして誠に恥しい次第です。もし御參考の所がありましたら御遠慮なく使つて下さい。突然お知らない貴方からお手紙を頂きまして私としては非常に嬉しいでございます。云々（以下略）」

ではなぜ僕がこの一年間頻りに綏化の農事合作社を見たがり、そこに働いてゐる人の書いたものを注意して讀むかといふのは、滿洲國は要するに農業國である。而もそこには舊東北政權の壓力のもとに、當時農村には土豪劣紳の徒が政治、經濟兩方面から支配權を握り、土地は大地主に偏在し、一方零細自小作農民は、糧棧、典舗その他の中間搾取の餌食となり、また實際的に滿洲農產の決定的部分を背負つてゐる年工、月工、日工らの農業實踐體は、飢餓線を常に彷徨してゐる狀態であつた。

滿洲國になつて、治安は確立され、その他直接間接に行政の刷新された點も亦大きいであらうが、農村のみを對象に、然かも農業中堅者層に重點を置いて、農村に働きかけた事業としては、農事合作社制度を除いては外にない。現在よく效果を擧げてゐるとは言ひ切れないだらうが、虐げられた農業實踐體の問題が深き關心を以て、農事合作社指導者の腦裏にあるとき、その機構、そこに働く人々、農村との結びつき、農事合作社精神の反映した農村の樣相といつたものが、滿洲文學の當然手をつけなければならないテーマとして僕には感ぜられたのである。

名刺によるとCさんは、金州出身の人であつた。州内出身の人が多く滿洲國の官吏とな

つて活動してゐるとはきいてゐたが、北滿の一角にあつて、中堅農民の經濟確立といふ長期的には餘り華々しくもない仕事に一身を投げ出してゐる人もあるといふことが、迂遠ながら僕には新しく認識された一つであつた。

「明後日から、小麥の收穫資金を貸すために、八班に分れて縣内の屯子に入るところです」

Cさんは、ゆつくりと日本語で話す。顎に數本のマバラ髯が見える。Cさんの聲はその溫顏に似合はしい、溫い感じの大人しい低音だ。

「それはもう一寸でお逢ひ出來ないところでしたね」

Cさんとやうやく逢へて、ゆつくりと話がきかれるといふ喜びに少し安心してしまつたのか笑顏を交へてゐるだけで僕はもう滿足に近いものを感じてきた。

「貸與資金はどの位です？」

T氏が質問した。

「十萬圓です。……今は丁度この地方では大豆の開花期で、小麥の收穫期です。ところがどうも雨が少し多いもんですから、心配してゐます」

「はア、收穫の近い小麥には、雨は惡いわけですね」

「えゝ、いけないですねえ」

Cさんは、相變らず溫顏をたゝへて、ゆつくりと返事をし、窓外の、黑雲の流れてゐる空を眺めるやうにした。

「いま日用品はどんなものを配給してゐるのです？」

僕が尋ねた。

「專賣品だけです。それも豫定の石油、洋火が手に入らないもんですから、今年は鹽だけです」

直ぐ夜になつても燈のない農家の姿が、想へてきた。

「まア、石油の要るのは、冬ですね。夏は日が長いし、暗くなると寢てしまひますので」

僕らが話してゐると、事務室に入つてきて、應接室を覗き込むやうにした人があつた。やがて近附いてきて、名刺を呉れた。やはりここの合作社の人であつた。眷のずんぐりと低い、丸坊主にして頰髯の濃い國士型と一見される風貌であつた。その人が坐り込むと、

Cさんの話を引取るやうにして、合作社の一般について説明を始めてくれた。僕らは一般的な知識よりも、農村に良く入つてゐる滿人の知識人であるCさんの口を通して、少しでも農村の空氣に觸れたかつたのである。日本人の人は親切から話し始めてくれたのかもしれない。しかし殊によつたら、Cさんの口から除り「ツマラヌコト」の洩れるのを恐れたのかもしれない。いづれにしても僕らには有難迷惑に近かつた。

その間に爲された説明の要領と質問の答へを書いてみると、

地主は合作社員として認めないが、その他では屯で入らぬものはない。初め屯に實行合作社を組織するには、甲長を説き伏せないとうまく組織できない。甲長は經營農で、土地の識者として信頼されてゐる者が多いからである。初め屯に入ると、また何か稅金でもとられるのではないかと疑はれることが多い。合作社の仕事を説明して、「かういふ施設が出來るのを待つてゐたんだ」などと即座に歡迎したものなど一人もなかつた。年工、日工といつた勤勞民を役員にと思つてゐるが、やはり甲長始め中層農民を利用しないと成立し難い。現在では日工、年工といつた連中は完全に近く合作社に信頼してゐるやうだ。

（實行合作社組織成績表）

康德4年	46社	4,900名
康德5年	126社	14,000名
康德6年	207社	18,000名

尙、綏化縣の農家戶數は大約五萬戶との事だから、實行合作社員數は五分の二弱に當らう。これを土地耕作關係から眺めると、例へ小作にしろ耕すべき自分の土地を持たない、日工、年工といつた農業勞働者が、五割二分を占めてゐる。これは北滿全體からみると、もう少し率が高くなつてゐる筈である。

次に信用貸款に就いては、二十晌以上所有の中農は、土地擔保で金融合作社より融通を受けてゐる。農事合作社では現金給與よりも、現物給與の場合が多い。對象が貧農が多いためである。その貸與した小米さへ、他への負債の償ひに用るといつたことが良くある。

たゞ合作社が多額の小米を買付けると、直ぐ市價を高めるので今春は、現金貸與をしたとのことであつた。昨年の返還不能者は二パーセントで、それも主として水害地區の者だつたといふ。返還不能者には、今年は貸さず一人當り小米半噸宛無料給付した。

年工、日工らは、舊正過ぎから除草期頃まで毎年食糧が缺乏し、合作社から借りる譯だが、合作社も亦毎年これを反復して年中行事みたいになつてゐるが、年工、日工らをかゝる困窮狀態から救出する、冬季授產或は國內未耕地開拓といつた方策でもないか、と尋ねてみたが、何らプランもないやうであつた。

年工は、舊の二月二日が、雇傭關係の更新期で、移動し始める。殆ど縣內だけで縣外へは移らぬ。それは多少でも條件のいい、利益になりさうな處へ移動する。年工は年額百五十圓から二百圓までがこの地方での相場だといふ。

日工の一年に働ける日數は、僅かに七十日から百日にしか滿たない。三天事といつて、三日間毎の契約だ。除草期と收穫期に最も需要がある。除草期に入れば遊んでゐるものはない。賃銀は高いときで、二圓八十錢、今年などは勞働力が不足なのと物價高で三圓位にもなるといふ。しかし日給三圓でも、七十日しか働けないとなると、年收二百十圓にしか當らない。日工は多くは、現物給與、粟などで支拂はれるといふ。日工の市は各地方の鎭にて立つ。そこで契約されて屯に入つてゆく。一本の鍬と蒲團を擔いで、日工たちは契約先に入り込んで行くのである。

勞働は、一日を七回に分けて、その間に約五分づつ休息する。正午まで三回、午後四回、北滿の朝は早く明け、日沒は九時近いので日に四回食事をする。除草期の勞働率は、一晌を除草するに、一日一人半位を要する。

日工たちは、冬季に入ると、極く僅かのものが行商をするが、大部分は炕の上に敷くアンペラを編むとか、炕に焚く草を刈り集めるくらゐで、長い冬を全くの冬眠狀態に入るといふ。

合作社では糧穀を運搬する大車のないところへは出張して買付、合作社のトラックで運搬してくるとか、綏化地方でも、あと五年もしたら施肥が必要なので、堆肥の實驗をさせてゐるとか、年工、日工の勞働力の乏しい地方へは、スレツシャー、トラクターなどを貸してゐるといつたやうなことを聞いた。

農業倉庫は、合作社で品質の格付けをして、糧棧側とは證券賣買をしてゐる。合作社側

では全滿の相場を公示して農民の參考にし、相場の見透しも亦公表する。農民は相場が安すぎると思つたら、賣らないで、その證券を擔保に合作社から金融を受ける。

僕らの素人考へでは、相場の見透しと、合作社から金融を受けた場合の金利を考慮しての損得計算など、農民の良く爲し得るところであらうか、疑問であつた。

日本人の人は、説明し乍ら、時々Cさんの意見を求めてゐた。それによつても、Cさんがこゝで深く仕事に沒入してゐるといふことが伺へた。話し中Cさんは、立つて書棚から騰寫刷の印刷物を五、六通出してきて、卓の上に出した。日本人の人は、それを點檢して三つばかりを「これは」と言つて握つてしまつた。僕らが貰へたのは「實行合作社名簿」「定款」「康德六年度事業計畫書」の三通だつた。

日本人の人は、説明が終ると、もうこれでお終ひです。といつた顏附だつた。僕らは辭し去らなければならない。恐らく説明も僕らが何の質問も發しなかつたら、もつと手短く簡單だつたにちがひない。僕らはCさんに逢ひに來たのだ。けれど今はCさんとの間に一枚戸を立てられてしまつた感じである。それは違つてゐたかもしれない、思ひすごしであつたかもしれない　しかし僕らは不滿だつた。

現在亞麻は國策の必要から作付を割當てられてゐるやうだ。農民にとつては、亞麻の栽培は手數が他の作物の二、三倍もかゝつて、收入は其の割に合はない。「亞麻を作るよりは首をくゝりたい」といふ聲もあるさうだ。けれど國策なれば負擔しなければならない。さういふことは僕らも理解してゐる心算だ。亞麻に限らない、もつと樣々な事態によつて、農民がもしも疲弊し廢頽したら、大東亞建設の理想の立派さに傷がつく。滿洲に於ける文學の使命は、高邁なる理想の把握と現實に在るものへ、科學的に執拗に喰ひ入ることであらう。さういふ日頃の考へが合作社での日本人の人の、何か腹を立ち割つたところを見せて貰へなかつたのと結びついて不滿であつた。しかし名刺を交換しただけの誰の紹介もない、風來坊みたいな僕らであつてみれば、無理な期待であつたかもしれない。

再び馬車に乘つて城内に入つた。商工公會で、話を訊かうと思つたが、朝逢つた人が外出してゐて、日曜日なので他に誰もゐない。

歩際や、食料物店、芝居小屋などのある盛り場に入る　僕らの前を日本人の婦人が歩いてゐる。その人は盛り場の斷れた處の雜貨店に入つた。街には、兩側の店の前に、溝板みたいなものが長く續いてゐる。低い一本橋のやうであるが、雨降りどきの舗道であらう。

商店の前には、木で造つた馬の水飲みがある。店も、ブリキ製品を並べた店、種子屋、反物屋、飲食店、雜貨店などで、いかにも地方の農民の出入りする、農産物の集散地らしい感じである。

僕らは腹が空いたので小奇麗な料理店で、餃子と、豚の天ぷらを食べた。こゝにもでつぷりと太つた番頭みたいなのがゐる。十七だといふ少女の、口をつぼめたどけで笑ふ給仕女の子、母と兄の三人暮しで、通勤で月十五圓とつてゐるといふ。店を出るとき例の支那料理屋でやる、威勢よく聲をかけるのを良くきいてゐると「三毛錢……」と確かに言つた。三毛錢は解つたが後は解らない。三十錢チツプをおいたのだから、「三十錢御祝儀を頂いたよ」とでも聲をかけてゐるのだらうか、若しさうとすると、大連邊りのは符牒で言つてゐるに違ひないと思つた。口元だけで笑ふ少女はドアーを開けて僕らを送り出した。

この街の協和會は貧弱なバラツク建てだ。外から女の人が著物を著換へてゐる胸の邊りが見えた。

馬車宿がある、糧棧がある。陶器の瓶や、酒盃を賣つてゐる露店がある。朱色の素燒で色つけはない。皆少しづゝ傷がついてゐる。吉林からきたのだと商人は言つた。種子を賣る露店もある。

青年訓練所の看板が出てゐる露路があつたので、入つていつてみた。廣い所内の左側に訓練生の宿舍らしいものがあり、部屋の中に生徒が見えた。所内には、池のやうになつた水溜りがあつた。煙草を吸つてぼんやり立つてみてゐると、外から五、六人の生徒が歸つてきた。僕らの傍に近づくと、一人が突然「敬禮！」と號令をかけた。六人の者が不動の姿勢をとつて、手を擧げた。僕らは慌てゝといふより、吃驚りして帽子をとつたが、眼が生徒たちの眼が、僕らが日常にみてゐる滿人たちと正反對に、生氣に滿ち、顏も俊敏さうな青年たちであつた。縣城の訓練所で鍛へられた農村の優秀な青年が、歸村して村の中堅になつてゆくといふことは望ましいことである。それと相俟つて一方に於て行政の善き滲透が爲されなかつたら、彼らの優秀さは却つて逆の効果を生むことであらう。

城内を出て驛に近づくと、學校歸りの日本の小學生たちに出合つた。時間はもう五時近かつた。皆んなゴムの長靴を履いてゐる。「日曜もあるなんて、つまらない學校」少年が僕らの傍を通りすぎるとき私語いてゐた。赤煉瓦の社宅街の方に歸つて行く。一、二年の小さな子も一緒だし、日曜もあるとはどういふわけだらうと思つた。

まだ發車まで一時間あるので、驛近くのウジナといふカフエーで、サイダーを飲む。今哈爾濱の方から來た列車で着いた連中が、ビールを飲んだり、飯を食つてゐて一杯であつた。鐵道や土木關係の人が多いらしく、サラリイマン臭い服裝は僕らだけだつた。雲間から蓄音機が鳴り、女たちが席についてゐる。部屋の中央は夜になるとダンスでもやるらしい樣子だつた。驛前の廣場の木蔭に、モンペを覆いた婦人や、數人の男たちが坐りこんでゐた。

汽車は一時間延着といふことであつた。驛前の掲示板に拾得物公示が出てゐた。「七月十四日八時許、綏化車站前廣場拾得物、小馬駒一匹、頭部黄色、身部黄色、足部白色、綏化鐵道警護隊」

僕らは構内の木柵の外に在る砂利積場の上に轉つた。樹木の枝が身體を覆ひ日除けになつた。靜かに眼をつむつてゐると、汽罐車の音が聽へたりして、ふと少年時の上野の山に在るやうな思ひがした。……上野の山をこのとき位遙かに感じたことはない。近くの兵舍からラツパがきこえてきた。日射しはずうツと西に傾いてゐた。

（十四年十月）

あとがきに代へる雜記

「幽默」といふ散文詩集のやうな本も甚だしく愛好するが、私は、彼の感想雜記集の刊行の日も又心ひそかに待つて居つた。

この本は最初「樣々なる思ひ」といふ題であつた。

書店の希望をいれて、著者は「文藝時論集」と中途から改題したが、私は「樣々なる思ひ」の方がやはりいゝのぢやないかと、私なりに思つてゐる。

この本の目次を見る時、およそ分るが、著者は實に樣々なことを想ひ、惱み、心痛し、立腹し、怒罵してゐるのである。私は著者の心痛をきゝながら、概ね素直に同感の憂悶を抱く。けれども時たまには、その心痛の凄しさに暗憺としてしまう。けれど彼の心痛は救ひのないやうな、仕樣のない心痛で完はるのではなく、必らず明るみ一點をみつけだしてゐてくれる。

私らが安心して彼の心痛をきいてゐることが出來るのは、そのためだらう。近時、どう

にもならぬ心痛を、たゞもう一途に心痛するだけでゐる手合が多くて、私らはどれだけつまずき、ひつくりかへつて居ることか。解決の明るみなき心痛は、職爭いよいよ苛烈凄烈な近時には、甚だしく有害無益である。

私らは、だから、心痛のあまりに多い昨日今日は、心痛だけを放り出して居らぬ青木實氏の樣々の心痛を、素直に心痛し、明るく又一歩踏みしめてゆきたい。

彼の怒罵一喝も、或る日或る時には、神經に刺さり、一喝に一喝を酬ひて涯もない論爭と抗議が湧いたものであつたが、彼はしかし一喝の後にはさびしくも沈默するのが常であつた。

世に怒り蟲は多い。

青木實氏も一種のこの怒り蟲である。

怒らざる人よりも、むしろ怒り蟲は愛されていゝ。

怒らざる人は、概ね出來た人とも呼ばれて尊敬されてゐるやうであるが、怒らざる人の其の心中のモダモダをおもふと、私はやりきれない。佛樣のやうな人は別である。私は、一喝の後は淋し氣に默つてしまつてゐる怒り蟲の心の方が好きなのだ。

彼の一喝は、正しいことが、正しいとされないときに於て發生する。

私らは酬ゆるに一喝を以つてせず、やつぱり素直に一喝喰らつた方が爽やかであつたこと、その爽やかなる記憶の方が多いのである。

彼の怒罵、そして心痛憂悶は、文學の世界から、國の政治、經濟に及び都市農村の生活にひろがつてゆく。

彼はまことに心痛多いのである。

巷の塵埃に停んで、ふとも吃く青木實氏の溜息を、私らは此の一冊のあちらこちらからきいてみよう。怒り蟲の一喝を、反撥することなく喰つてみよう。私らは善意のあふれた正義の勁い聲をきいてみよう。

私は今夜も又左樣に思ふのである。

皇紀二千六百四年四月二十九日の
住き日の晩に

町原幸二

著者は現在、滿鐵殖產局
發路課勤務。
滿洲文藝家協會委員。
作文社同人。
著書としては『北方の歌』
『幽默』その他。

文藝時論集
郵便振替口座番號 1088號
奉天 大阪屋號
不許轉載

昭和十九年八月二十日 印刷
昭和十九年八月二十五日 發行
定價 三圓五拾錢 (二〇〇〇部)
著者 青木實
發行者 大谷直定 奉天市大和區春日町六號
印刷者 瀧山米造 奉天市鐵西區宿工街一ノ四一
配給元 滿洲書籍配給株式會社 新京特別市五馬路一〇七號
發行所 奉天大阪屋號書店 奉天市大和區春日町六號
會員番號 一〇四一番
電話 ⑥二五二九番
振替 奉天三三一番
(新天社印刷株式會社)

滿洲電信電話株式會社
No. 20826
昭 19.11.4 和
奉天圖書館

0
68
月

植野武雄著	滿支典籍攷	價 三・〇〇 送 一六〇
岡野鑑記著	民族協和の具現	價 二・五〇 送 一六〇
春山行夫著	滿洲の文化	價 三・五〇 送 一六〇
長谷川兼太郎著	支那民話集	價 三・五〇 送 二〇〇
關屋牧著	滿洲牧場記	價 三・五〇 送 一六〇
村山釀造著	滿洲の森林と其自然的構成	價 四・〇〇 送 一六〇